

まちづくりと中心市街地活性化に関する報告書

()

～福島県まちづくり懇談会の軌跡～

平成14年3月

福島県中心市街地活性化対策推進本部

目 次

1 概要	-----	1
2 県民等の意見・提言	-----	3
3 有識者の意見・提言	-----	102
4 市町村長の意見・提言	-----	117

第 章 福島県まちづくり懇談会の軌跡

1 概要

まちづくり懇談会は、平成13年8月1日にホームページを開設し、9月には県民等との懇談会、10月に有識者、そして平成14年1月には市町村長との懇談会を、計13回にわたり、県内各地で開催した。

その意見・提言の要旨及び全記録を掲載する。

ア 県民等の参加数

月日	方部名	公募参加者	一般参加者	計
9月7日	県北	46	80	126
9月6日	県中	37	24	61
9月5日	県南	29	20	49
9月4日	会津	44	30	74
9月11日	相双	25	28	53
9月12日	いわき	24	90	114
計		205	272	477

イ ファックス・メール等による意見数

期間：平成13年8月1日から平成14年3月11日まで

ホームページ・アクセス数：約 2,418件

方部別	意見数(件)
県北	28
県中	14
県南	14
会津	25
相双	9
いわき	26
計	116

ウ 有識者との意見交換

NO	所属団体	役職	氏名
1	福島県商工会議所連合会	会長	坪井 孚夫
2	福島県商工会連合会	会長	田子 正太郎
3	福島県中小企業団体中央会	会長代理	新澤 昌英
4	福島県大規模小売店舗立地審議会	会長	相良 勝利
5	福島県都市計画審議会	会長代理	後藤 忠敏
6	(株)中合	代表取締役	篠原 裕信
7	(株)ヨークベニマル	専務取締役業務本部長	清野 眞孝
8	日本政策投資銀行	調査役	藻谷 浩介
9	ふくしまNPOネットワークセンター	代表	佐藤 和子
10	日本大学工学部	助教授	土方 吉雄
11	福島県	副知事	川手 晃
12	"	商工労働部長	山口 忠宏
13	"	土木部長	雨宮 宏文

エ 市町村長との意見交換

月日	方部名	市町村長等	一般傍聴者	計	備考
1月8日	県北	16	92	92	知事
1月16日	県中	17	40	57	出納長
1月16日	県南	12	72	84	副知事
1月22日	会津	21	61	82	副知事
1月22日	南会津	7	41	48	出納長
1月24日	相双・いわき	15	83	98	知事
	計	88	389	461	

2 県民・商工業関係者等の意見・提言(要旨)

課題	項目	視点	主な発言内容の要約
大型集客施設の在り方について	まちづくり三法	まちづくり三法の問題点	大店立地法は、立地そのものについては議論の余地がなく、生活環境に配慮していれば出店可能というのでは問題が多すぎる。
			三法施行後、空洞化に歯止めがかかったというところはないと認識している。都市計画法の規制が弱いのではないかと考える。場合によっては、もっと大きな枠組みの中で独自条例を視野に検討すべきではないか。
		「まちづくり」のビジョンの明確化	大型店は広域的な商圈を持つことから、立地による影響は広範囲に及ぶ。大型店立地の是非を考える前に、まちのあるべき姿、土地利用計画をきちんと決める必要がある。
			少子高齢化の進行、財政赤字の拡大といった中でマチ拡大はムリ。社会資本の整備されている中心市街地を中心とした「コンパクトなまちづくり」を進めていく必要がある。
		土地利用計画(ゾーニング)の必要性	「どういうまちにしたいのか」、「どういうひとを集めたいのか」、「どういう人を住まわしたいのか」という上位概念を明確にする必要がある。
			商業集積の必要な地域、年寄りのために必要なものをそろえることが出来る地域などバランスよく配置し、地域ごとに差別化を図っていくようなまちづくりが必要なのではないか。
	バイパスを新たにつくると商業集積が移動し、新たな混雑が起こる。土地利用制度に問題があるのではないか。		
	広域調整の必要性	未線引きの都市計画区域がたくさんあることが問題である。市町村の枠を超えた生活圏単位での土地利用計画が必要である。	
		市町村単位でなく、生活圏単位でこれからのまちづくり(土地利用)を考えて行くべきではないか。	
		隣接市町村に大型店が出店することによる問題に対しては、しっかりとした理念の下、住民の生活を守る観点から行政主導による調整が必要。	
	公共・集客施設	適正立地のあり方(都市機能)	商業集積や大型店の在り方には、近隣市町村とが連携した広域的な調整が必要であり、その指針となるガイドラインによる規制が必要である。
			ニュータウン、公共施設の郊外化で空洞化が顕著となった。立法的に強制的に、まち中にこれらの施設等を集積していくような施策・方針を行政側で打ち出すべきでないか。
	大型店	郊外立地の問題点(位置づけ)	商業機能だけで中心市街地の空洞化を阻止できない。公共施設(文化、教育、医療等)を中心部に呼び込むべき。
			これまでの流れとは逆に、公共施設や文化施設などを中心市街地に配置して交流人口を増やすべきである。
			これからのまちづくり(土地利用)を考えて行くべきではないか。
大型店の果たす役割は大きいですが、郊外に立地すれば商店街が疲弊する。いかに大型店を中心部に呼び込むかが課題である。			
撤退時の問題点	大型店の郊外化により、まち中から小売店(特に生鮮店)が消えていき、ちょっとしたことで郊外にいかないと買えなくなっている。		
	大型店は、事業活動の範囲を超えた社会的責務を大いに課せられていることを十分に考えなければならない。		
	大型店は儲からないとすぐ撤退する。交通手段を持たない者是对応が難しい。住民密着型の店舗が必要である。		
その他	大型店の撤退は、地域経済に与える影響が大きく、しかも撤退後の施設活用が明確でないことからまちづくりに支障をきたす。撤退後の土地利用をきちんと決める必要がある。		
	大型店の立地が進めば、将来、撤退が相次ぐようになり、地域社会に大きな影響を与え「大型店出ていかないと運動」が逆に起きてしまう。		
		車で移動が主である限り、駐車場の整備された大型店に行くのは当然。	

2 県民・商工業関係者等の意見・提言(要旨)

課題	項目	視点	主な発言内容の要約
中心市街地活性化	吸引力の向上	商店街のあり方	郊外の大型店と中心市街地という構図では対抗出来ない。商店街を一つの大型店とみなし、横のデパートとしてまとまった活動、まちづくりを考えていく必要がある。
			郊外の大型店などには「利便性や実利」を求め、中心商店街には「心、癒し、出会い」というものを求めている。
			商店街だけでは消費者ニーズに対応できない。大型店と共に担って行く共存共栄の姿が望ましい。
			住宅兼商店、文化施設兼商店、託児所兼商店といった一体型の複合施設を増やし、「職住接近」を図る必要がある。
		魅力ある個店づくりの必要性	中心市街地(商店街)に、常に人が集うことが出来るサロンのな場所(施設)があれば、活性化に結びつくのではないかと。
			商店街を活性化するもっと別の切り口が必要なのではないかと。高齢社会と商業振興をどうマッチングしていくのかがこれからの課題。例えば、高齢者、身障者用の店づくりのための支援策の拡充が必要なのではないかと。
			店舗内にギャラリースペースを設けることにより賑わい創出の一助となっている。こうした取り組みを商店街一丸となって行えばいいのではないかと。
			商店街振興組合などの団体に対する補助に加え、これからがんばろうとしている個店・個人に対しても支援があるべきではないかと。
	空き店舗の活用	現在の社会状況を考えれば、子育て支援施設の充実が必要と思う。空き店舗を活用できれば、中心市街地の活性化に結びつくのではないかと。	
		どんな年齢層も集うのがマチ。空き店舗の一面を学生に使わせれば、学生の情報発信基地となり、にぎわい創設になる。	
	後継者育成の必要性	まちづくりは人づくり(後継者育成)が必要。後継者が夢と希望を持って商売出来るような環境づくり、ネットワークづくりが必要である。	
		商店後継者育成のための融資制度ができないものか。	
	快適に過ごせる環境づくり	生活者の視点によるまちづくり	拡大基調でない中での郊外展開は中心市街地の空洞化を招く。社会資本の充実した駅前を中心としたまちづくりが居心地のいいまちである。
			まちなかに気軽に使える集会施設やホール、その付近には託児施設などを整備し、たくさんの方が参加できるような環境を整えることが大切である。
雑然としたまちの中でいろいろ経験しながら育つのが、子供たちの情操教育に役立つ。まち中の横道に入ると何か発見できるようなまちづくりを望む。			
ユニバーサルデザイン・バリアフリーのまちづくり		何も時代に逆行して中心市街地を活性化しなくてもいいのではないかと。マチの重心は移動するもの。住み良いまちを実現すればそれでいいように思う。	
		車中心のまちづくりとなっている。歩行者(特に、高齢者、子供)にやさしいまちづくりを望む。	
		障害者をまち中に迎入れるような土壌が育っていない。身障者にとって使いにくい施設がまだまだ多い。	
中心市街地は、住民が生活する器であり、そこは誰もが利用しやすい空間でなければならない。まちそのものがユニバーサルデザインでなければならない。			
郊外展開により、年寄りが片隅に追いやられているのが現状。買い物を歩いて楽しめるような環境づくり、高齢者にやさしいまちづくりを望む。			

2 県民・商工業関係者等の意見・提言(要旨)

課題	項目	視点	主な発言内容の要約
中心市街地活性化	快適に過ごせる環境づくり	魅力ある空間づくり	商業機能、文化機能、行政機能を併せ持つような面的な都市基盤の整備が必要である。
			人気の店があってもストリートそのものに魅力がないと客足は遠のいてしまう。魅力あるイメージを持ったストリートをつくって欲しい。
		小学校の学区再編の必要性	小学校の学区再編をすればまち中に子供が戻ってくる。中心市街地の活性化は商業からではなく、小学校の学区再編から考えるべきと思う。
	来易さ	利用交通手段の見直し	公共交通を利用したまちづくりが必要。少人数でも利用できる公共交通手段を考えて欲しい。
			中心市街地に来る人がどんな交通手段・目的で来ているのか調査すべき。郡山駅前は無料駐輪場とするなど、自転車利用者に対する配慮が必要なのではないか。
			交通弱者に対して、公共機関がどのような移動手段を提供するのが重要である。
	居住人口	居住人口の増加施策	市街地は人が住むことにより成り立つ。利用されない空き地の流動化により多くの人が住めるような施策展開を望む。
			中心市街地の居住人口を増やす必要がある。特に、これからの高齢社会を考慮して老人が住みやすいしくみを構築していくべき。
			これからの公営住宅の新設は、まち中に限定してほしい。
	実現に向けた仕組みと環境づくり	住民参加によるまちづくり	行政主導でなく、住民(ボランティアを含む)と連携したまちづくりのシステムを構築すべきである。
			これからは、市民からの発意のものをまちのなかに展開していくことが大切である。
			住民中心のまちづくりも必要だが、まちづくりのプロとの協力が大事。実践を伴うものでなければならない。
			住民に対しては、街の方向を「キャッチコピー」と「ビジュアル」で浸透させていくという手順が必要である。
		まちづくりを持続的に展開していくには、行政と市民との新しいパートナーシップの構築が重要である。	
		行政支援のあり方	商店街活性化等のための補助事業の補助期限は、画一的に決めるのではなく、実情に応じて柔軟に対応できるようにして欲しい。継続して行ってこそ意義のあるものもある。
			創業者支援メニューはいろいろあるが、長期的視点に立った支援やアフターケアが不十分のように思われる。
	市街地のある程度まとまった地域での開発をする際(パティオ等)に、移転費用や権利関係などハードルが高すぎて実施に至る前に挫折してしまう。行政の支援メニューを要望する。		
	再開発ビルは、区画整理事業を立体的にやろうとするもので今の時代に合わない。別な手法による再開発を指向すべき。		
行政に対する融資申込・補助申請のための書類作成に金と手間がかかりすぎる。もう少し簡素化できないか。			
民間と行政との時間のズレを解消し、適時な支援が必要である。			

2 県民・商工業関係者等の意見・提言(要旨)

課題	項目	視点	主な発言内容の要約
中心市街地活性化	実現に向けた仕組みと環境づくり	行政支援のあり方	商店街振興組合などの団体に対する補助に加え、これからがんばろうとしている個店・個人に対しても支援があるべきではないか。
			商業、医療、福祉、住宅などの部署が施策を分散して行うのではなく、グループ化して実行する必要がある。
			理解のある地権者だけを見つけて、その土地を安く(固定資産税+相続税を将来払えるくらいの積み立ての賃料で)借りることが重要である。
			行政は、市内における大きな地権者であり、都市計画における道路空間の路面や公共広場などは、センス良く有効活用することが求められる。
		税制見直しの検討	中心市街地の活性化を図るため、固定資産税、相続税の軽減等税制面での見直しを検討してほしい。
			地方行政の努力が、税財源などによって、地方行政に反映されるメカニズムが必要である。
		TMOのあり方	一行政区に-TMOしか認定できないのでは、複数の核を持つ行政区の中心市街地の活性化はできない。制度改正を望む。
			TMOは、自分の活動エリアだけでなく周辺地域との調和を図りながら事業推進していくべきである。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（県北1部）

女性、20代（福島市）

福島市内ですと、若い人にとって遊ぶ場所ですとか、そういう施設があまり多くないと思うので、もう少し若者も楽しく遊べるような施設をたくさん造ってほしいと思います。

男性、50代（月舘町）

「まちづくり」にこれをやれば必ず成功するという決め手は現在のところないと考えています。しかし、「まちづくり」はやらなくてはならないと思います。今朝、NHKのテレビで福島市内であれば何処から乗っても100円のバスが走ると放送されていて、これは通勤に良いことだと思った。その他、買物者のためのバスもあるようで良いことをしていると思います。

地元では非常に過疎化が進んでいて、去年から今年にかけて多数の店が廃業し、どうすれば活性化に結びつくのかと考えております。

男性、60代（本宮町）

「井戸端会議」は創立3年の若い団体ですが、私達は障害者だけの団体ではなく、障害福祉に関心のある健常者との団体です。障害者が社会参加するに当たり、オンブズマンの観点からではなく、行政が気付いていない面を実際に体験しながらチェックし提言するという活動を行っています。

郊外の大型店については、将棋大会の記念品の購入先を考えたときに周囲から郊外の大型店は安いし楽し簡単だと言われ、実際に郊外店へ行ったところ納得しました。店員の方が商品をわざわざ駐車場まで運んでくれて、別れ際には「また来てください」と言われ本当に親切だと思いました。また、先日孫達に「なぜ毎週郊外大型店に行くのか」と聞いたところ「楽しさや遊びがいろいろある」とのこと。そのことを考えると、郊外大型店には「楽しみ」や「遊び」が存在し、さらにその中に「家族の癒し」のようなものがあるのではないかと感じています。

男性、50代（本宮町）

中心市街地の歴史を見ると、中心市街地は様々な条件のもと自然に発生し形成され、また自然にその形を変化させてきています。「まち」は生きており、時間とともに変化しているため、市街地が賑わった30年前の「まち」をもういちど回帰したいと考えても、それは仕方がないことではないかと思えます。「空洞化」という言葉は好きではありませんが、そうなってしまったのであれば、逆にそれを活かす方法を考えているのではないのかと思えます。

また、従来は店と職場と住居が一緒というのが当然でしたが、車の一般化や駐車場の問題からここ何十年かは団地等は郊外に展開されており、「職と住を一緒に中心市街地に」という話はナンセンスであって逆行していると思えます。もしそれを実現しようとするなら、綺麗な住宅地よりも「中に住みたい」と思わせる「楽しい」とか何らかの「メリット」が必要だと思えます。

男性、20代（福島市）

「若い人がまちの中を歩いていない、どこにいったのか」という話をよく聞きますが、実際に若い人たちの話を聞くと、「自分たちは街中を歩いているのになぜだろう」と不思議がっています。

まちなかを楽しんでいる若者はたくさんいます。しかし、楽しんでいるといっても大通りではなく裏通りが中心であるために「少なくなっている」と言われるのではないのでしょうか。私は決して若者が少なくなっているとは思いません。まちなかには十分楽しめる要素はあると思えます。しかし、若者たちは決してまちなかだから行くのではなく、自分の気に入った店があるからで、もしその店が郊外にあれば郊外に行ってしまうと思えます。「場所」でなく「店」や「機能」に対する「こだわり」で行動しているのだと仲間とよく話しています。

男性、50代（福島市）

私は時々バスに乗ります。今日も乗りましたが乗車時の乗客は3人でした。しかし途中で何人が乗りまた何人が降りて、結果的に満員となり立っている乗客も15人ぐらいとなってそのまま終点の福島駅まで行ったと思えます。

交通手段として高齢者が頼っているのはやはりバスだと思えます。その高齢者を含

めあれだけ多くの方がバスに乗っているというのは、まちには何らかの需要があるのだと思います。

今日のバス乗客の割合は、女性が約半分、高齢の男性が約3分の1、残りは若い人でした。「空洞化」と言っても意外と人はまちに何かを求めてやってくると思います。今後、どういう人達がどういう目的でまちなかへ来るのかという問題について根本から見直す必要があるのではないかと思います。

女性、60代（福島市）

福島に住んで30数年経ちますが、福島の伝統的な建物が多数壊され、福島らしい昔の建物が失われたと思います。無くしたものを取り戻すことはできないため、今後は、新たに「みんなが集えて楽しめる場所」、「人間らしい楽しみや喜びなどの感情表現が出来る場所」が欲しいと思います。

今の福島は、文化施設が旧市街の周辺部にあり大変交通の便が悪いです。まして今後高齢化が進むと車の運転を避けバスを利用するようになり、多くの方が不便な思いを余儀なくされると思います。そういう意味で「街なか」に、若者も高齢者も全ての方が楽しめる場所や自分の感情表現が出来る場所、そういう文化施設があったらいいなと思います。

また、福島では中高生以上の若者が自分たちで「何かをしたい」と考えたとき、それを表現できる場所がないと思います。例えば、金沢市の芸術村では、中高生が遅くまで安い料金で自分たちの表現活動ができる場所がありますが、そういう場所がぜひ福島にも欲しいと思います。そういった文化施設があれば、そこに人が集まり、当然周辺部の商店にも影響がでてまちがもっと賑わってくると思います。

女性、50代（福島市）

パセオ通りにある岡崎陶器さんと意気投合し、「季節感」、「ぬくもり」、「文化の発信」をコンセプトとして、売場の一部を無料で発表の場（ギャラリー）として提供してもらっています。現在は月に2度ほど発表会をしています。発表の予約は来年の6月までいっぱいです。

お店の前には季節の花（自然に近い枯れた感じの）を社長の支援により飾っていますが、そうすると「癒しの空間ですね」といろいろな方が集まります。「散歩コースを変えました」や「毎日通るのが楽しみです」とのお言葉をいただき、仙台など遠方からも多くの方が集まってきました。お客様にも「本当に楽しい」と言ってもらい、時間をかけてお店を見てもらっています。「見るだけ歓迎」という看板も出し、英語でも表現しているので外国の方も多く訪れます。そのことから「魅力的なお店には人は集まってくる」というのが良く分かります。実際、来店者数も売上も増えているようです。

しかし、魅力的なお店には人は集まりますが、一店舗だけの努力では商店街が寂れていくことを防げません。それぞれのお店が魅力を高める努力をする必要があると思います。福島の商店の方は消費者へのサービスや工夫が足りないのではないかと思います。

地元の商店にはお店とのコミュニケーションや専門的な物を取り寄せてくれるなどの大型店にはない魅力が多くあるため、努力しだいで人は戻ってくると思います。

男性、30代（桑折町）

行政はモノを「つくる観点」はあるが「利用する観点」がなく、セールスや営業という言葉は行政には無いと思います。

昨年、商工会青年部が主催し国体開催時に造成された「ふれあい公園」を会場として1万5千人程度集客したイベントがあります。この「ふれあい公園」は元来、国体開催中の駐車場として利用されたもので普段は出入りできませんが、行政側との調整の結果、利活用が可能となったものです。

造ってしまったものをどう利用していくかというのが重要な問題であり、利用しやすいように行政がバックアップをしていくことが、官民一体となったまちづくりではないかと思います。

女性、60代（福島市）

福島の芸術ホールをつくる会の代表をしています。まちの中心に文化的な建物があればそこに人が集まってくると思います。この懇談会も中心市街地にあるからこそで、郊外での開催であつたら集まりにくいと思います。

この懇談会の会場である「福島テルサ」のような施設がまちの中心にあるのは非常

に良いことです。私も何度もここへ足を運ぶうちに周辺の商店と顔なじみとなり、良い店がたくさんあることが分かってきました。ここには大型店にはない地元商店だからできるお客とのコミュニケーションがあり、人と人との心のふれあいがあるのだと思います。

街が活着ているということは、100mの間隔で、魚屋、八百屋などの食材を売る店があり、それを買って帰る人がいて、それを料理する人がいるということであり、そこには家族や団らんがあるということだと思えます。

女性、50代（飯野町）

飯野町は20分程度で福島へ行くことが可能であることから空洞化が進んでいます。そこで飯野のまちに来てくれる人を大切にしようとして「かみさんサミット」を結成し、まず初めに「休まんしょ」という休憩所を設けました。毎月12～13名の地元商店の奥様たちが集まり話し合ったところ、スタンプラリーの景品を日帰り旅行にすることになりました。第1回目の旅行は30名程度の参加でしたが、大変好評で今回（第4回目）は70名程度の方が参加を予定しています。

旅行もただ行くだけではなく、「かみさんサミット」のメンバーが参加者を楽しませるように企画しています。そのため、参加者からお礼を言われたり、そこから人と人の繋がりが生まれています。今後もいろいろ考えてまちづくりに貢献していきたいと思っています。

男性、30代（霊山町）

現在、まちづくりは行政頼りになっているのが実情だと思います。

昔は強く「地域連携」というものがあって、「結」などの相互扶助が存在していました。最近壊された旧役場庁舎などは地元の木を利用するなどしていましたが、新しい建物については、最初はある程度意見をいっても、出来てからはほとんど利用されていないのが実情だと思う。

財政も厳しくなっていくことを考えると、今後はもっと住民に主体性を持たせるようなシステムが必要だと思う。

女性、70代（川俣町）

主婦の視点から地域を考え、これはと思ったら実際に調査（アンケート）を行い、その結果をもとに行政へ提言するなど、行政主導ではなく主婦サイドからの活動を行ってきました。水生生物調査については、昭和52年に団体（7団体）を設立し、平成元年に模擬議会を開催し行政に提言しています。

男性、30代（二本松市）

中心市街地活性化は、何としても居住人口を増やすことが必要だと思います。市営住宅や大学の寮のほか、徹底的にバリアフリーを施した環境にやさしい高齢者住宅等を市街地に造るべきだと思います。そういった場所に住むことで、歩きでの買い物ができたり、お酒を飲んでも歩いて帰れるなど、ますます人間的な生活が出来るのではないかと思います。

商店については、原宿の「竹下通り」のように「そこに行けば何かある」と思わせるような個性的な店を展開したり誘致することで、他にはない個性的な「まちなみ」を形成することが重要だと思います。福島の「街なか広場」に行けば、いつも何かやっているというような「イベント性」がまちの中心にあれば、人は集まり、そこに住む人、そこで遊ぶ人も増えていくと思います。

「まちづくり」には特徴が必要ですが、福島には多くの特徴があります。例えば福島は、「市」というくくりの中では桃の収穫量が日本一であることなどを、列車から福島駅に降りてすぐに分かるような「まちづくり」を行う必要があると思います。

「NPO」の活用については、公共施設の運営をNPOに委託するなどしてどんどん積極的に活用していくことが必要だと思います。

また、これからの「まちづくり」は限定した地域のみで考えるのではなく、他の経済圏や地域との連携の中で考えていく必要があると思います。既に相馬～福島～米沢の縦貫道沿線の青年会議所が開通後の企画などについて集まって話し合うなど「道路」を介したネットワークが形成されています。その意味で「道路」というものも「まちづくり」には欠かせないものだと思います。

女性、60代（福島市）

「まち」は計画的に造られていくことが大切だと思います。これまでは郊外に家を

求めて団地が造られてきましたが、郊外にいつまでも住むことができるでしょうか。人が住んで生きていくためには、一時的ではなくいつまでも「快適に住みやすい」ということが重要な課題になると思います。郊外に大型店や団地ができることは、その観点で欠けているのではないのでしょうか。

「快適に住む」ためにはもちろん文化も必要ですが、そもそもの「生きる」基本である「衣食住」の確保が大変重要だと思います。「衣食住」をきちんと確保できるということは、計画的な都市づくりによって初めて形成されるものではないかと思います。一時の利便性、利潤追求だけを考えていくと後々住みにくい「まち」になるのではないのでしょうか。

男性、50代（月舘町）

「活性化」とは「人が大勢いて賑わっていることだ」と言われています。確かにそういった面もありますが、新宿歌舞伎町、原宿、五反田、すすきの、道頓堀、博多などは夜半は確かに賑やかですが、深夜ではほとんど人がいない状況です。

空洞化している中心市街地に足を向けさせるためには、公共施設（公民館、図書館、博物館、公会堂、文化センター）をバリアフリーに配慮して、あちらこちらに点々と造るのではなく1ヶ所に集中して造ったほうが良いと思う。例えば、あづま総合運動公園のように1ヶ所に集中して造ると利用しやすいと思います。

また、実現不可能な話ですが、例えば第2、第4日曜日を旧市街への車の乗り入れ禁止にして、少しでも多くの人に歩いてもらうということも必要だと思います。また、高齢者には安く乗れる福祉バスなども必要だと思います。

女性、60代（福島市）

私はボランティアの力をもっと「まちづくり」に活かすことを考えたほうが良いと思います。毎週火曜日にパセオ通りのベンチで抹茶とお菓子を出している70代と50代の2人のご婦人がいますが、彼女たちの抹茶とお菓子のもてなしを求めて毎週多くの方が見えます。彼女たち自身も多くの人から感謝され、今では抹茶とお菓子を出すことが生き甲斐となっているようです。

自分の「まち」が寂れていくのを何とかしたい、「まちづくり」の役に立ちたい、役に立つことが自分の幸せだと感じる人は多いと思いますので、そういった人たちの力をなんとか汲み上げるようなことも必要だと思います。

また、先日、福島駅で未来博の宣伝をしていましたが、そのすぐ脇で売っている桃が山形産のものでした。そういったことにも配慮して、県や市などで連携して福島市の「まち」を盛り上げていく必要があるのではと思います。

また、年を取ったら人間は「まち」に住むほうが生きやすいと思います。私は家事があまり好きではないので、高齢になったらデパートが安くなる時間にお総菜などを買って帰ろうかと思っています。大型店は出店する時はがむしゃらに出店しますが、一旦売上が落ちてしまうとすぐに撤退してしまいます。本当に地域の事を考えてくれる大型店は少ないと思います。

パセオ通りでは個性のある文具が置いてあった「くさの文具」が倒産してしまい大変残念です。ピブレなどでは売っていないので、専門店とか地域に密着した小売店は必要だと思います。

傍聴者（男性）

「まちづくり」の主人公は消費者だと思います。その意味で規制はある程度は必要だと思います。規制がなければ、全くの自由競争となり大型店をはじめ商店同士がつぶし合うようになります。そうすると最終的にお店がなくなり、消費者は大変な不便を被ることになると思います。そのため、県民、町民がいつまでも便利さを享受できるように計画的に「まちづくり」を行うことが大切だと思います。

また、「まち」は文化だと思います。「まち」へ出かけて何も買わずにただ見るだけでも、「今度はあそこへ行ってみよう」と感じるものが文化だと思います。それが遠くになくなってしまふと、文化と遠く離れてしまうことになるので、消費者、県民自らが今後どのような「まち」になれば良いか考えていくことが必要だと思います。

傍聴者（女性）

私は今「ホールをつくる会」において活動しています。先に「公共施設はまとまったほうが良い」という意見がありましたが、私も同感です。また、ホールを造る場合は、若い人たちが「創造する場」をその中に造るべきだと思います。会議室等だけでは若い人たちは集まらないと思います。

アマチュア劇団やオーケストラをやっている人には広い練習場とか、そういったものは現在の福島にはないので、公共施設の中に「創造できる場」を設けその施設を有効に使うことが必要だと思います。例えば、盛岡に公民館を活用した「盛岡劇場」というものがあります。これは地域の公民館に「創作中心」、「図書館中心」と異なる機能を持たせて、若い人たちが集まりやすいように考えられたものです。ハコモノを造る際には、必ず人が集まることを念頭におく必要があると思います。

傍聴者（男性）

私は先ほど、パセオ通り「ギャラリーを提供している」というお話しがあった陶器店を営んでいます。パセオ商店街においても売上の落ち込みはひどく、「これからどうしようか」と思い悩んでいましたが、売り場の一部をギャラリーとして提供した結果、来店客は以前の2倍ほどに増加しました。

商店街の人たちは、売上の落ち込みを「政治が悪い」とか「行政が悪い」とか「13号線が横切っているからお客が駅から流れない」とか、自分の中に責任を求めているように思われます。私もそうでしたが、「打つ手は全て打ちもうどうしようもない」と思っていた時に、「あなたの店は入りにくい、商品構成も悪い、癒しの空間がない」などの提案をいただき、藁にもすがる思いで実施してみたところ、現在のようないい結果となりました。

実際、商業者には「あきらめ」が半分ありますが、まずあきらめるのではなく「元気である」ということが大切だと思います。行政においては「ローマは1日にして成らず」というように長期的視野に立った「まちづくり」をしていく必要があると思います。パセオ通りを例に出すわけではありませんが、みなさんは「すばらしい道路が出来たと思っている」でしょうが私は順序が逆だったと思っています。一度道路ができてしまうと店舗の改築などをする場合、トラック等の車輛が頻繁に入ることから道路が破壊されるなど「ムダ」な経費が生じてきます。道路を整備するのであれば、完成する前に店舗を改築するよう助言したり、改築に必要な資金を融資するなど長期的な視野に立って「まちづくり」を行う必要があると思います。

傍聴者（女性）

私たちの「磐青の会」では、「未来のまちづくり」への提言を目的として15年前から活動しており、実際に「まち」へ飛び出して商店街を調べています。「バリアフリー」になっているかなど公共施設や道路等を調べて、その問題点を考え、自分たちでできることは自分たちで解決し、できないところは行政に対応をお願いをしています。自分たちでできることは自分たちでしながら長期にわたって取り組んでいかなければいけないと感じています。

また、未来の「まちづくり」について子供達の意見を聞いてみたいと考えております。以前、飯坂温泉で子供達のアンケートをとりましたところ、「今住んでいるところは好きですか?」といった質問に対し、ほとんどの子供が好きだと答えました。それに対し、将来ずっと住みたいと思っている子供は少なく、その理由としては、「不便だから」といった答えなど色々な回答がありました。

この結果から、子供達は、今住んでいるところを嫌いでないということがわかりました。子供達が将来に渡ってずっと住みたいと思えるような「まち」を私達はつくっていかねばならないと思います。

男性、50代（本宮町）

大型店の規制は必要だと思います。是非、良い意味の規制をお願いします。

また、商工会の方々をお願いしたいのですが、TMOによる中心市街地活性化は、中心市街地だけでなく、ぜひ他の地区、大字地区等、他の方々のことを考えたうえでや留必要があると思います。

中心市街地だけで補助金を貰って実施するのだろうということでは、賛同を得らず、人が来ないと思います。中心市街地は、町の中心ですので、周囲のことにも気を遣う感覚、これを地域の経営者、お店の方々にも伝えていただきたいと思います。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（県北２部）

福島商工会議所

平成９年に福島で一番人通りの多かった駅前通りでは、21,600人の通行量がありましたが、平成12年調査においては9,600人と、僅か３年の間に５５％とすさまじい勢いで減少しております。

この３年間は、福島市で大きな出来事があった期間であり、この期間に新規に開店した大型店が約10万㎡ありました。現在の大型店面積の40数％が、ここ３年間に集中出店しているということです。内訳をみますと、中心街で大型店が増床したのは、僅か15,000㎡ということで、圧倒的に郊外に出店したものであることがわかります。

平成10年10月頃に西道路周辺で次々と大型店が開店しましたが、１年程の間に50,000㎡近くの商業集積が忽然とあらわれた結果、平成12年の駅前通りの歩行者通行量は半分以下になってしまったということになります。同時に街中からは、「長崎屋」が撤退したこともあり、これら大型店の動きをみてもこの３年間で歩行者がものすごい勢いで減少したことを確認できると思います。

この西道路周辺の開発も、いわゆる都市計画により道路拡幅が決定され、その周辺に大型店が集中出店するとか、或いは、土地区画整理事業があり、その地域内に大型店が集中出店するといったいわゆる都市計画によって街を拡大していく方向の中で、大型店が適地を見つけ、どんどん出店しているということだと思えます。

それに反して中心市街地はどんどん空洞化していくということです。このことからもはや商業者の自助努力だけで中心市街地が活性化するという段階ではなく、やはり、都市全体の土地利用をどうするかということをおある程度決めていかないと中心市街地の問題は解決しないのではないかと思います。

また、大型店の出店についてもある程度、全体的な枠組みの中でフレームを作っていかなければならないと思えます。大型店を含めた「まちづくり三法」という法律の中で調整するのが大原則でしたが、都市計画の部分がなかなか強い規制になっておらず、また、強い規制をしようと思ってもある意味で郊外の土地利用を制限することになるので、市民的な合意がなかなか得にくいのがために規制したいにも関わらず、なかなか規制できないという状況で大型店がどんどん出店しているのだと思えます。そういった状況において、大型店の問題をどうするかということよりも、それぞれの地域の土地利用、「まちづくり」を大枠でくくって大型店をどのように配置をするとか、或いは規制をするといったことが大変重要なのではないかと思います。

商工会議所の上部団体である日本商工会議所でも、地域で独自に「まちづくり条例」を作ってみてはいかがですかといった働きかけをしています。ある程度、地域住民の方が自分たちの街がこうあるべきだということを法的にきちんと整備し、ルールを作るのが望まれる姿だと提唱しており、実際に、京都や金沢などで取り組んでいる事例があります。先進的な事例ですが、やはり遠いようでも、法外なようでもそういった取組をしていかないと、なかなかこういう根本的な構造の問題は難しいのではないかと思います。

それからもう一つ、「長崎屋」の跡地をどうするかということが問題になっていますが、これは全国でもそういう事例がたくさん起こっております。特に流通の再編成性の中、大型店は採算が合わないとすぐ撤退するという話になった場合、残された街はどうすれば良いのかといったことが大変な問題です。やはり、大型店が立地し営業を継続できる状況で、ある程度全体的な土地利用の中で誘導し、場合によっては撤退した場合にどうするかということをおあらかじめ考えなくてはいけない時代だと思えます。流通の再編の中で、こういったことがどんどん起こり得ることですから、本当に今取り組まなくてはならない問題だと思えます。

それと今日は、県の主催の会議ということで、福島市だけの問題ということではなく県北地域という生活圏の中で考えることが重要であると思っております。例えば、県北には県北都市計画というものがありますが、そのような部分で各市町村の土地利用を束ねるといふか、お互いに重複した機能を少なく

し効率的にするなど、もう少し市町村の枠を越えた土地利用を考えていかなないとちぐはぐな土地利用になる可能性が大変強いと思います。経済が拡張していく状況にないわけなので、地域の土地利用という部分をきちんと押さえた上で都市がもっとコンパクトで民間投資が十分成り立つような都市づくりに取り組みなくてはいけないと思います。すぐにできる話ではありませんが、こういう非常に大きな転換期であればこそ、足下を固めていくということが非常に重要であると思っております。

梁川商工会

梁川町の場合、8.5水害の激特事業により大きく街が変わったのですが、その際にもっと行政主導で「まちづくり」を考えれば良かったと思います。大通りにまだ畑が残っていたり、計画があっても建物が建っていなかったりと、「まちづくり」には、程遠い状況であると10年経って感じています。やはり、もっと行政がリーダーシップを発揮して商店街づくりを進めていけば良かったのではないかと思います。

伊達町商工会

伊達町では、大型店について、経済的な活性化だけでなく、いかに様々な分野の活性化につなげていくか、また、農業者の現状を踏まえて土地利用を「まちづくり」にどう反映させていけば良いのかという観点で捉えております。

伊達町は、福島市に隣接しているため、現在のところ福島市のベットタウンといったイメージですが、そういった意味から言うと非常に寂しい町になっていく気がします。人口が増えれば良いというだけでなく、生活者のためにどうするかという観点が重要だと考えております。基本的には、大型店を排除の論理で始めるのではなく「まちづくり」にどう活かしていくのかといった観点が必要だと考えております。

中心市街地につきましては、伊達町の場合は200m位の商店街しかないのですが、商店街及び商店が消費者ニーズにあったものになっているかどうかということを考える必要があると思います。最近発生した事例ですが、商店街協同組合の理事長がお店を閉めた途端に、それまでの人通りの賑わいがぱったりと止んでしまいました。その200mの商店街の中には、駐車場、イベント広場があり、それなりの中身があったと思うのですが公共的な施設がありません。やはり集客する施設がお店だけでは限界があると思います。そういった公共的な施設をはじめとする生活者のための都市機能を考えていく必要があると思います。その上で、商業者の方は、個性あるお店、あるいは消費者に期待されるような店づくりといったものをきちんと考えていく必要があると思います。

伊達町では大型店を、町全体の大きな角度からみた中で捉えています。単に誘致しようということではなくて、一つの手段として考えているということを理解していただきたいと思っております。

梁川町大町振興会

郊外に大型店がたくさん出店することで近隣の地域が大変な状況になっていると捉えております。

伊達町に置き換えれば、今度大型店が出店予定の場所は、従来の中ではありません。大型店が出店した場合、私達が抱えている問題を伊達町も抱えることとなります。郊外の大型店の周辺だけが栄えて、従来の中市街地がダメになることは歴然としております。伊達町の「まちづくり」を考えているとのことでしたが、それであるならば近隣市町村に影響のある超大型店は必要ないと思いますし、地元の中で採算のとれる程度の大型店があれば良いのではないのでしょうか。確かに各町が自分たちの町をよくしようと努力するのは大切ですが、県北一円までの売上を必要とするような大型店を立地するということは、近隣市町村まで影響を及ぼすわけですから近隣市町村と調整をしていくべきものであると考えます。

二本松商工会

車で5分ぐらい走ると多くの大型店がありますが、特別、大型店がなくても不自由することはないと思います。現在、二本松の街中が寂しいことから、他の町と対等になるために大きなショッピングセンターを作るという発想が非常に恐ろしいと思います。大型店同士の競争により何処かが潰れた場合に公的資金が投入されると、最終的に消費者にその負担が掛かってくるからです。

そういう意味で、本当に「まちおこし」をするということは、現在よりも状況を悪化させないことだと思います。何とか今よりも悪くならない方策を考えるべきだと思います。

福島本町商店街

中心市街地、特に中心地区商店街の衰退は、いわゆる大型量販店、特にナショナルチェーンの展開が無差別、無制限に行われてきたことが最大の原因であると思います。大型店の功罪は歴史的にいろいろとありますが、最近の展開状況を見た場合、福島市の中心市街地においては、平成7、8年以降、特に西道路が開通した時点から様相が一変しております。

一つは、これまで自主廃業、転廃業はありましたが、中小商店のいわゆる倒産という状況はあまり見られませんでした。ところが、平成7、8年以降は中堅どころのお店が倒産という形により法的処理をされて無くなるといったことがだんだん増えております。それはやはり、大店法が廃止され、「まちづくり三法」ができ、商調協が大店審に変わり、いわゆる営業時間や面積に対する地域住民や商業者の意見を採り入れる場が全くなかったことに起因していると思います。

さらに、福島市の街中では、商業者だけでなく地方の間屋、いわゆる地域問屋がどんどん潰れているといった現象が起きています。小売業者が大型店に売上を取られ、それを相手にしていた地方問屋が潰れ、地方問屋が潰れるとそこから仕入をしていた小売業者が、仕入先を失い廃業せざるを得ないといった状況です。これはまさに倒産・廃業スパイラルそのものでありまして、こうしたことに対する行政、特に県の調査とそれに対する対応に取り組んでいただかないと、ますますこういう状況がひどくなり、商業・流通に対する壊滅的な打撃になっていくことは明白です。是非、対策をとってもらいたいと思います。

結局、「まちづくり三法」を逆手にとって、県ないしは地方の行政の独自の条例をつくり大型店の無差別な出店をキチンと規制する姿勢をはっきりと打ち出してもらわないと、あと1、2年で大変な状況になると思います。もちろん、我々も中心商店街あるいは地域の商店街でいろいろな努力をしますが、大型店の出店に関する規制をしない限りは限界がありますので、そういった大きな枠組みでの対策を講じていただきたいと思います。

飯野町商工会

人口が7,000人もいない小さな町で、商店はどうやっていくべきなのかについて日夜悩んでおります。私達は、女性の立場から、例えば、お花を道路に植えてみたりとか、お年寄りのお客様が来店した際には外までお送りするといった、いろいろなソフト面の活動しておりますが、大型店、その他のことは、漠然としてよく理解できないので、これから参考となるお話を聞かせていただきたいと思います。

福島市荒町商店会

私は、各地にコンサート、美術展等に行きますが、福島市はそういった公共施設が散在しているように思います。仙台は、駅前にありますし、郡山も比較的、駅に近いところにあります。しかし、福島市の場合、文化センターも美術館も信夫山の近くで、図書館にしても少し離れています。ですから、これらの施設を駅の近くにもっていくと良いと思います。公共施設が駅の近くにあれば、他の市町村からも来てくださると思いますので、駅周辺のお客様

の流れも変わると思います。

また、福島市の街の中に人が住まないことにはだめだと思えます。人が住めば、その街の商店街にもお客様が来てくださるようになると思えます。県の空いている土地が結構ありますので、そういった場所に多くの方が住むような施設をつくっていただければ、変わって行くのではないかと思います。

並木通り商店街振興組合

福島市の街中には、医療、教育施設や歴史的なミュージアム、人が集まれるコミュニティな空間が必要であると考えます。その他、従来の一般的な中心街区である駅から須川、信夫山、阿武隈川の範囲内で考えた場合、その範囲の中に市役所はありますが、行政の窓口が遠くまで行かなければなりません。この範囲の中にも行政の窓口があってしかるべきではないかと思います。そういった総合的なものの見方、或いは都市整備について論議する必要があると思えます。

また、公共交通体系の交通網の見直しということで、現在、商工会議所が中心となって行っていますが、料金体系をもう一度行政側と公共交通の機関とが調整していく必要があると思えます。高齢化が年々進んでいますが、そういった足の便といったものについても今から取り組んでいく必要があると思えます。

つまり、いわゆる物販だけでなく、総合的な「まちづくり」のデザインを論議してはじめて、「まちづくり」が自然と形成されていくのではないかと考えます。

また、固定資産税の特別減税、例えばいわゆる中心市街地の固定資産税についても、今後は論議していく必要があると思えます。

福島市一番町商店会

一番町商店会は、昭和26年2月に設立しましたが、半世紀たっても都市計画が完全に実施されていないために歩道もない商店会であります。その影響もあり、以前は54あった商店数も現在は30数となっています。昔は東西線沿いですごく発展した土地であり、必要であった商店会ですから計画した以上は、早く実現してもらいたいと思えます。

もう一度、市内の商店会のネックとなっている点を確実に捉えて、必要なところから実行していかなければ、中心商店街はどんどん遅れると思えます。

老人が住む都市計画と言いましても、固定資産税が高いとか、住みにくいとか、歩道がなく危険であるとか、そういうところが非常に多いと思えますので、都市計画をもう一度検討していただいて、やるところは早急にしていただかないとなかなか商店会全体が活性化していかないと思えます。

福島の場合は、東西線の道路が非常にだめだと感じております。現在、いろいろな計画をたてていると思えますが、交通が不便であるとか、駐車できる場所がないとかいろいろ問題があると思えます。そういった面でも全面的に検討してやっていかなければ成功しないと思えます。

川俣商工会

現在は、お客様は少しでも安いものを買って求める状況ですので、郊外の安売り店にみんな流れてしまっています。

川俣でも「まちづくり」をしていく必要があるということで、現在、TMOとなる会社の立ち上げに着手しました。川俣町の中心商店街には、歩道が狭い、空き店舗の増加といった問題がありますが、何とか商店街を作ろうということで、セットバック、或いは、街中に公共的な施設を作り、お客さんを集めようとしています。「コスキン」をメインとした施設建設の構想も検討しております。

保原町商店会

自然発生的にできあがった商店街が大型店のように計画的に作られたショッピングタウンと戦いをしても、今の状態では勝てるはずはないと思えます。

しかし、そのことをくどくど言ってみてもさっぱりいい案は見つからないと思います。先程、官庁の方から2、3年の間に55%も人の流れが減少したといった話がありましたが、こうしなければだめなんだということを一人一人はもうみんな知っているのではないかと思います。それに向かって、今日の集まりをもう少し前進的な話し合いに進めていっていただきたいと思います。

福島まちづくりセンター

昭和30年代頃、福島市の中心市街地には、人口が6万人以上いましたが、それから30年程経過し人口が3万人を切っております。中心市街地には、公共施設の移転、公共交通網の不備といった様々な構造的な問題や固定資産税、贈与税などの税金の問題があると思います。

様々な構造的問題があり現状がありますが、その大きな問題点の一つとして、郊外大型店の出店もあると思います。30年かかってこうなったものですので、すぐに中心市街地の活性化ができることはないと思います。しかし、今の福島市内の現状を考えますと、また30年かけて街の活性化を図るということでは時間的に間に合いませんので、早急な対応が求められていると思います。

中心市街地活性化法ができる以前の平成7年に、福島市では、街なかが郊外型大型店の立地により空洞化してきていることを危惧をした若手の商業者達が「商人塾」という団体を作りました。街中を今後どのように活性化していくのかという勉強会を重ね、株式会社、第3セクターによる街中の活性化を行おうと平成7年7月に「(株)福島まちづくりセンター」を立ち上げました。

当初、実施した事業は、ハード面でなく、まずは足場を固めようということで行いました。郊外型大型店の駐車場に対抗するために、中心市街地にある駐車場を共通に使える駐車券があればということで共通駐車サービス券システムを稼働させました。現在、年間100万枚以上の実績がございます。

平成9年には、街中の商業者を支援しようということで、「ももりんポイントカード事業」を始めました。これは、現在154店舗の加盟があり、その9割程が中心市街地にございまして、ほぼ中心市街地で実施しております。

また、本年6月からインターネットの宅配とFAX宅配を稲荷商店会から引き受ける形で実施しております。その他いろいろな事業を展開中ですが、まずは、できることからやっていくことが大切だと思っています。例えば、大きな商業ビルをつくり、そこにテナントを入れるといった事業も必要であると思いますが、そういう事業は非常に時間がかかりますので、ある程度、身近にあることから順次進めていくことが街の活性化には一番必要だと思います。

福島商工会議所

最近、福島の中心市街でマンション建設が増加しております。マンション業者に聞きますとまだまだ中心市街地はマンション需要が見込めるとのことでした。街なかから人口が減少したわけですが、民間の動きにより増加する要因も少しずつでてきたことは、大変大きいことであると思います。

特に高度成長期に郊外に住宅を構えた方が、高齢化した場合には、公共交通機関が便利な街中に住みたいといった話や子供が遠くに行ってしまったので街が恋しいという話を聞きます。そういった方々の受け皿になるような住宅を積極的につくっていくことが重要なのではないかと思います。

中心市街地の中で商業的に一番重要なのは、いかに1次商圈を増やすかということだと思います。そのためには、やはり住宅を作ることが有効であると思います。マンション業者が開発していますが、実際に地区の住民の方々が自分たちで集合住宅をつくらうとするとやはり資金的、技術的なハードルが高くてなかなか踏み込めません。それをもう少し思い切って、行政的に支援をするということがあれば今の流れに弾みがつくのではないかと期待しています。これは今、中心市街地で具体的に経済的な裏付けをともなっている事業としては、大変実効性のある事業ではないかと思います。

また、公共施設についてですが、確かに公共施設が中心市街地に殆どありません。だからといって新たに大きなお金をかけて公共施設を作るだけではな

くて、ちょっとした工夫で公共施設のようなものを導入することができるのではないかと思います。例えば、市内から医大に通うのに大変苦労しているお年寄りがたくさんいますが、薬だけもらうのであれば、テレビ電話で問診をし、駅周辺で薬がもらえれば非常にお年寄りには便利であると思います。むしろそうなれば、おそらく中心市街地に様々な商業以外の需要が生まれるのではないかと思います。多大なお金をかける公共施設ではなくてちょっとした工夫の公共施設の誘導もあるのではないかと考えております。

松川町商工会

福島市では、飯坂と松川だけが商工会という別の組織で活動しておりますが、それがとても困った問題になっていきます。

中心市街地といいます。自分たちの地域を忘れていないかと思えます。福島市では、都市計画税という税金を徴収していますが、それは福島駅前を中心に使用されており、郊外の松川や飯坂方面にお金がくることはありません。

また、根本的な問題として、無秩序に大型店の出店を認可することから八百屋、魚屋といった小さい店がみんな潰れてしまい300mも行かなければ買えなくなっているような状況を県は、いったいどのように考えているのでしょうか。

私達の地域は、市街化調整区域という規制の強い地域の中にあり、基盤整備において国から補助を受けていることから30年は用途変更できないという2重の網がかかっています。ですから、街から一歩でても何一つ建物を建てられないような状態です。単価、品揃えともに負けている大型店にはとても対抗できず、どうすることもできないのが現状だと思います。

現在、我々の声を聞いてくれるところはどこにもありません。商工会では、従来のように大型店の真似をしても仕方がないことから、金のかからない一声運動といった活動をしているのが現況です。

もう少し規制を強めて、何でも許可するというだけでなく、1年後に小さな店が全部無くなり、大型店も撤退した場合に、そういった足のない人達にどういう買い方をしなさいと指導をしていくのかを考える必要があると思います。もう少し、商店街だけでなく一般市民のことを考えた目に見える施策をすべきではないかと思えます。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（県中1部）

女性、60歳代（郡山市）

NHK学園で介護福祉士を勉強している方の実習コーディネーターをしておりますが、運転ができないため、郊外にあることが多い実習施設まで、バス、電車を乗り継いで行っています。日中のバスは、年輩や老人ばかりで、若い人達は車で移動しているようです。

郊外に大型店が出店していますが、街中に住んでいる老人達は、近所の商店を利用するしかありません。買物するにも魚は何匹一皿、野菜は何個一皿と売っていますが、老人はそんなにたくさん必要ありません。老人はどんどん片隅に追いやられているように思います。

男性、50代（郡山市）

中心市街地の動態調査といったものが必要であると思います。駅前、中心市街地を特徴づけるものとして、様々な交通手段があるという点が挙げられます。電車、バス、徒歩、自転車、自動車と大まかには5つあると思いますが、実際に来街している人が、どういった交通手段でやって来ているのか等、来街者の顔が見えないのです。実際に来街している人が、どういった人かを捉えずに、施策を打ち出していることは、おかしいと思います。

郡山市の中心市街地は、電車やバスを利用している人も、歩く人も殆ど変化がないのでしょうか、問題は、車だと思っています。駅前に「ビッグアイ」ができましたが、駐車場は地権者に任せているため高額です。市は、あのような大きな施設を作りながら、交通手段について一切考えていないように思います。中心市街地に来る人は、お金を使って駐車場を利用せざるを得ません。そういったことを市も放置したままですと、郊外大型店と中心市街地が競争することは、はじめからハンデがあるように思います。

また、私は、中心市街地に人を呼ぶには自転車客を優遇すべきではないかと思えます。街全体で自転車客を優遇し、どこに駐輪場があるのかわかるように、そして、駐輪場をたくさん作るのです。しかも、坪何十万といった土地を買って駐輪場を作るのではなく、広い歩道の場合には、そこに斜めに置けるような駐輪場や空き店舗の前なども空いている場所は、みんな駐輪場にはしてはいかがでしょうか。

自転車客を優遇していないことは問題であると思います。車で来る客と自転車で来る客との間に初めから差別があるようにも思います。特に若い子たちを冷遇しています。昔は、心ない商店主や守衛などが、乗ってきた自転車を放置自転車とともに山積みになってしまうといったこともありました。

4月から始まった郡山市の放置自転車等禁止条例ですが、おそらく分かっている方はほとんどいらっしやらないと思います。駐輪場を遠くに作り、そこに自転車を置かなければ、他は違法であるとするならば、自転車の人は、駅前に来るなということだと思います。

女性、40代（郡山市）

なぜ商店街に行かないのか、なぜ商店街が寂れているかということ、行っても仕方がないから、行きたくない街だからということとは明らかであると思います。行きたいと思う雰囲気があれば必ず人は行くと思います。

フランチャイズチェーン、コンビニエンスストアでストリートが埋められている気がしておりまして、ストリートの独自性が感じられないように思います。

皆さん、旅先において、この通りがいいなと思うことがあると思いますが、郡山にも良いなと感じる通りがあっても良いと思います。どのようなストリートが良いかについては、周囲の方の声等を取り上げていただければ良いと思います。個人商店だけが自分の店だけを考えるのではなく、「通り」といった責任でやっていただきたいと思えます。

女性、70代（郡山市）

中心市街地、大型店を全て含めて考えたものが1つの「まち」だと思っています。

いろいろな会議に出席しますと、中心市街地と大型店の対立を見ることがあります。例えばある大型店が営業時間延長をしたいというときに中心市街地、市街地の小売店がそれに反対するといった構図です。私は、新幹線が通る間は明るい街にして欲しいとの考えを持っています。明るい街には、活気、元気があると感じますので、6時になると閉店して帰るような店の経営には反対で、いわゆる一つの大きな「まち」という考え方が非常に大切だと思っています。

「イトーヨーカドー」で、「ザ・モール」が出店してからの客数の変化を聞いたところ、以前に比べて少しも減少していないとのことでした。また、他店広告を非常に研究しているなど、そういったところに大型店としての経営の在り方、店舗としての厳しさを感じております。

省エネ、リサイクル運動について、いろいろな店舗を訪問し、お願いしてることがありますが、郡山以外に本社があるところは、非常に省エネ、リサイクルについての考え方が進んでいます。一方、地方の店は、非常に消極的です。

流行にしる何にしる、今はメディアも通信も発達しておりますので、消費者は、都会の流行、雰囲気、空気を地方においても感じているわけですが、それに追いついていけない旧態依然とした意識が郡山にまだあります。

また、郡山駅前の交通量は非常に多いわけですから、それをなぜ中心市街地に止めようと思わないのだろう、なぜ、空洞化させているのだろうと思っています。

男性、40代（郡山市）

災害活動を柱としたボランティア団体で活動しております。私達が、阪神大震災のボランティアに行き、学んできたことがネットワークの重要性です。ライフラインと呼ばれる電気、ガス、水道、道路、電車といった物理的な線が無くなった時、最後に残る人と人、グループ間の「つながり」というものが多くあった場所は、被害が少なく、苦しみが少なかったようです。

それは、災害の時だけでなく、普段の生活から障害者、年寄り、一般の人間であっても、そういったライフラインを沢山持っている人、個人、団体、街が元気な街になっていくのではないかと思います。

白河の災害の際には、全体の7割位が地元のボランティアでした。全国でも、白河の水害で地元ボランティアが活躍したということは、大きな特徴として挙げられています。それは、まさにネットワークの勝利だったのではないかと思います。

金山町の方に聞いた話ですが、集落の住民が高齢化し、農作業を集落で1番若い70代の方にやってもらっているのだそうです。家の前の畑に野菜を採りにいくのは、私たちがスーパーに買物に行くのと同じように、農業ではなく日常生活だと言います。ところが、現在では、家の前の畑さえ耕す人が少なくなっている状況で、それは、都会においても、お年寄りが簡単に買物にいける商店がどんどん少なくなっている状況と同じことが起こっているのかなと思います。これは、お年寄りの周りのライフラインがひとつひとつ消えていっているということだと思えます。

ハード面において、資料にユニバーサルデザインに基づいた施策展開とありますが、我々の街が本当にユニバーサルデザインになっているのか、これからなっていくのかという私は疑問に思えます。

現在、未来博のボランティアセンターで2日に1度程、車イスの方を押していますが、多くの障害者の皆さんが、ここは我々の来るところでないとおっしゃいます。確かに自然との共生ということで山の中に作ったという制約はあるのですが、そこにはまさにユニバーサルデザインとはかけはなれたものができています。

一例ですが、水力エレベーターがあります。資源を大切に作るエレベーターですが、水を使うことで往復で20~30分かかります。そのエレベーターに乗れる車椅子の数は2台ですから、30人の車イスの団体が来た場合、実質会場に入るのに何時間も待たされる状況です。

これでは、まずいのではないですかと言った際に案内されたスロープは、600mぐらいの直線の坂道でした。600mの坂道を車椅子を押すのは、ものすごい重労働ですし、乗っている人にとっては、非常に危険です。

何かというとユニバーサルデザインとお題目のようにおっしゃいますが、残念ながらハードの面で県も市町村も実情は決してそうではない。是非、本当のユニバーサルデザインを考えた「まちづくり」をしていただきたいと思います。

男性、60代（須賀川市）

須賀川市は、郡山よりも歴史的に古い町でして、隣接する6町内会には、伝統的な行事もたくさんあるのですが、サラリーマンが多くなって行事ができない、子供たちのコミュニケーションがとれない等、元気がなくなっておりました。そこで、6町内会が手をとってお互いに、昔のような形にできたらと思い協議会を結成し活動しております。

私は商業者ですので、将来的には、商業の活性化に結びつけば良いと思っていますが、おもしろく、楽しく遊びでも良いからやってみようということで、大勢の方が参加しています。

銀座や郡山のような素晴らしい街を作ろうということではなく、400年、500年もの間、先人が知恵を出してきた街を、少しでも現代にマッチングするよう改良しながら、できるだけ古いものを大事にし、後生に残して行く、そういった「まちづくり」を目指しております。

女性、60代（三春町）

買物をする際、多くの商品の中から選びたいというのが私達の考えであります。小さな商店ですと入れば買わなければならないといった店もありますし、多くの商品から選べないことは不便もありますので、大型店も必要であると思います。

三春町は、市街地を変えようと様々な取り組みを実施していますが商店がどんどん減少してきました。小さな城下町といいながら城下町の良さが無くなり、バイパス沿いに出店する店が多くなりまして、中心市街地は空洞化しております。

また、私は、市街地は人が住むことが第一の条件ではないかと考えております。市街地にできた空き地を、町が購入、賃借しまして、一戸建てのアパートを作り、若い方等に安い家賃で住んでいただけるようにしていただきたいと思います。そのためには、単年度ではなく長期的なビジョンをもって取り組まなければならないと思います。

また、小さい空き地の場合は、町で買い上げ、次に何かに利用しようというような考えを持っていただければと思います。

現在、幼児虐待等、子供の問題が後をたちません。空き家を利用して、子育てに疲れた方々が自由に意見交換できるような場を作ることなども必要ではないかと思っております。

高齢者も大切ですが、子育て支援、身障者支援ということが、それよりも大事な時代ではないかと思っております。

男性、40代（長沼町）

長沼町は、須賀川、郡山、白河へ30分程でいける場所ですので、郊外で買物をする方が多いと思います。

私達のグループは、東京の品川区商連と15年程前から付き合いがあります。大きな工場が移転した場所に取り残されたいくつかの品川の商店街が、閉店が増加する状況下で悩んでいる時に、全国を回る劇団の仲介で私達と知り合いになりました。

それまで、自分たちの町は何もない町だと思っていましたが、その交流を通して、東京の方々から、足下にあった地元の良さを教えてもらい、私達の財産となりました。

長沼町では、町内の商店主が6人集まり、郊外に大きな共同店舗を作りました。現在、店舗は、良い状況だと思っております。行き止まりだった町が、湖南とか大信村とか須賀川の一部の人たちが買物に集まる場所になっております。

しかし、町内の6店舗が商店街から出たことによって、中心市街地の商店街で年寄りなどは買物ができなくなるといった問題が出てきています。

ですから、以前は小さな米屋さんがやってた部分、例えば、年寄りは重い米は買えませんので少量の米でも配達する、といったことを今後やっていかなければならないと思っております。

男性、60代（本宮町）

私は、「住み良いまちづくり」の一環として、総合的に中心市街地の在り方を考えていく必要があると思います。車の往来が少なく、安心してゆっくりと歩ける、清潔で人間臭さを感じる市街地、ウインドーショッピングも楽しい、自分が探していた商品に出会えるそんな商業施設が中心市街地にあれば良いと思います。

日本の経済界は、弱肉強食のアメリカ型社会を選択しているために、私達はそれに流されてしまっているのではないのでしょうか、1つの例が、車社会化であると思っております。道路特定財源のため税金を徴収し道路をどんどんつくって車を反乱させた結果、車を運転できる人たちは恩恵を受けていますが、公共交通機関は衰退し交通弱者を生んでいます。中心市街地も被害を受け、空洞化しているといった状況です。

道路特定財源を公共交通機関にも配分し、再確立する必要があるのではないのでしょうか。高校生や障害者、高齢者も足を奪われています。道路から自家用車や産業用車輛を減らし、都市や中心市街地に入り込む自家用車を減らし効率的な公共交通機関にシフトさせる政策転換が必要なのではないのでしょうか。

男性、20代（郡山市）

私は、大学で、福岡にある「キャナルシティ博多」の建築デザインをされた先生の研究室で勉強させていただき、その後、ランドスケープの設計事務所に勤務しており

ました。

大規模な商業施設は、郡山にもたくさんありますが、「キャナルシティ博多」の施設の特徴は、歩行者の歩くところ等を綿密に調査したり、そこを歩く人がどういったことに興味を持つのか、関心を示すのかといった人を引きつける魅力に対して非常に配慮していることにあります。

郡山に帰ってきて感じることは、「ビッグアイ」、「アティ」が出来たりと商業的には活発になっているかもしれませんが、店と店とをつなぐ通り賑わいが無くなってきているような気がします。

これからは、成功している大規模商業施設の要素を街、中心市街地に活用して、人を惹きつける賑わいのある空間づくりをやっていかなければならないと考えています。

女性、40代（郡山市）

「いいまち」と感じることでできる街が、その人にとって一番良い街なのだろうと思います。自分が「まちづくり」に携わる、何か一つ関わる、そういったことで自分の街が大切になったり、自分が活かされる、心の中にそういったものが形成されるのではないかと思います。

最近、いろいろな町並みを歩く機会が多いのですが、そこに花1つあるだけで、あの町内会は良い街だなあ、いいストリートだなあと思ったりするわけです。歩くところにイスがひとつ置いてあるだけで、なんて良い通りなのだろうと思ったりするわけです。そういったことが非常に大切なことだと思います。

小さな事で自分の街を見直したり、参加したりすることが、ネットワークとなり、それが大きなものになってけば良い「まちづくり」につながるのではないかと思います。

男性、30代（郡山市）

先程、駅前の放置自転車の話がありましたが、毎年、青年会議所では、駅前の放置自転車の撤去作業を実施しております。最初に、警告の札を貼り、引き続き放置されている自転車を撤去し、リサイクルセンターに持っていくというシステムです。

駅前でも何処でもそうですが、魅力ある「まち」というのは、綺麗なまちでなければいけないのではないかと、また、綺麗な町並みがなければ人は集まらないのではないかと、私も思います。それを誰がやるのかといった場合、一人ひとりが行動を起こす意識づけがあって、そういったものが可能になるのではないかと思います。

西部地区の核となる商業ゾーンをとのことで、平成元年に「イトーヨーカドー」を建設するにあたって、我々は、お客様のプロフェッショナルになろうという観点から作らせていただきました。お客様の立場から“狭い駐車場は停めにくい、停めにくい駐車場にお客さんは来ない”という観点から、当時としては、かなり広めの駐車スペースをとり、非常に出入りやすく、入りやすい駐車場になってると自負しております。

また、新しく建てました「西武プラザ」は、ハートビル法を取得し、体の不自由な方が自由に買物できるような建物にしようとして作らせていただきました。

自分の商業目的だけではなくて、誰のためにそのものがあるのかということ、やはり、地域の人たちのためであって、それをやるべき人というのはそこに住んでいる地域の人でなくてはならないというふうに私は思っております。例えば、駅前の空洞化、市街地のドーナツ化といったことがあれば、その中心に住む人達が本気でやらないと進んでいけないのではないかなと思っております。

男性、30代（須賀川市）

ウルトラマンの生みの親である円谷英二氏が、須賀川出身ということで、円谷英二を中心とした「まちづくり」を展開しております。

今年、青年会議所と市、商工会議所等で円谷英二生誕100年祭実行委員会を作り、市内で円谷英二展を開催しました。「うつくしま未来博」も開催中であり、様々な方に須賀川市内に来ていただいて、回遊していただくための事業でありました。

様々なイベントを通して中心市街地に多くの方が来るよう、少しでも活性化につなげることができればと考えております。

また商店街といいまして、買物するだけの場ではないと思います。さまざまな人が交流したりする場でもあると思いますので、今後もそのような形で交流のできる場を青年会議所として作っていきたいと思います。（須賀川市、男性、30代）

男性、60代（大越町）

大越町には11の行政区がありますが、平成5年より町のモデル地区として「高齢に

なっても暮らせる地域」に取り組んでいます。地域でできないことを行政にお願いし、地域で出来ることは自分達でやりましょうということで活動しております。

現在、車椅子の方の介護、車が運転できない高齢者への車での送迎、宅配給食サービス、地域の子供から高齢者までの会食等、地区のコミュニティセンターを中心に活動を続けております。

また、ハンドベルを利用して、子供とお年寄りの交流なども図っています。現在は県内外からの視察研修もたくさん来ております。

日常の買物は、自家用車の方は、小野町、船引、遠ければ郡山のまで出かけております。

男性、60代（鏡石町）

郊外の発展について、街そのものが拡大してくれた結果であるならば、理想的なのですが、実際には中心部が空洞化し、中心部という結束点をもたない郊外への点の発展となって様々な問題が表出していると思います。

「私は郊外店を利用しているから中心市街地が空洞化しても少しも困らない」というような意見が結構ありますが、私は、やはり街には、中心部が重要だと思います。そういった結束点を無くしてしまうと、皆さんがおっしゃったような様々な問題がでてくるのです。

郊外大型店と中心市街地、これからどのように歩むべきかを考えますと、郊外大型店は、消費者重視で、利便性または経済性を追求するお店であり、そういったことを求めて集まるお店だと思います。一方、中心市街地には、生活者を優先するような街といったイメージが求められているのではないのでしょうか。郊外店、中心市街地に求めるもの、提供するサービスは、それぞれに異なり、それぞれに大切であると思います。

これから中心市街地がどうすべきかについて、私が考えておりますことを述べます。例えば、老舗、文化財、史跡、伝統芸、祭といった昔から伝えられているような貴重な文化に目を向けたり、大事にすることが大切だと思います。何となく街に出たくなるような、そぞろ歩きが楽しくなるような街とか、つい散歩したくなるような街のイメージです。加えて、いろいろな方がおりますので、憩いのスペースなども確保する必要があると思います。

商店街が何を売るのがかを考えますと、やはり物販だけで大型店と競争しようとするのは難しいので、専門性、話題性といったことを売ることが大事であると思います。そして、モノを売ってお店の方には、その場所に住んでいただきたいと思います。

また、活性化するためには、ポイント、あるいは、絞り込みといったことも考える必要があると思います。

現在、中心市街地の空洞化が声高に叫ばれておりますので、そのピンチをチャンスにしていくいい時期かなということで、こういったチャンスを活かしていけたらと思います。

女性、70代（郡山市）

中心市街地の個店は、それぞれの専門店であり、商店街が一つの大きなデパートであるといった考えは持てないのだろうかと考えております。そうすれば、非常に魅力あるお店の経営が出来るのではないのでしょうか。

郡山市でも見られますが、商売が巧くいかない場合には、すぐに他人に権利を譲り、引っ越せば良いという安易な考えの方もいらっしゃるようです。そういった逃げ道を作っていれば、行政がいくら本気でやってもダメであります。一方、行政の方は、地域に対する注文が足りないような感じがしますので、お互いに腹を見せあい「まちづくり」を推進していく必要があると思います。

また、客は、その店でどのような商品が売っているのかわからないと来店しないと思います。大型店は、頻繁にチラシを配りますので分かりますが、なかなか商店街はそれがない。消費者としては、足を向けたくることがないということがあると思うんです。

今年の夏ですが、フィリピン領の小さな島に行ってきました。タリババと呼ばれる、吹けば飛ぶような貧しいマーケット街のある店に、私が入ったモノがなかった時に、2, 3軒向こうに走っていき持ってくるといったサービスを受けました。そういった姿勢も各個店にも必要であると思います。

男性、20代（郡山市）

大型店にできなくて、中心市街地ができることは何かといった話がありましたが、

一つに「交流」といったものがあると思います。

郊外の店には、車で行って買物をして直ぐに帰るだけとなりがちですが、人に出会ったり、様々な情報を得たりする場所として、中心市街地は必要だと思います。

そこで、少し考えていることは、昔ながらの木工所とか建具屋などの高い技術を持っている店が、中心市街地にギャラリーを設置し、客の要望等を気長にやりとりできる場所みたいなものがあるとおもしろいと思います。

また、「まちづくり」に関するレビューについては、都市に関する様々なアイデア、事例といったもの、例えば、海外では、LRTという路面電車のようなもので、人の流れを作り出そうというようなことやっている例がありますが、そういった事例が一覧できるような、メリットとデメリット、それによって「街」がどう変わったかがわかる、一般の方が読みやすい資料があれば、自らのアイデアと混ぜ合わせて、郡山への応用といったことが考えられると思います。

女性、傍聴者（小野町）

小野町においても「まちづくり」ということで、いろいろな組織づくりが始まりましたが、実際には、町民の意見を聞かずして施策のみが先行するような形です。参集者も殆どが、商工会部長といった宛て職の方で、子供を育てているような若い方、最も「まちづくり」に必要な意見をどう反映させていくことができるのだろうか疑問に思っています。

「まちづくり」といった場合、どうしても男の人の場合はハード面中心に考えていくことが多いと思いますが、そこには、女性の視点が絶対に必要だと思います。一人ひとりが参加している、住んで良かったといった意識が生まれるような「まちづくり」をするためには、こういった会議ではなく、例えば、女性を集めて、お茶やお菓子を出しながら意見を聞くといったような雰囲気では話聞くことができれば、形だけでない、利便性を考えた「まち」が生まれてくると思います。

県としても「まちづくり」を推進する場合に、「まちづくり」のソフト面の在り方についても県として指導して欲しいと思います。単に人を集め、組織のみを作っただけでは、結局の所、「絵に描いた餅」です。

財政的な問題を抱える小さな町でできることはどういったことを考えた場合、最後にあるのは「人」であり、「想像力」です。もっと自由活発に意見を言ったり、ネットワークづくりをしやすいような雰囲気づくりというのもアドバイスして欲しいと思います。

女性、60代（三春町）

先程の方の意見が「まちづくり」の基本だと思います。女性は、意見を述べる機会が少ないですし、出席者も肩書きのある方が多く、これから街を担っていく方の意見が採り上げられていないことが問題であると思います。

これから街を担う若者たちの意見をどんどん採り入れ、お金を使うだけでなく、皆さんのアイデアを活かした「まちづくり」が、個性のある本当の「まちづくり」だと思います。私は、農村部に住んでおり、農村部の方々の意見をうかがってきましたが、皆さんからの声が届いた「まちづくり」にして欲しいという意見が一番多かったと思います。

高齢者も大事ですが、「命」が一番大事であると思います。命、自立、共生ということで推進していったら良いと思います。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（県中２部）

郡山商工会議所

街が空洞化し、街の魅力が失われていく中で、諸条件の問題がもう少し実態に即した中で解決されると良いと思います。例えば、税金の軽減であるとか、土地については、日本古来の土地の有する担保性ではなく、それを活用していくことが求められます。

また、街中に住めるような施設を積極的に県の施策の中で打ち出していただき、住みやすい環境をつくる必要があると思います。

安積町商工会

安積町には、約35,000人の人口があります。商店数も多いのですが、どちらかといえば大型店、中規模店が多く、既存の商店、商店街は少ないのが状況です。実際に、商店街という商店街は無く、安積町の各地区に商店が点在しているといった感じで、活性化事業といってもまとまらないのが現状です。

大型店等が多いため安積町は、一見、楽しそうに、賑やかそうに見えるのですが、これといって特色のない街です。安積町には、回遊性が少ないように思うことから、休みの日に車を停めて、1、2時間程度、商店や公園、遊園地といったところを回遊できるようにしたいというのが希望です。

また、昨年、直面する問題について、10数名の高齢者と話し合いをした結果、安積町の場合、買物、病院、交通機関の面でも、かなり便利であり、満足しているということでした。高齢者にとっては、住みやすい街であるのかと思いました。

三春町商工会

三春町は、昭和62年度に長期計画を立てまして、「二核一軸のまちづくり」を実施中です。

これからの課題は、二核の1つである「商業ゾーン」をどう作っていくかということと、現在、ワーキンググループを作り議論をしておりますが、地域住民をどう取り組んでいくかということです。また、高齢者に満足していただく街、中心街に住んでいただく街をどう作っていくかも今後の課題であると思っています。

これからの「まちづくり」の中で、県の中心である郡山、郡部の中心部である船引のちょうど中間にある三春町が、何をすれば良いのかということも、大変、疑問ではございますが、商工会では、商業観光、歴史と文化のある三春町をどのような街にして、みなさんに来ていただけるような作り上げていくかということで、「まちづくり」を推進しております。

三春町商工会

高齢化社会において、商店街が単独ではやっていくことは、大変なので、大きな企業を1つキーテナントとし、そこに既存の商店街がどう対応していくかというのが、これからの課題ではないかと思っております。

小野町商工会

中心市街地にあった「いげた」が撤退し、その近辺の商店街も悪くなったという状況が発生したことから、中心市街地にも、中規模程度の店がないと商店街がなりたたないと感じております。

また、高齢者にとっての住み良い環境づくりを考えていかなければならないと考えております。高齢者は地元の病院で受診することが多いわけですが、その患者をいかに消費者として、迎えるかという施策をこれから考えなければなりません。バスの停車場にベンチを設ける等、商業者が店舗に気軽に休める場所等を設ければ、一人でも多くの消費者をつくることのできるのではないのでしょうか。

公共施設を郊外に設けた時期がありましたが、中心市街地から、公共施設を移動すると、おのずと空洞化が見えてくると思います。小野町としても役場庁舎の移転等の問題がありますが、郊外ではなく、なるべく中心街におさめるようなことが必要なのではないかと思っております。

滝根町商工会

「まちづくり」には、市でも町、村の場合であっても、共通する中心市街地に必要な機能以外に、各地域における、特性に合わせた中心市街地の在り方が必要ではないかと思っております。

滝根町は、人口5,300人、世帯数1,500弱位ですが、面積もそれほど大きくない町です。中心市街地と言いましても市街地に該当する場所があるのかというくらいです。

個人的な考えですが、中心市街地の活性化の必要性がどこにあるのかということ、もう一度住民に問い、住民が本当に必要だと思えるような、具体的にこういった機能が欲しいから必要であるということを考えていただくような場、組織作りが必要ではないかと考えております。

都路村商工会

人口3,500人余りの都路村には、村外で働く者が約7割近くおります。双葉郡、船引町、常葉町、遠くは、郡山まで働きに行っておりますが、若い人達は、働き帰りに近くの町村で買物しているようです。

都路村の商店街は、老人達の憩いの場としての商店街になっております。商店街をいろいろな意味で立て直すために、若者が働く場所の確保と、自然を利用し、自然と調和のとれた誘客を図ることで、商店街発展につなげていく必要があると思います。

郡山商工会議所

大型店の立地場所について、隣の自治体に出店されることは、自分の街にとっても大きな驚異であると思います。

自治体が「まちづくり」をどう考えるかという観点から、青森などでは、都市計画法に基づく用途地区の選定等で、大型店の出店できないエリア、大型店を意識的に誘導するエリアといったものを選定しようとしている例もあるようです。

行政として大英断の部分だと思うのですが、こういった意思を持った自治体の動き、それをサポートする住民、会議所等の組織が、一体となることによって、広域的に考える姿勢ができてくると思います。

長沼町商工会

昨年2月に長沼町に転勤しまして、この町を見たときに細長い町だなと思えました。国道118号線沿いにまちづくりがなされており、ここでどう「まちづくり」をするのか、中心市街地が一番西の方なので、東の住民、新しい住宅団地に住む方達をどのように呼び込むかが課題であります。

また、長沼の街中は、道路が狭く、駐車場が無く、空き店舗が多いというのが第一印象でした。空き店舗が多い原因の1つに、長沼の中心市街地で店を営業していた先進的な考えの方達が、「アスク」という共同店舗を作ったことがあります。長沼町の中心街は、少し寂れている状態です。

そういう状況の中で、中心市街地活性化策の1つとして、明るい街にしようということで、現在、街路灯の設置をしております。

これからの長沼町をどうするかという点について、行政との詰めが明確にできていないので、何とも言えないのですが、歴史的な財産とか、観光資源を活かした「まちづくり」と高齢者と生活して楽しい街、そういう街にしていけたら良いと思います。

須賀川商工会議所

「まちづくり」の問題として考えられる大型店の問題ですか、やはり大型店が郊外に立地して、中心市街地の大型店が撤退したというのが事実だと思います。

これまでの大型店は、郊外型でワンストップ。中心市街地は、歴史ある商店の町並みで、そこに止まることなく、回遊していただくという空間の違いが、両方にあると思います。その核となる大型店が中心市街地では対応できなくなっており、閉店しているのが県内の実態であります。

「まちづくり」の中で、中心街をどう整備するかは、決して、商店街の商業者だけで解決できる問題でなく、大型店に変わって、集客施設、公共施設というものが街の中に、整備されないと中心市街地の空洞化の歯止めにはならないだろうと思います。

須賀川のTMOの場合には、大きな目標の1つに定住化構想を最初から謳っており、街中に、特に、高齢者に住んでもらおうと思っておりますが、大型店、商店が閉店することにより、それまで、便利だった街が不便になってきている実態があります。街中に都市基盤整備があるのならば、もう少し官民の投資を呼び込まなければ、中心市街地の活性化は難しいと思います。

高齢化社会を迎えて、車社会から本当に脱皮できて、郊外立地が全てはないことを地域住民にわかってもらえた時、街の中に目がいき、都市機能がさらに充実されれば、

中心市街地がもう1度蘇るのではないかと思います。

須賀川商工会議所

商人が、商売を続けられる場所に立地をするというのは当然の発想です。

須賀川においても、中心商店街に店を構えているが、郊外にも店舗をお持ちの方がたくさんいます。そういった視点から捉えれば、中心市街地の活性化について、商店主だけががんばるべきものではなく、こういった地域を作っていくかについて、その地域を束ねる県が各自治体の相談にのれるような発想がなければ、我々は「まちづくり」をしていけないと思います。

商業者の成功、消費者の成功を捉えたうえで、中心市街地はどういった形で残していくべきなのかについて、その議論を既にすましているはずですが、まだ、一般の方には、そこまでの情報量が伝わっていません。そういう方に、いくら中心市街地が街の顔だから来てください、中心市街地を育てなければいけませんと言っても無駄であります。本来であれば、そう思っている人達が、施策としてどうしなければならぬかを自分達が打ち出し行かなければならないと思います。

市民の合意形成云々と言ってもそういった情報量の差を埋めない限りは、いつまでたっても進みませんし、「まちづくり会社」とはいつても、やはり行政のリーダーシップというものがあって、行政の理念、哲学があっての進め方が理想だと感じております。

須賀川商工会議所

商業者というのは、ある程度アーティストでなければならぬと思います。本当に商売が好きで、サラリーマンには無い楽しみを持ってやるといった方達が少ないため、問題が起きていると思います。

昨年よりTMO事務局として職務にあたり、一番最初に行政の「自助努力だろう」という言葉に大変反発を覚え、中心市街地活性化法の趣旨を何てわかっていない人達なんだろうと思いました。それは、「まちづくり」の観点からの話であるはずなのに、自助努力で何とかなるものではないのです。

実際に街を振り返って見ますと、商店主として相応しくない人がやっている場合もあります。私の個人的な考えですが、お店を辞めたい人が辞められるような環境を私達が作り、その代わり、本当に商業者の精神を持った人が、そこで商売をしたいというような街を作りたい思っております。

三穂田町商工会

三穂田も郡山市内の三穂田町であって、農業振興地域ということもあり、現在、商店は、少なくなってしまうました。行政が厳しく、家を建てるにも困難なところです。

高齢者の問題でも、診療所でもあれば助かるのですが、病院に来るにも大変です。環境としては、山沿いで良いところなのですが、先に話したような問題は厳しいです。

商工会でも市に要望しているのですが、行政というものは難しく、行政で溝を埋めてもらえれば、もう少し発展すると思います。

人口も減少し、美穂田町には、小学校が2つあるのですが、今年1年生になったのは、14、5人。そういったように美穂田町は厳しいです。

郡山サンシティ名店会

中心市街地は、郊外大型店との機能分担をいかにしてやっていくかということが課題であると思います。各町村の駅前中心街等が全てを賄うような商店街をイメージすると、破綻すると思います。機能分化した特徴のある商店を形成すべきで、経済だけを追求する必要はなく、町通りは歴史なら歴史の町並みを整備するなり、あるいは、お祭り等を整備していけば、別な意味の中心街、別な活性化の道が開けると思います。

自分の町境からほかの自治体に大きなショッピングセンターが出た場合、どうするかという話については、これは、行政が調整すべき仕事だと思います。ある町に大型ショッピングセンターが進出するといった場合、行政は、それが住民の生活を破壊するか、発展させるかという観点からやるべきで、地域内の住民の生活を守るという観点から指導すべきでないかと思います。

郡山の中心市街地の場合ですが、「丸井」、「アティ」、「モルティ」、「サンシティ」等の大型店があるわけが、それぞれに特徴のある専門店化をすべきだと思います。そうでなければ、人も呼べませんし、面白みが無いと思います。商店街においても、例えば、電気商店街として有名な秋葉原のように、各商店がそれぞれ別の分野で専門店

化すべきだと思います。1つの商店で全てをやることは、資金的にもスペース的にも不可能なわけです、自分の資金力とかスペースにあわせた共同分担して「まちづくり」をするといった観点が必要ではないかと思います。

エリアパーソン（住民）とパッセンジャーという2つの概念がありますが、この2つの理念を混同すると間違ってしまう。エリアパーソンは、やはり生活密着した商品を買いますが、パッセンジャーは、どこまで行っても、専門的な知識を欲して良いものを買うという違いがあります。客層にもそういう違いがあるわけです。

先程、過疎地域の学校の話がありましたが、これは、ますます促進されて、各町村は学校維持に困難を来してくると思います。次考えられるのは、郡単位で学校を統合、その次は、アクセスとイグレスの利便性の一番良いところに、市町村を越えた学校ができてくるのではないかと思います。こういう中心市街地の問題といったことを考えた場合にも非常に恐ろしい気がいたします。

そういったことを考えますと、ますます、時間との勝負になってきまして、機能分担、役割分担の徹底と従来の認識から離れた、ガラリと変わった違ったことをやることにあるのではないかと考えております。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（県南1部）

女性、40代（白河市）

私は、旧中心市街地の真ん中に住んでいます。私が嫁に来た昭和40年代頃の中町、本町は賑やかで、非常に活性化しておりました。

しかし、自動車の普及、大型店の郊外進出とともに、現在の本町通りは、シャッターの降りている店が多く、そこを通るたびに、とても寂しい気がしております。

ここ2、3年の間に白河市にもたくさんの大型店が出店しました。どのような商品が売っているか、新しい大型店に行ってみます。何度か行くうちに、いったいこのように商品……、そして、安い物……と追いかけていくと、行き着く場所は、いったいどこなのかと帰り道に寂しさ、虚しさを感じます。

中心市街地で大型店に出来ないことをできないのか、そういったお店がないのか、と思います。

少子高齢化社会において、交通弱者であるお年寄り達が、旧市街地で、元気になれるような「まちづくり」はできないのかと考えております。

女性、20代（白河市）

現在、白河駅前に複合文化施設建設の話があり、そちらの懇談会に出席しております。

建物自体が、中心市街地の活性化を図ることも目的にしていることもあり、どうすれば、建物1つを建てることで、中心市街地を活性化できるか考えております。

私は、その委員会において、市民サロンのようなものが、駅前にあったら良いのではないかと提案させていただいております。

昨日、その関係で長野県の松本に行きまして、松本市の「まちづくり」の素晴らしさに驚いて帰ってきました。街の中に活気があり、「まちづくり」が順番で上手に行われています。商店街の人に話を聞いたところ、商店側の努力とともに、行政が、通りをこうしたいと言うときに、一緒になって一生懸命に話し合っているということでした。昔ならではのモノ、地域文化も大切にしながら、行政と民間が一緒にやってこそ「まちづくり」ができると私は思います。

本音で話し合える場所をより多く持ち、コミュニティという意味を交えながら、やっていくことにより初めて「まちづくり」ができると思います。

男性、40代（鮫川村）

大型店と勝負する場合、勝負できる部分と、できない部分があることを見極めなければならぬと思います。商品量、研究費をどれだけ掛けているか、一生懸命戦ってもダメなものはダメなときはあるわけです。モノを売るのか、心を売るのか等、何を売るのかを見極める必要があると思います。ただ、モノを売ることだけにこだわった場合、大型店には、太刀打ちできないでしょう。

また、「この地域の人達には危機感ない」といろいろな人から言われます。確かに、商店は、まさに死ぬか生きるかの瀬戸際だと思えますが、何とか土地もあるし少しは食べていけるといことが、理由としてあるのではないかと思います。

子供達に何をどう残していくのか、子供達がどう継いでいくのか……、隣町の棚倉町では、店をリニューアルし、店先に樹木を植えて、街に潤いが見られます。特に118号線を南下して里美村に行きますと目の潤いが全然違いますが、あれはなぜでしょうか。行政の力と住民のこの町を替えようというのが形で現れているなと思います。

女性、40代（白河市）

「まちづくり」は、新聞等に出ていない日がないくらい聞き慣れた言葉ですが、「まちづくり」は、「ひとづくり」というのが実感です。何のために「まちづくり」が必要かという、そこに住む住民が人間として生まれて、幸せに人間らしく生活できるためにだと思えます。

ということは、もちろん箱モノの充実も必要ですし、経済商業の充実、先ほどあったように心の通じ合ったコミュニティ活動というものもありますし、全てが結局、「まちづくり」であると思っております。

行政が、今、やらなければならないことは、市民の声をどんどん聞く機会を作ることです。専門的なことでなくても、自分の意志で発言したいことを持っている高校生から80、90のお爺ちゃん、お婆ちゃんまで考えていることをどんどん発言する機会を作ってあげることが、行政の1番の役割、住民本意の施策であると思えます。

本当に住民の考えを引き出したうえで、問題点を探り、理想を出して、「まちづくり」

をしていかなければならないと思います。

女性、50代（白河市）

女性のエンパワーメントというのは、もう時代遅れです。私は、女性男性問わず、1人の人間としての力を発揮する場所が、たくさんなければ全てうまくいかないと思っています。

白河では、生まれ育った環境に抑えられていることをすごく感じるがあります。そういったことを、たぶん歴史が重いというのだと思います。歴史の重さというのは、とてもありがたいことだと思いますが、それを軽くして背負って、それを継続していくことが必要だと思います。白河市には、歴史ある素晴らしいモノがたくさんあるわけですから、もっともっと活性化するとと思います。

これまでは、行政主導型で市民を引っ張ってきた時代かもしれませんが、これからは市民がやりたいと言ったことに対し、行政が応援してくれなければ、活性化していかないと思います。また、市議員が行政と仲良くなっていけません。私達の代表としてチェック機能としての役目をキチンと果たしてもらわないと行政も市民も町並みも良くならないと思います。

南湖近辺に大型店が2店舗出店しておりますが、赤い建物、黒い建物、それが那須山の下に現れて景観が崩れたなと感じました。白河の良いところ、空気の澄んだ南湖から見た景色の1番きれいなところが崩れたと思います。また、大型店の進出が、町の小さなお店が潰れていった原因になっているのではないかと思います。

駅前には、お年寄りが大変多いことから、バリアフリーにして、お年寄りのための歩く空間、買物できる空間に活用してもらえれば大変ありがたいと思います。

女性、40代（白河市）

私は、外から白河に嫁に来まして、だいぶ経つのですが、正直言って未だになかなか白河に馴染めないというか、むしろ、外に出ていこうかと、まだ思っているところです。

なぜ、そのように思うかという、自分を省みますと、まちのことをよく知らないとか、白河の良さがわかっていないようでもわかっていないのです。

あるTV番組で、ゴーストタウン化していく街で、空き店舗をある姉妹に貸したのがきっかけとなり、人の流れが変わってきたという報道がありました。この町を活性化しようと思っている人達が中心となり、草の根で、小さなところから行政とタイアップしてやっていった結果だと思えます。

また、埼玉県の川越に行った際、1つ通りを入ってみると、蔵の町のほかに、ひなびた感じの商店街があるわけですが、そこは、観光客が来ているとは思われない通りなのですが、お店を閉めているところは無く、そこの人達の動く様を見て、会話を耳を傾けると、とても暖かい感じで、ここは、町として生きているのだなと、人も生きているのだなと思えました。

街を作るというイメージよりも、街をみんなで創造するといったイメージでやっていけたらいいと思いますし、誰のためのこういう街、場所といった限定したものでなく、もう少し、広い意味でまちづくりができればいいと思います。

また、いろいろな年代層や、学生もいれば、仕事をしている人、年輩の方とか、いろいろな方々が町で生活しています。そういう人達が、意見交換をする場が学校や地域でもあればいいですし、それが、一緒に話し合う機会があって、行政と互いにコミュニケーションをとりながら、どうやったら、もっと住みたいという気持ちになれる街ができるかということを考えて行けたらと思います。

男性、40代（白河市）

少し前まで、歴史や文化が感じられる中心市街地を寂れさせてはいけないということで、外部にできた大型店と対等に張り合うような中心市街地を作らなければならないといった考え方で活動してきました。

どうしても我々がやることというのは、イベント的なもので、一過性のものになりがちです。一時は賑わうのですが、時が経つと前の静かな町に戻ってしまうということを何度も繰り返し、本当に大型店と張り合えるのだろうかという疑問を持ってきております。

最近では、私の中では、中心市街地は、生き残っていかなければならないと考えるようになり、その一つの方法として、そこには人が住めばいいだろうと、人が住んで、バリアフリーとか、人にやさしい、環境に優しい街ということで、人が住める街がそこにできあがれば良いと考えております。

そこには、地価、固定資産税が高いこと、土地が売れないという問題があります。販売価格、担保価値が下がったときの施策、人が、住んでもらえるような家賃なり土地の価格なりといったことを政策として考えて行かなければならないと思います。

人が住んでもらえれば、以前のような大きな賑わいはできないかもしれませんが、歴史なり文化が感じられる町が、細々とでも残って行くことができると思います。

男性、50代（棚倉町）

私どもの会は、「町並み研究会」と申しまして、もう6年目を迎えます。

これまで、いろいろ活動してまいりましたが、現在も実施しているものにセットバック事業がございます。棚倉町は、城下町でございます、道幅が狭い旧中心街が1,400mほど続いています。そこをセットバックして、新装又は改装し、かつ、カラー舗装したところに、補助金を差し上げる活動を、行政の補助をいただきまして、今も行っております。

私たち研究会のそもそもの目的は、商店主の意識を少しでも変えていこうというものです。城下町ですから、どうしても保守的でありますので、商店主は、行政が何かやってくれて初めて動こうという考えであります。行政がやるかやらないかは別にして、商店会自体が何かをやるとういうことを行政に提案し、商店会自体が動くことを呼びかけています。

個人的な意見ですが、「行政は何もしない」とか言うのではなく、行政が補助してくれるような企画を自ら作って提案するように皆さんが考えなければならないと思います。

男性、30代（棚倉町）

私の家は、街中にありまして、俗に言うシャッター通りのど真ん中にあります。私が子供の頃には、わりと有名なスーパーのチェーン店がございましたが、その閉店に伴い、その周辺の店もシャッターが閉まってしまったという状況のようです。

そういった中心市街地の状況に対し、郊外には、大型店が何店舗も出店しており、いつも、たくさんの車が駐車している状況です。

こういった現状について、真剣に考える時期にきていると考えております。なぜ、自分達の街中には、人が入ってこないのか、いったいどういった問題があるのかと、死にものぐるいになって考えていかなければならないと考えております。

住民主体で立ち上がるのが、一番良いと思うとともに、住民が実行する際には、統一した意思を持って行うということでないとうまくいかないと思います。行政は、住民のアシスト的な関係となっただけだと考えております。

また、いろいろと住民の意見を聞いて、そして、決まったことは、住民一丸となつて実施していくことが、大切であると思います。

女性、40代（西郷村）

「西郷くらしの会」という会で、水生生物の調査とか、生活していくうえで賢い消費者になるといった勉強をしています。最近、自然を大切に作る「村づくり」を目指し、小学生と水生生物を調査しながら、子供たちが西郷村を愛してくれることによって、西郷村が良くなるのではないかとこの考えを持って活動しています。

白河市に大型店を任せて、私たちだけが、自然を楽しんでいることを申し訳なく思ったりもしますが、西郷村から見た白河のことを考えますと、西郷村に図書館は無いのですが、白河の図書館もとても小さいように思います。

東京の図書館はとても広く、子供達が勉強に来たり、集まります。公民館も同様ですが、コンサートにしても演歌のコンサートしか無いようなところなので、立派なものが白河市にあれば、もう少し人が集まるのかなと思います。

女性、70代（白河市）

私は、50年前に白河に来ましたが、本当に喉かな町で、白河が大好きになりました。

しかし、だんだん虫食い歯のように駐車場ができはじめ、お店のシャッターが降りてきてからは、私達、高齢者は、買物が心配なってきました。

先ほど、中心市街地に人が住めるようになれば良いのではないかとこのお話がありましたが、白河に仕事がないため、若い人達が白河から出て行ってしまっていることも原因ではないかと考えております。

私達、高齢者は、今のところ、本当に日常生活の物を買に行くにも、足がなければ行かれないような状況です。是非、若い方に積極的に「まちづくり」をして欲しいと思います。よろしく願いいたします。

男性、30代（東村）

近年の「まちづくり」は、まちの空間を埋めることに走りがちで、まちの空間を創造していく、言うなれば都市デザインに入っていく方向に向いているように思います。

しかし、その地域の暮らしそのものの創造を一番に考えること、つまり、そこに住む人が一番大切なのでないかと思っております。

最初に説明あったように、中心市街地はどうあるべきか、大型店はどうあるべきか、公共施設はどうあるべきか、これだけでは、「まちづくり」は、解決できないのではないかがというのが率直な感想です。その街の総合的、複合的な部分をふまえ、総合的に考えていかなければならないと思っております。

また、各種団体など、街にかかわる全ての人が、情報を共有しながら、「まちづくり」をしていかなければならないと思えます。どうしても自分のまちのことしか考えない、見えないという部分があると思えます。

私は、「まちづくり」のキーワードは、「魅力」であると思えます。大型店には大型店の魅力がありますし、東京には東京の魅力があると、自分達の町にも、必ず隠れた魅力があるはずで。そういった魅力を見つけ、魅力をだしていくことが非常に大切かと思っております。

男性、40代（矢吹町）

歴史的に考えますと、街は、年月とともに、文明、道具の発達とともに大きくなり、消費者は、便利なところに行き買物するようになってきていると考えると、不思議なことではなく、とても自然なことであると思えます。

これからは、街を白河地域といったように、1つのシティ、コミュニティの大きさとして考え、どここの町が活性化したということではなく、商業が集積するところはして、歩けない人がいる場所には、その周りにお店ができるといったように自然な形のほうが、バランスがとれていると思うようになりました。

そのバランスの取り方を誰が考えるかは、行政の方々ですとか、市町村合併も含めて大きく考えた方が自然なであると感じています。細かいことは、たくさんあると思えますが、ワークショップ等でキチンと区分けしながら、議論してまとめて行った方が、私は、バランスがとれるのではないかと思います。

女性、40代（白河市）

文化施設は、立派なのは作らなくても良いと思えます。やはり白河市の人口に合わせたものを作って、常時活用できるものでなければならぬと思えます。立派なモノを作りすぎて、立派なモノを呼ばなければならぬとすると活用するの部分が減ってくるので、良いものをよく活用するということが大事ではないかと思えます。

先ほど、農業新聞を見ましたところ、地域独自のお金に関する記事が掲載されていきました。その地域だけで使えるものなので、余所に出ていかないことから、地域の活性化が、ある程度保全されるという点がすごく良いと書いてありました。その活用範囲について問題はあろうと思うのですが、そういったことをいろいろと考えていかなければならないと思えます。

私達の年代は、活躍する時期ではなくて、頭を柔らかくして、上の人に教わりながら、下の者につなげていく、私達の年代はすごく重要だと思っております。

女性、40代（白河市）

白河市の郊外大型店は、近くの人には利用しても、遠くの人達はあまり利用していない人が多いように思えます。

お年寄りの方は、息子さん、娘さんが帰ってきた時など、1週間に1回ぐらいは買物に行っているようです。でも非常に閑散としているため、これでやっていけるのかと潰れたら大変だろうと感じています。

男性、40代（矢吹町）

大型店が潰れることまで心配しなくても良いと思えます。私は、20km以上離れたところに住んでいますが、女房は頻繁に買物に来ています。そのくらいまで、広域的になっているというのが事実です。ですから、中心市街地のことを考える時は、広域的かつ農業、工業も一緒に考えていかないとこの問題は解決しないと思えます。

私の女房は、すごく便利がっています。車で来ると35分で来ますので、そして、安いものを買って喜んで帰るとというのが現実なんです。それがニーズを握った大型店の戦略だと思えます。ですから、先ほど私が言いましたように、大型店には、絶対に勝

てない部分があると思いますし、その裏に勝てる部分があるのかということが隠れているとも思います。

もう1つ要望させていただきたいのは、こういった会議は、今回だけには限らず、各地に出前していただいて、東村、それから中島村、鮫川村と年に2回ぐらい開催していただきたいと思います。今後、永久的に討論していかないと、この場だけで終わってしまう気がします。

男性、40代（矢吹町）

スプロール化といいますと昔の都市計画学でいうとロンドンから始まっているのですが、東京のように本当に大きな町はスプロール化だと思いたいますが、中小の町においては、スプロール化という言葉としてはイコールではないと思います。

街の中が空洞化して本当に困っています、困っているからどうするかというと、それは、ある程度まで行かなければダメだと私は思います。

このような会議において、市民の皆さんに「このままでは街は無くなりますよ」と率直に話し、聞いたら良いと思います。

「まちづくり」は、年度事業ではなく延々と続きます。結論は、出にくいかも知れませんが、自然に人の言うことは、美しいこと、気持ちの良いことにまとまっていくものですから、どんどんやっていくべきだと思います。

男性、50代（棚倉町）

いろいろと中心市街地の商店会と大型店という話がありますが、例えば、棚倉町、白河市の各商店街、商店街10店舗、20店舗が1つの大型店と考える発想が大切だと思います。

そこで、大型店がやっているサービスのようなものをするような意識改革をみんなが進めなくてはならないと思います。商店会が全員が自分たち大型店だとその中のテナントだと考えたら、地元根付いている訳ですから非常に強いと思います。

そういうことを行政も指導、バックアップし、商店主の意識を変えること、発想の転換を図ることが大切だと思います。そういう点について行政の方ですとか、みなさんと一生懸命に考えて「まちづくり」をやっていただきたいと思います。

傍聴者（白河市）

経済、生活そのもののバランスをどうとるべきかだと考えます。中心市街地には、人口、しかも、高齢人口が多いにもかかわらず、八百屋、魚屋、肉屋、そういった店が減少しており、コミュニティとして生活の基盤そのものが、そこから失われてきています。

また、市民参加の立場とそれらのビジョンが必要であると思います。長期的かつどういった「まち」を作っていくのかということをも市民参加で商店街、行政、三身一体で本気になってやらないといけないと思います。

ここ5年間、連続して大型店が出店しましたが、卵が38円、40円で売っているのは、本当に消費者にとって良いのかと考えます、価値というものをもっと消費者の立場でも考える必要があると思います。ただ安いから車で行けば良いと言う状況で、地元の商店街はみんな潰れてしまう。こういうことが、本当に地域、コミュニティにとって良いことなのか、私は、本当に疑問を持っています。

個店個店が1つの商店街を作っていけば、これが大型店になり、1つの大型店になる。もっと、自信を持てるような個性のある商品で、そして、日常生活の生鮮3品は、キッチンと小売店にあって、そこで、コミュニケーションが生まれるということは、もっと長期的な考え方でやっていく必要があると思います。

三法の改善についても、現在、大型店は、規制緩和で出店できる状況になっていますから、我々と行政が膝を交えて、今の現状を分析し、対策してキッチンとやらしてもらって、市民参加の方法は急がなければならないと思って聞いておりました。

行政の方も来ておりますので、白河と広域的な面と合わせながら、一緒に考えていきたいと思っております。

女性、40代（白河市）

この問題は、目のことだけで解決できることは1つも抱えておらず、長期的に、自分の孫子の代のことまで考えていかなければならないというのが、今日のみなさんの意見だったと思います。

ここ数日、この地域にこういった会が、非常に盛り上がってきています。JCも市民対象に、白河市をもっと良くしようよ、どのような点が問題なのかということを開

いてくださいました。いろいろなところで、少しずつまちづくりに対して考えはじめています。

今のままでは、一つの車輪のように勝手に皆さんがぐるぐる回っているような感じ
です。せっかく皆さんが話し合っているものをネットワーク化して大きな声にして、
市町村なり、県なりというところに反映させていって欲しいと思います。

「まちづくり」は、ソフト面もハード面もすべてひっくるめてのものです。1、2
回では、何の良い策も見つからないと思います。いろいろな人のいろいろな立場の意
見を聞いて、それが良い「まちづくり」につながると思います。各地域で、そういっ
たことがどんどんできて、良い言葉、良い未来への夢等を吸い上げていけたら、良い
まちになると思います。そういう主導をとるのが行政であると思います。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（県南２部）

白河商工会議所

白河地方は、メガステージ、ジャスコ、カインズと大型店占有率が70%を越える全国でも有数の都市であります。これは、白河の中心街及び塙町、矢吹町等々の西郡の商店街に多大なる影響を与えております。

今後の展望について、2010年には、本格的な少子化傾向・高齢化により、広がった「まち」そのものの人口が、ニュータウンも含め減少傾向になると指摘をされております。さらに、郊外に広がった都市基盤整備予算が減少するであろうと多くの専門家が指摘しておられることから、これから21世紀に生き残る都市は、インフラが整備され、人口的にも密度が高い中心市街地を思い切って整備改善するような都市であるとの指摘がございます。

先程、ご説明ありました「まちづくり三法」の目的は、中心市街地の整備改善というのが大きな柱の1つで、商業の活性化が2つめの大きな柱でございます。県及び行政へのご要望は、しっかりとした都市のマスタープラン、ゾーニングを県及び市が連携をしながら、その街にあったものを作って欲しいと思っております。

また、白河市の場合には、白河の中心街を残すかどうか、商業を残すかどうかという観点ではなくて、白河の顔として、現在の中心街を残すかどうか、国道289沿いを新しい白河の顔として位置づけるか、これは、市民の大きなコンセンサスが必要であろうと思っております。市は、お城山、駅舎、中心街の城下町の町並みを残すという市民のコンセンサスがあれば、文化施設をJRの駅前の跡地の所有地につくることを決断しまして、今、その準備に入っています。それが中心街の白河の顔としてインパクトを与える大きな整備改善計画であるということでもあります。

大変厳しい状況ではありますが、白河も何とかTMOの楽市と公共施設の導入により動き出したのかといった状況でございます。何度も申し上げますが、市街化にするのではなくて、都市化の中心を再構築していただきたいというのが私の考えです。

東村商工会

私は、連合会長をやっていたものですから、いろいろなところのTMOの立ち上げですとか、動きについて聞かせてもらっています。

白河市では、これからTMOの楽市が「まちづくり」の推進役としてやられるわけで、期待をしております。以前、会津若松市に調査に行ったことがあります。各セクションにおいてそれぞれの地域のまちづくりをやられていることに感心しました。

白河も会津若松と同じ城下町であり、様々な伝統も残っていることから、新しい方向、在り方等々の参考にしてもらおうと商店街なども大型店に無い良さがでてくると思っております。そういったことが、矢吹町や私たちの村にも波及するような効果がでてくるのではないかと期待しております。

周辺町村の商店街の在り方については、売上はどんどん低下して、もうパパママストアからジジババストアになって、それが終わると閉店という状況で、年々、商店数は減少しております。

その対策として、昨年から地元専門の商品券の発行を村の助成を得ながら実施しております。なるべく、地元の方が地元の商店で、買物していただけるよう、地元密着型の形を作ろうとということで、昨年からはじめたものです。

身近なことから手がけていこうとしているわけですが、今後、それができたならば、「まちづくり」、「町おこし」といった形のものをやってみようと思っております。

白河市横町商店会

私たちの町には、大型集客施設である総合病院がありまして、現在、その総合病院の移転問題、国道294号線の拡幅工事と色々な問題をかかえております。

「まちづくり」として、大型主客施設、複合文化施設の推進を第一にやってもらいたいと考えます。

また、白河市の現在の道路事情が市街に入りにくいような状況になっているのではないかと思います。国道294号線を縦に一本抜いていただけたら、市街地にもっと人が入ってくるのではないかと考えます。

現在、220世帯あるうち40店舗が当商店会の会員になっておりますが、横町のお客すら商店街に引き込むことができないのが現状でありまして、物品の単価の安いではなくて、買いやすさ、入りやすさ、そういった易さでやっていこうという運動を実施しております。

はなわよんく協同組合

埴町は、昔は、「材木」と「こんにゃく」で生計を立て繁栄をしていた町なのですが、それが、下火になり、現在はとても淋しい街になっております。

埴町では、平成6年頃に商店街活性化計画策定事業推進委員会をつくりまして、現在にいたっております。

私たちは、商工会の指導により平成11年度に組織化しました。設立当初は、商店街のある通りが、道路幅が6m、歩道が1m程度しかないため、セットバックを計画していたのですが、経済状況が不安定であるために、その計画が滞っております。

スーパーなどは、リストラのために人員を削減し、自分の商売を守っていくため、組織の活動などには、なかなか参加できない状況になっております。

近くの住民は、土曜、日曜は、白河に買物に行き、街中は、人1人歩いていないような淋しい商店街の状況です。そういった中、何とかお盆、正月にイベントをやるかという話はでるのですが、イベントすら最近ではできません。

現在、どのようにしてこの「はなわよんく協同組合」を活動させていったらと思ひまして、みなさんにいろいろご意見を聞こうかと思っています、参加の申し込みをしました。

白河市大工町商店会振興会

どうしたら商店街は良くなるだろうとよく話をするのですが、それは、個店の努力であり、行政や大型店に頼るのではなく、個別にやるうというところに行きつきます。町内会に綺麗な「店づくり」で茨城、栃木からお客さんをお呼んでいるような人がおりますが、そういうことをやったら良いのではないかということになります。

また、駅前から白坂線にかけての大きな道路がここ数年のうちに整備されると新しい町並みができますので、そこで、大型店にないその情緒ある落ち着いた街をつくってみるのも1つかなと思っています。

新しい道路ができたときに、町並みを形成するのに街灯なども伝統あるようなものをつくっていただけたらと思っています。

白河商工会議所

私は、白河に生まれ育って、昭和32年に中町に嫁いできました。そのときは、街がずらっと並んでおり活気に満ちていました。「だるま市」になると大勢の人が来たり、街の中も賑やかでしたが、現在は、本当に淋しいという感じです。

女性の場合は、綺麗で魅力のある街には行きます。今回、白河の駅前が整備されまして、JRの跡があるのですから、そこに、素晴らしいモノで、魅力のあるモノ、女性だけでなく、子供たちにも楽しめるモノがいち早くできて、白河の城下町に相応しい街が戻ってこないかなと考えております。

顧みまずと魚屋も八百屋もないという状態で、年寄りが買物できなくなってしまいます。お年寄りの方も楽しみながら街に出てくる、若い人にも魅力のある何かがあれば、やはり郊外に行っても、街の中にも行ってみようという気になると思います。ですから、楽市の方や一生懸命若い人達に頑張っていていただいて、私達も女性会としても何かそういうことをみなさんと考えていかなければならないと思います。

㈱楽市白河

昨年、7月に会社を設立いたしまして、TMO構想を作成し、本年の3月にTMOの認定を市からいただきました。計画の中では、複合文化施設等のハード的に大きなものの比重が大きく入っておりますが、現実的には、まずできることからということで、空き店舗対策としてのチャレンジショップ、市内循環バスと実験的な事業に取り組んでいます。

昨日、一昨日と複合文化施設の視察に長野へ行き、松本市で「エムウィング」という、再開発の中心となっている建物を見て参りました。各フロア、ロビーに人がうろうろしており、人の出入りがあることがうかがわれ、そういう場所にそういった公共施設があり利用する方々も非常に便利だろうなということで、素晴らしいと思ひました。

松本市は、20万ぐらいの都市ですが、そのぐらいの都市でも非常にコンセプトがしっかりしていると感じました。

松本市は、TMO等では話の上がって来ないところなのです。つまり、TMOは必要が無くて、そういった組織がなくても行政、市民、商店街の方々だけでどんどんやられていられることに非常にびっくりしたということです。

つまり、基本的な計画というのが非常に大切で、何に重点を置いて集中的にやって

いくつか、中心市街地活性化計画の中に、複合文化施設の予定地約8000坪の土地がありますが、よく考えて投資をすればそれだけの価値のある場所だと思います。例えば、建物を建設するだけでなく、南湖からどのように繋ぐか、車でそこに来た客がただ帰ってしまわないよう、どうしたらうまく商店街を歩かせることができるか等、そこまで深く考えていく必要があると思います。白河市では、ここ何十年間に1度のチャンスだと思っておりますので、多大なるご支援をいただきたいと思っております。

白河商工会議所

白河商工会議所青年部で、2年前から、街中を活性化しよう、賑わいを創出しようということで、「白河市」というものを開催しております。

今年で、3年目になりますが、やっている中で感じておりますのは、商店街の皆さんにもやる気のある方がたくさんおり、この人達をどのようにすればいいのかなということです。行政は、やる気のある商店主、企業に対して、税制面で優遇措置を与えてあげられれば良いのではと考えております。

また、イベントを開催している時には、人が集まり、人が溜まります。周辺商店の皆さんも、お昼を食べてもらったり、帰りに寄ってもらったりと、人が集まるということは、何の商売にでもなるものだと感じました。

そこで、やはり街角の中に、ある程度人がたまることのできる場所を作っていたいただければと思います。以前、白河駅から病院まで行くのに、お年寄りには2回ぐらい道路脇に腰を下ろして休憩しながら行くという話を聞いたことがあります。これからの高齢化を考えた場合、公園でなくても、ちょっとしたベンチなり、雨風をしのげる場所を整備していけば、そこに人が集まりますし、人が集まる場所には、やる気のある商店街のみなさんは、そこで自店をアピール、情報発信することも可能であると思っております。

もう一つは、道路です。車社会は大型店に任せて、街中は、夕方は通行止め、一方通行、休日は全面通行止めというように、車を入れないようにすれば、店先もスペースとして利用できます。消費者が、休日は、自分の趣味の商売をするとかいうように、自分の軒先をプラスして、やる気のある商店主とタイアップして、人を集めることも可能ではないかと思っております。

白河商工会議所

私は、「まちづくり」は、「人づくり」だと思っております。確かにインフラ、ハード的整備は必要なのですが、次の子ども達、後継者のことを考えたとき、仕事がだんだん厳しくなっているように思います。働き先がないので、若い人達は、勉強が終わると流出して、郊外に行ったり、町を出ていきます。

また、住む人も、なかなか増加しない。例えば、高齢化してどこか移住しようという考えをもったときに、行政のサービスを考えるとよく聞きます。白河市が、他の自治体に比べてどのくらいのサービスがあるのか、というようなことを良く聞きます。すなわち、素晴らしいビルがあるとか、町並み綺麗だとか言う前に、生活者として最低の安定と言ったようなモノを考えていくのかなと思っております。

つまり、仕事、雇用を増やすことで、人の流出を妨げるということが1つと、もう1つは、人を迎入れるためのサービスを行政と一緒に作っていかねばならないと思っております。

それは、中・長期的な話になると思っておりますが、今こうして、話をしている人達の息子さんなりお孫さんたちが、この町に根付いて、暮らしていけるような生活者としての「まちづくり」を考えていかねばならないと強く感じます。

白河青年会議所

青年部において、この話題は、集まる機会がある度に話をしております。私、個人的な考えでは、最終的には、「人」であると思っております。当然、最低限必要なハードはあると思いますが、大規模店にないモノが中心市街地にはあるのではないのでしょうか、端的に言えば、商店をやっている人達を私は好きなんだという人達は、中心市街地に買い物に行くと思っております。

大型店が价格的に安いことはご存じだと思いますが、いろいろなお話をしたりとか、世間話をしたりとか、モノよりも心のケアのようなものが、中心市街地にはついてくるといったメリットを作ることができると思っております。このあたりの差別化をキチンと理解した上で展開していくと、もっと新しい部分がでてくるのではないかと考えております。

白河市天神町共栄会

大型店は、これ以上、出店してもらっては困ります。

現状であっても大型店同士の競争が激しので、おそらく、撤退する店が出てくるのではないかと思います。その撤退した建物が廃墟となり利用ができなくなることは、地主にとってもマイナスでしょうし、白河市にとっても市民にとってもマイナスであると思います。

お客は、魅力のある店や街であるならば必ず買いにくるというのが、私の信念です。大型店には、値段的な面では負けますが、お客が、本当に値段で買ってくれるのかというところではないと思います。お客が求める商品をいかに品揃えするかが商売の鉄則です、綺麗に並んでいるから売れるのだらうというのはとんでもない話です。それが、刻々と時間によって、日によって変わりますから、その辺の難しさをいかにアンテナを高く揚げて情報を整理するかが大切だと思います。

市全体の話ですが、やはり市街地に空き家ができて、空き店舗、空き地ができています。やがては、市などで空き地をまとめて住宅地に替える、もしくは、高齢者用住宅を建てるようなことで人口集積を凶らないかぎり、町は再生してこないと思います。

これから年々、高齢化する中で、買物、交通の利便性、そういった面で、高齢者は、街の中に来ていきます。これから、住宅の集積、人口の集積によって、中心市街地が発展していくのではないかと思います。

後継者問題ですが、天神町でも、もう私の代で終わりだよという人が殆どです。何人が若い方がいますが、その方達がいかに立ち上がるか、そう言う方たちが、「まちづくり」にもう少し積極的に出てこないかだめかなとそんな感じしております。

消費者は、非常に賢くなりまして、いろいろと情報を持っておりまして、必ずしも安いから買いに行くということはないと思います。真心で接しながらと欲しいモノを欲しいときに揃えてあげるとというのが、私は商売やっているの考えです。

白河商工会議所

私は、基本的に大型店と中心市街地の商店街が共存共栄するのは賛成です。

私達、女性で高齢化している者にとって、中心市街地の商店は必要です。私は、郊外に住んでいるのですが、買う側の立場として言いますと、前から商売をされている方はとても親切です。

そこで、もう少し、中心市街地の商店の方に研究して戴きたいと思っておりますのは、昼だけ商売をして、あとは休んでしまうと言う場合に、シャッターまで閉められてしまいますと、すごく寂れた感じになってしまうことから、例えば、カーテンぐらいにして、町全体の活気みたいなものを各自が気をつけていただきたいと思っております。

資料を見ていましたら、空き店舗に補助を出しても根本的な解決にはならないのご意見なのですが、私もそうは思いますが、商店を歩いていて、空き店舗が何軒もあるとつまらなくなってしまいます。

そこで、空き店舗に対して補助だけでなく、例えば、高齢者が作った飾り物の展示即売だとか、暮らしの会などでは、石けんなどを作っているのですが、そういうものを作るとか、誰か世話する人がいれば空き店舗も活用できるのではないかなと思っております。

東村商工会

「まちづくり」について意欲的に対応されるということで、大変、期待をいたしております。やはり、縁故関係等もありますので、特に高齢者は、大型店よりも各個店に行って買いたくなるというのが人情ではないかと思います。

これは、「まちづくり」とは別のことですが、私共は、商工会ということになっておりますが、西郷村にしても、泉崎村にしても、実は、商工会ではなくて、工の人達が2/3以上を占める工工会というような状況です。

工についても、ご多分に漏れず、厳しい経営を強いられておるようで、東村の例を見ますと、工業クラブの人達が、工業クラブ工学会という名前で、情報を分担しあいながら、収集しあいながら、企業の存続のために努力をされておるようです。みんなが集まって勉強会という場合にも、どういふところから入ったらよいか、なかなかつかめない状況のようです。このような集まりを、特に大型ではなくても、30~50人程度の人達の集まりを、進出企業、中小企業であっても良いと思っておりますし、中小企業の悩みと方向付け等についての懇談会みたいなものを作ってもらうと、いろいろな情報を入れられるので、関係者との懇談もでき、それが郡内、管内の大きなコミュニケーションができるようになるのかなと思っております。

今日は、まちづくり懇談会なのですが、工業振興懇談会ということをやっていた

できればありがたいと提案を申し上げます。

傍聴者（白河市）

白河市は、大型店の占有率が7割を越え、坪当たり消費人口も数人、このような状況の町は、他に殆どありません。そのような中で、大型店が5年も続けて出店するというのは、異常中の異常であると思っております。

先程、共存の話がでしたが、民主的な国家ですから法律的に認められればこれはしかたないことです。しかし、横綱とふんどし担ぎが相撲を取る場合と同じで、もう勝敗は決まってしまうといった現状であると思っております。

南湖の上流に大型店が出店しましたが、なかなか、手の着けられない第一種農振地域であったと思っております。しかも、何億円もかけて国の構造改善事業をやったばかりのところでは、日本でも有名な最古の公園は、那須連山との借景で活着しているのですが、その中間に黄色い建物、ネオンサインが光るものができて自然も損なわれています。

また、大型店舗法が変わりまして、環境問題を重視した法律に変わったはずですが、しかし、旧法で駆け込み出店をしたために、そういう問題が、クリアできないまま、その被害が地元に出つつあります。もっと地域の経済情勢なり、店舗状況、市街地の状況なりを考えていただきたい。しかも、国では、中心市街地活性化法という法律を作り、中心市街地を活性化しようとしている矢先に、どんどん許可していくことになると、後継者もいない、やる気もなくなる、もうどうしたらいいのかわからないというのが、白河市の実態なんだということを知っていただきたいと思っております。

はなわよんく協同組合

魅力ある「まちづくり」ということが先程より出ておりますが、小さい町では、いろいろ試行錯誤しているのですが、何せ仕入価格からして大型店と対抗できないので、商店同士で、共同仕入をやっているところがあったら教えていただきたい。

また、市街地活性化について、いろいろな補助金制度があるのですが、活性化に伴ってセットバック等を実施したところに行きますと、この仕事の量がものすごく大変だと、専門的なことがたくさん出てきて、とても素人では手のつけようがないと、非常に難しいことを訴えられます。その点について、本当の活性化ができないのかお願いしたい。

もう1つ、土木の都市計画課の方が来ておりますので、東白川郡にこれまであった県、国の出先が白河市に移転してしまいました。昔は40分ほどで埴 - 白河間を来れたのですが、現在、この国道289号が混んでおりまして、朝夕だと1時間ちょっとかかります。

そういう生活道路のために、四車線化、できれば関辺小学校までの間だけでも早急にしてもらわないと、我々、東白川郡の店の主人は、白河市に用を足しに行くと半日、店で商売ができないというようなことになります。その辺などを考えて行政を進めていって欲しいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（会津1部）

女性、60代（会津若松市）

会津若松市のまちづくりの長期総合計画審議委員の一人として、これからのまちづくりについていろいろ勉強していかなければならないという思いからこの懇談会に参加しました。

ある日の新聞に他の地方から来られた方の投書が掲載されていた。その中で3点ほど「観光都市といいながら本当にこんなまちでいいのか？」ということが指摘されていました。地元に住んでいると気づかないことでも他の地方から来られた方は本当に敏感に気づいているということを知り、住民の一人として本当にまちづくりをやっていかなければならない、会津若松市を救っていきたいと感じました。

指摘の1つは、会津若松駅前バス乗り場がロータリーを横断しなければならず、高齢者や障害者に不自由だということでした。まさにこういったところからユニバーサルデザインを考えていかなければならないと思います。また、観光地の公衆トイレが非常に汚くてとても利用できなかったという指摘もありました。私は、若松にいながら知らなかったことを大変恥ずかしく思いました。そういった細かいところからひとつひとつチェックしていかなければならないと思います。また、観光都市にふさわしい環境整備をし、他県の人々が来たときにまだ工事中なのかと感ずることがないようにすることも必要です。細かい配慮が息づかいとして感じられるような「まちづくり」を一人ひとりが考えていってはどうでしょうか。

女性、40代（喜多方市）

私は、かつて若松に住んでおり喜多方に嫁にきました。若松も喜多方も住んでいる者の見方と、外からの見方双方を理解しているつもりです。

しかし、若松は若松、喜多方は喜多方という感じで、お互いの良さを認めあうということがありません。観光にしても生活にしてもお互い連携した形の助け合いがなければならないのではないのでしょうか、まず相手の立場を認めなければならないのではないのでしょうか。相手の立場を認める前提として、安定した生活が求められます。観光だけでなく生活や福祉の面でも気持ちに余裕があって始めて相手を思いやることができ、勝ち負けではない視点から「まちづくり」に取り組むことができるのではないかと思います。

ここで「相手の立場に立つ」というのは、相手がいかにこうするということではありません。主体性がなくては、どこも同じような街、同じような景観になってしまう。

喜多方、会津若松、会津地区といった個々の地域をきちんと大切にしたいうえで、連携プレイで「まちづくり」を進めていくのがよいと思います。

女性、60代（会津若松市）

私たちは、会津に住んでいますが、どこの地域でも住民自身が楽しく元気がなければ、周囲の人たちはそのような地域に魅力を感じないと思います。ですから、まず、自分自身が元気であり、どのような地域にしていくのか自分たちで考えることが大事だと思います。居心地が良いということは、安全、安心、安らぎ、楽しみ、感動、発見、笑い、思い入れなどの単語で表せるのではないのでしょうか。その中から特徴・特色を発揮できるのは何かと考え、生活空間の範囲内でできることから少しずつやっていこうというのが、私の属する「アネッサクラブ」の活動であり、私自身の活動であります。

「会津らしさ」ということがよく言われますが、「会津らしさ」とは何だろうと私はいつも思います。会津の文化、蔵、地場産業などありますが、一番は東北の中でもきれいな水と空気。富士通が工場用地として会津を選んだとき理由を聞いたところ、きれいな水・空気があり、我慢強い人が多いということでした。これは、今の人が我慢強いのではなく、先人達がそうであったためで、私たちも先人たちがつくってくれたよい部分を見習っていかなければならないと思います。

また、道が歩きにくく、土木行政は何十年も遅れているように感じます。私は、最近足が悪くて足を引きずっているため、少しの段差でさえ上がれません。裸足で歩くほどのきれいな道でなくても歩きやすい道を整備するということは、高齢社会において基本的なことではなかとしたいと思います。

女性、50代（会津若松市）

街の中から本当に小売店が消えつつあります。昔は、何処の街にでも、最低、魚屋、

八百屋がありました。そこに野菜があれば、まあまあ基本的な生活はできていましたが、だんだん「専門店」がなくなってきています。小さなスーパーが町内に1店くらいずつでき、そこに吸い込まれ、さらに、その小さなスーパーも大型店に吸い込まれ、小さなスーパーが全部倒産してしまいました。街中で生活している多くの人たちは、年をとっていなくても買物にいちいち郊外に出かけるわけにはいきません。

小さなお店が潰れるのは、自助努力が足りないからだという声が聞かれますが、行政の指導が、ある程度今のような状況を導いているのだと思います。

いくら大型店ができて、中心地は高い税金を払いながら非常に不自由な生活をしているというのが現状です。今後、どのような街づくりを行っていくのか。観光による「まちづくり」ということも言われていますが、やはり私たち住民が不自由を感じない、住民が一番過ごしやすい、住みやすいまちにすることが、中心市街地であれ、他の場所であれ、一番大事なのではないかと思います。

男性、30代（会津坂下町）

私は、会津坂下町のまち内でない所に住んでいるので、中心市街地活性化について、一步離れた立場から見ることができると思います。大型店ができてから、私の家では、会津坂下町、会津若松、郡山に車で買物に行くようになりました。塩川町に「ロックタウン」ができてからは、駐車場も広く、いろいろな買物が一度にすませることができ、大変便利になりました。人も多く集まっており、かつては、坂下は宿場町、若松は城下町として大変栄えましたが、これからは変わっていくと思います。

これからどういうまちにしていくのか、ひとつひとつ目的を持たなければならないと思います。例えば、七日町通りが観光地として生まれ変わったように、1つの目的を持ってやれば人が集まってくるようになるのではないのでしょうか。全部の通りを観光地にしましょうというのは無理がありますが、この通りに行けば があって品揃えも豊富だとか、なおかつ駐車場もあり、渋滞もなく便利な道路も整備されているといったことが必要だと思います。

買物に行く者としては、便利なところ、車で行ってすぐに車を止められて一度に買物できるところがベストであり、そういった目的を持った「まちづくり」を進めていけばよいと思います。

男性、60代（会津若松市）

官官の情報共有が大事で、県や市は共に考えて欲しいと思います。

富士通の工場移転に伴って小学校の学区の人数も移動しました。さらに新工場建設にあわせて新しい小学校の建設計画が進んでいるようですが、既存の小学校の学区の再編等により対応すれば、その分の予算を中心市街地活性化のために有効に使うこともできると思います。市役所近くの小学校などは、定員の半数です。高齢者が街に戻ってくるより先に、学校の学区を少し手直しするだけで子供たちが戻ってくる可能性が十分にあります。

生活の場を中心市街地にもってくるためには、商店街の観点からだけでなく、小学校のことなども考える必要があると思います。

男性、50代（会津若松市）

高齢化社会となり会津若松、会津周辺の高齢者施設等も増えてきています。今後、会津地区の一層の高齢化が進むのもさほど遠くありません。高齢化を支えていくためには、少子化に歯止めをかける必要があります。このままでは、子供が街中にいない高齢社会になってしまいます。子供を必ず産むという方針を国でも立てていかなければならないのかもしれないかもしれません。

女性、50代（喜多方市）

連れ合いの仕事の関係で県内各地を歩いてきたが、喜多方を戻ってくる場所として選んだ理由は、非常に安心できて居心地がよい場所だという点であります。

なぜかといいますと水が良かったからです。水というのは、人が生きていく上で非常に重要なものだと思います。街中の水を見ると心が和んで元気を取り戻すことができたりもします。そういった自然の恵みを無くさないような形で、街の活性化に取り入れて行くにはどうすればよいか。生活者の立場としては、郊外に買物に行くのも困難になると歩いて生活できる空間を素敵なものに作り上げていかなければならないと思います。

まず、喜多方市の玄関口である駅前には、地元の人々も行くが、余所からも人が入ってくるひとつの交流の場があります。観光でラーメンを食べに来るだけでなく、居心地

の良い場所として、地元の人たちとのふれあいで心を癒し、自分の住んでいるところに戻っていけるような、そんな街でも良いのではないのでしょうか。水が多く緑に接することができるような空間の中に、日常的に買物ができるような場や市民ギャラリー的な場所、お茶を飲んで語り合える場など駅の中に整備し、余所から来た方と地元の人が交流をもつことができれば良いと思います。

喜多方も中心市街地の空洞化の問題に直面しています。街の中に水を見せて憩える空間をつくり、小さくてよいが専門店をやって欲しいと思います。そこを私たちが歩いて隣から隣へと買物を楽しむ。大型店も非常に便利で良いのですが、お店の人と消費者との会話がなかなかありません。日常生活の買物を通じて専門的な知識を教えてもらったり、他愛のない会話で心が和む、そういったことがとても良いと思います。大型店も郊外には必要であると思いますが、これから高齢者が多くなることを考えると、やはり歩いて買物にいけるような街がよいと思います。

女性、60代（会津若松市）

中心市街地の空洞化は本当に目に余るものがあります。しかし、それぞれの地域で住民が真摯に取り組んでいるゾーンは、活性化が見えてきています。市街地に暮らしがあるということ、つまり、子供の通学風景があるということ、若い夫婦が中心街に生活するということが、それが私の願いで、最近だんだんと見られるようになってきました。

新潟のあるデパートの中には公民館があり、目から鱗の思いでした。そこには、公民館活動に訪れた人たちが帰りにおかず等の買物をするといった、「生活」がありました。この延長には、そこに生活する住民も憩え、観光客も楽しむことができるスペースの可能性が出てきます。繁華街には、大きな公共施設が必要であります。会津若松市も、中心街というものをしっかりと開発すべきであると考えます。

その土地の土産物も一覧できて、短い時間ですべて見て買うことができるし、レストランもあるというショッピングセンターやスペースは、若松にはありません。ここに来れば、帰りに30分でも1時間でも楽しめるといった公共施設と一体となった場所が欲しいです。老若男女が散歩できるような街並みをつくっていく方向づけを早くしなければならぬと思います。

女性、40代（会津若松市）

活性化は単独の市町村だけではなかなかできません。便利で安くていいお店には人が集まります。昔は、神明通りに足を向けていたのが、今は門田や塩川に出かける方が多いようです。それは、一度に全てが揃うお店、車を降りたらすぐに店内にはいることができるお店があるからで、中心街では、車を何処か別の場所においていかなければならないといったことがない点が受けているのだと思います。個人のお店でも努力しているところもたくさんあります。個人の努力を周囲へ、会津全体へと波及させていくことにより解決しなければならない問題であります。

女性、70代（喜多方市）

行政と民間のもっと突っ込んだ連携がなければ、「まちづくり」、「地域づくり」はできないと思います。

喜多方市の真ん中を流れる田付川では、清流対策委員会・川づくりふれあい懇話会を中心に川の美化、街中の美化が進められています。心の貧弱ということが叫ばれていますが、きれいな川を見て心を癒し、安らぎを得るという目的で努力しています。私たちの団体では、川辺の植栽などいろいろな活動を行政とともに行ってきましたが、行政に頼るだけでなく個人個人がそういった活動を意識的にやっていかなければならないと思います。そういった意識が大きなエネルギーになります。知人に川辺に花を植えている老人がいますが、そういった人を行政が認めて、共同でいろいろなことを実践する輪を広げていけば良いと思う。

住民も行政と一緒にやりましょうといった姿勢が大事なのではないのでしょうか。それぞれに何ができるのか、お互いに自助努力することが必要であります。最終的に「地域づくり」、「まちづくり」は、「人づくり」ではないかと思えます。

男性、30代（会津若松市）

中心市街地の活性化について、なぜそこが活性化しているかを考えますと、七日町もそうですが、そこに住む人たちの活動が目に見えてわかるという点が挙げられます。「まちづくり」といったものに、ここまでという限りをおいていません、常に前向きに上を目指して活動を継続しています。そうすると逆に私をはじめ他の人たちも、街

が変化してくることに感化され、また、そこに行きたいと思うようになるのではないのでしょうか。

訪れる者の気持ちに訴えてくるものがあるところは、道路ひとつにしても店構えひとつにしても、街をひとつの形としてみても、そのなかで自分の店がどのような役割を果たしているのか、そういう意識が高いように思います。そして、行政と住民が一緒に「まちづくり」に励んでいる姿が見え隠れしています。今後は、会津若松市においても会津地方という大きなくりにおいても、地域間のトータルバランスというものが、どんどん必要になってくると思います。私たち住民とそれを主導していく行政と一緒に携わっていくうえで、一人ひとりが真剣に取り組んでいく「意識的部分」というものが必要なのではないのでしょうか。

男性、50代（会津若松市）

昭和51年、会津若松市は観光客動向の調査を実施しました。その実施場所は、鶴ヶ城、飯盛山、武家屋敷でした。その当時、市には街中に観光客を入れようという発想は一切なく、むしろ民間の方、馬喰町、野口英世青春通り、七日町通りが、そういった活動を進め、数年前に市が「まちなか観光」を唱え始めました。私も野口英世青春通りで活動しています。数年前、東北の郵便局で5枚1セットの野口英世の絵入り官製はがきが発売され、1万セットを完売しました。企画は猪苗代の郵便局長でしたが、会津若松市内に野口英世青春館があることから発行されました。生まれたのは猪苗代でしたが、世界の野口になったのは会津若松だと我々は自負しています。野口英世青春館ができて約20年、野口英世青春通りの運動が始まって約10年、「まちづくり」とは時間のかかるものだと感じています。

十数年前、山形市で「まちづくり」の全国大会があったとき、会津若松市の方が事例発表をしました。その時、コーディネーターから会津は恵まれ過ぎていると言われました。全国3,000の市町村では、解決のこれといった起爆剤もないまま、まさに明日どうするのかという問題を抱えているところが圧倒的に多いからです。それから十数年たって、会津若松はもう1つ大きな宝を手に入れました。コンピュータの単科大学として全国に名のある会津大学であります。古いものと新しいもの、授かったこの2つの宝物を活かしていくことは、われわれの責任だと思います。

大事なことは、「プロ」とどう組むのかということだと思います。街の人たちが中心となりながら実行力のあるプロの人たちとビジョンづくりをしていかなければ、どんどん遅れていってしまうのではないかと強く感じます。議論の中心が何をやるのかということばかりで、やることを通して街をどうしていくのかという根本の問題をしていないところに、「まちづくり」がなかなか進まない原因があるのではないのでしょうか。

男性、40代（会津若松市）

中心市街地がなければまちの形成はできません。中心市街地もお客さんを待っているだけでなく、来ていただけるような継続的努力をしていかなければならないと思います。

会津に足りないのは「人づくり」だと思います。このアピオを「まちづくり」の観点からどうすれば良いかを考え、会津で一番綺麗なまちにしようと頑張っています。まだまだ足りないものは多いですが、毎月100人以上が集まり、草むしりをしています。そういった努力の中から、これからの人たちが培われ、次代を背負う人が出てきてくれれば最高だと思います。

これから大資本がますます進出してくることが予想され、地域（集積地）間の抗争に負けるかもしれないという危機意識を持っています。地域の皆さんに安心して買物していただけるような安全な環境をつくっていかうという1つの目標のもと、信念をもって取り組んでいます。

小売業に限らず、「人づくり」をしてきた企業は伸びています。我々は人に金をかけ、地域に金をかけ、汗も流さなければならぬのです。そういったことをみんなでやれば、少しずつ具体策が出てくると信じています。地域を愛する人は、地域に貢献すべきであります。

男性、50代（田島町）

中心市街地が疲弊しているしくみは簡単であります。不便なところに人は住みませんので、店もどんどん少なくなってしまう。そうすると人は便利なところがいいから、そこに行かなくなり、住まなくなります。これをどうするか、一生懸命考えてもなかなか良い答えは出てきませんが、例えば、その地域の小さなお祭りを大事にしながら、つながりを大事にして住んでいるような地域は、地域として今でも残

っています。人と人が語り、お互いに話し合うことで人間関係ができるのです。田島は大型店の売場面積が全体の約6割を占めており、街の中心部では残念ながら商店は減っていますが、個性のある店は残っています。人と人との関係を大事にし、そういった心を失わない店は残っていくと思います。

行政と垣根を作らずにいろいろなことを話しながら、これからの「まちづくり」ができないものかといつも考えています。立場の違いはありますが、人間対人間の関係の中でもう少し視点を変え、お互いに片意地を張らずに行けば、「まちづくり」ができるのではないのでしょうか。

大型店はオーバーストアにならなければ、その地域を活性化するために、ある面では必要であります。そういったことを考えていかなければ、「まちづくり」はできません。田島では、現在カラー舗装を整備したり、駐車場を確保したりと努力していますが、地元の人たちを何となく取り込んでいかなければ、商店街は残っていけないし、あてにされなくなってしまいます。行政とともに目線を同じくして、お互いに知恵を出し合いながらやっていくことができれば、地元商店街も疲弊することなく、活性化していけるのではないのでしょうか。

女性、50代（会津若松市）

行政と垣根を無くしようという意見は、全くそのとおりであります。不便な所に行きたくないという意見はそのとおりですが、中心部に公的な施設がないために今日もアピオを利用しているのではないのでしょうか。例えば、中心部の学校跡地にちょっとした施設をつくって市民に開放すれば、わざわざ郊外まで行かなくてよいと思います。しかし、市役所の垣根が高くてどうにもなりません。計画がはっきり決まっていらないのであれば別の利用法を考え、一般市民などが利用できるようにすれば、街中でいろいろなことができる可能性が広がるのではないのでしょうか。

傍聴者（男性）

「まちづくり」は、必ずしもマクロ的なことで進めなくても自分たちの住んでいるところでの活性化を考えることによって、それが地域に広がっていくのではないのでしょうか。我々は、まず「賑わい」だということで、夏祭りに新しい踊りを考えました。今までならプロにお願いしていましたが、今回は地元のいろいろな才能をもった人たちに協力してもらいました。その結果、感じましたのは、人材は各地区に必ずいるということです。そういった人材相互の取り組みにより街の活性化ができるのではないかと思います。何もかも網羅した「まちづくり」を自分たちでやろうとするのは難しいですが、ポイントを絞っていけば、意外と短期間に成果が出るように感じます。ワンステップづつ、「まちづくり」・「人づくり」により地域の活性化を進めていけばよいと思います。

傍聴者（女性）

「まちづくり」とは、住んでいる人たちにとって、その街との関わりが見えてこない、本当の意味でその地域に住む人のための街をつくることはできないと思います。道路や歩道の構造などにも問題を感じますが、街を歩いていますと看板などが邪魔なところもあります。また、街中を歩いているのは、圧倒的に高齢者や女性が多く、しかもその大半は自転車で移動しています。高齢者や子供にも視線を向けた「まちづくり」をぜひ進めていただきたいと思います。

㈱まちづくり会津

まちづくり3法ができましたが、この3年間で中心市街地空洞化の抜本的な対策を見出したところはありません。どうすれば商業の活性化がなりうるのか。

少子高齢化の問題は、全国的な問題であります。特に東北地方ではこれからますます進行していくものと思います。戦後の「発展」のように、人口増加による経済効果での発展も否めませんが、高度経済成長、バブル経済を経て今日の状況に陥っています。スケール・スピード・古いものを新しくしていくということで過去50年進んできたものを、まさに今、抜本的に見直すべき時期に来ています。

「まちづくり」の上での「観光」というのは、これまでの概念とは違います。人口が少ない中で経済効果を上げるための手法として、「交流人口の拡大」という意味で言っているのであって、今までの高度経済成長期にあった観光バブル的なものを言うのではありません。観光という産業自体の中に大きなパラダイムシフトが起きています。会津若松の観光客が平成8年の380万人から現在270万人へ100万人減ったのは、このパラダイムシフトの顕在化に過ぎません。つまり、会津の観光産業の方向性が旧態依然のままで、新しいスタイルについていけないということでもあります。全国的に観光客が減っているわけではないのです。大分県の別府は激減したが、湯布院は伸び、長野県でも善光寺は減ったが小布施はのびている。動機を検証してみると、自分たちが住んでいる文化、自分たちの周りで触れている文化とは違う文化を覗いてみたいという欲求から人が動いていることがわかります。その典型が、海外旅行です。わずか4～5時間飛行機に乗っただけでまったく違うシチュエーションに自分の身を投じ、違う歴史・文化・人種と接することができるのです。

国内に海外のようなシチュエーションを提供したり、違う生活文化に触れることができるというシチュエーションを提供することができれば、必ず人は動きます。これから何をなすべきか。会津のこれまでの観光は、戊辰戦争という歴史の1面だけを捉えた観光、画一的なルートに終始した観光でありました。戊申の役で完全に破壊された街中には、観光客は誰も入ってきませんでした。しかし、移動する動機が違った文化と触れ合うという観点からは、戦争に負けてその中から復興した商業文化が花開いた一時期を感じることで非日常的な空間として捉えることができる。観光客が激減しているときに、街中に入ってくる人は確実に増えているこの状況は、これからの方向性を示しているように思います。そういった意味で「交流人口の拡大」ということを言いたいです。

会津高田町商工会

今までの「まちづくり」「地域づくり」の考え方は、ダメなところからすべて出発していました。過疎だからダメなんだ、だから「まちづくり」をしなければならぬ、活性化策を講じなければならぬといったようにです。我々商工業者から言えば、「活性化」とは経済の活性化であります。ところが、その経済効果を打ち出すはずの活性化プランは、全国各地のモデルとなるような都市を範として、過疎が進んでいるまちが数値目標にこだわって人口を増やすことを長期進行計画の中で謳うようなものになっています。

「地域づくり」を考えると、このようなものでよいのでしょうか。そういったプランでは、長期振興計画の中で公共事業を謳って実現不可能な夢を抱かせるだけの無理な計画になってしまいます。その結果、起債額が増え、公債比率が高くなって借金がどんどん増えていく。経済効果も大事ですが、それだけではなく、住んでいる人たちにそこに住んでいて本当によかったと思わせるものが計画のなかに出てこなくてはならないのではないかと思います。これまで様々な試みが行われ、目標に達しなかったということもあると思いますが、それらの反省を十分に活かし、地元の人たちが本当に考えていることを吸い上げて計画を作っていくかなければ、真の「地域づくり・まちづくり」はできないのではないのでしょうか。数字の摺り合わせでモデルとなる街を模範にした計画をつくった人の物語を有識者として尊敬するのではなく、朴訥でもいいから地方の情熱を込めて語る人々の意見をたくさん聞いて「まちづくり」を考えていただきたいと思います。

会津若松市大町四ツ角中央商店街(振)

会津の商店は、マーケットサイズが小さく、高速バスの乗り入れにより新潟・仙台・東京へとお客さんが流れてしまいます。それだけ会津の商店街に魅力がないとも言えますが、そういったことがまず前提にあり、商店街が努力し他と違う魅力を出して

もなかなか難しいというのが実状です。

私も三十数年間、商店街を活性化しようと活動をしてきました。役所主導の受け身の態勢ではダメでして、ある程度商店街自らが主体的に取り組んでいかなければならないと思います。官と民が役割分担をして相乗効果を生み出すような提案や知恵を出し合って、共同作業をしていくことが大事だと思います。私の商店街では、昨年330坪ほどのスーパーが閉店しました。その跡地開発のために会社を作り、1階に店舗を併設する37戸の分譲マンションを建設する計画で「まちづくり」に取り組んでいるところです。

会津若松商工会議所

会津若松市内に間もなく大型店が2店オープンしますが、強制力がないにせよゾーニングが重要な問題ではないかと思っています。去年は、市内の中心市街地の大型店の問題もありました。あちこちで起きていることですが、中心市街地の大型店が撤退し、すぐそこに新しい店が入ってくれば良いですが、そう簡単にはいかないと思います。市内の大型店のゾーニングなどをはじめ、「まちづくり条例」というものがこれからの課題となってくると思います。

喜多方商工会議所

喜多方には、ラーメンで110万人以上の観光客の入り込みがあり、その観光客をどのように回遊させるかが最大の課題であります。喜多方市は、用途地域内は、35%整備されていますが、中心市街地がまだ整備されておらず、喜多方独自の街、今まで培ってきた伝統、いわゆる癒しの街というものを目指していこうとしています。現在、約2,600ある蔵を伝建審地区に指定しながら何とか活かしていく方法を、TMO計画の基本構想の中で検討しているところです。

北会津村商工会

どうすれば地域経済に活力を持たすことができるかという視点から、過去10年くらい商業統計等で購買率などの数値をいろいろ調べてきました。最近、他産業との連携のもと、地域内で通用する通貨のようなものができれば、地元の購買率を少しでも上げることができるのではないかという話が商工会で出ました。

「まちづくり三法」のなかでも行政と民間で話し合いながら、村のランドデザインを描き、どういう方向に進んでいくのかということをしっかり考えていかなければならないと思います。

北塩原村商工会

「農業と観光の村」がキャッチフレーズであります。農業所得も減少傾向にあり、観光もだんだん海外に流れています。観光の活性化がなければ街の活性化はできないという認識であります。歩道など施設的には整備されていますが、なかなかうまくいっていません。商工会の会員も観光関連が7~8割を占めています。商店街については跡継ぎがないというのが現状で、間もなく半分以下に減少するのではないかと思います。

しかし、観光については、現在、若いオーナーたちが頑張っており、今後、磐梯山を取り囲む猪苗代町、磐梯町と連携を図っていきたくと考えています。

塩川町商工会

中心市街地の現状と課題という観点から、小さい町村は今回の懇談会の対象外とも思えます。活性化、中心商店街というものを県がどのようなものとして捉えているのかを、小さな町村にもう少し指導して欲しいと思います。

塩川町は、喜多方市と会津若松市に挟まれ、発展というものは、絶対にあり得ないような気がします。単なる商店街の活性化ということでなく、行政と商工会等が一体となって街を存続させるということを県に考えていただきたいと思います。

商店街の活性化とは、もっと別な切り口を探す必要があるのではないのでしょうか。県は、お金を貸すだけでそれ以上踏み込んでくれません。こういう小さなまちの商店街が生き残るためには、補助金をくれるとう方向で行かないと、街はますます人間が歩かない街になり、犬しか歩いていないという状況に成り下がってしまいます。街と商工会がやっていけるような方策を考えていただきたいと思います。

山都町商工会

「まちづくり」を考えるうえで、将来、市町村合併という問題がどうなるのかとい

うことを悩んでいます。

山都町は、「そばの町」ということで多くの観光客がくるようになりましたが、観光客は、車で来て、「そば」を食べ帰ってしまいます。そうではなく、もっと町民とのふれあいとか、交流といったものがないかなと思い、そういった場所、施設が必要だと考えています。

また、せっかく外来者との交流を図っても住民が、自分の街を知っていなければならないと思いますし、そのためにも地域に愛着を持ち、誇りをもっているような環境をつくる必要があると思います。

そういう意味でも、市町村合併がどのようになるのかに重大な関心があるところです。

西会津町商工会

私の町には、中心市街地と呼ばれるようなところはありません。街中には、商店が数店ある程度で、買物は郊外の大型店に行っているのが現状であります。

また、私の町は、面積が広く、集落が散在しておりまして、高齢化率も40%を超えている状況から、お年寄りの移動手段に苦労していました。来年から、中学校の送迎バスが運行するのですが、送迎の空いている時間を利用して、街の商店を利用してもらおうという取り組みを進めているというところです。

西会津商店街

行政と商店が協力することが大切で、一緒になってやれば何らかの形で結果がでるのではないかと思います。

土木部の方をお願いしたいのですが、やはり商店街の道路はとても厳しいです。街路灯も含めて、「まちづくり」の視点から支援をお願いします。

猪苗代町商工会

今後、猪苗代町が合併されたとしても、中心市街地活性化法がある限り、法律上、今の中心市街地のエリアは残ると思います。私たちの町では、会津若松市と違って、人・もの・金に大きな違いがありますから、それをいかに有効に活用するかが重要だと思っています。そのためにも事業の絞り込みを行っています。そのうえで、その事業を検証しながら、目標に向かって一つ一つ進めていきたいと思っています。

㈱まちづくり猪苗代

この4月に、商工会から独立しまして、まちづくり会社を設立しました。昨年は基本計画とTMO構想を、今年はTMO計画を策定し、PFIを使ったトイレとか、ポータルサイト等に一生懸命取り組んでいます。また、プレミアム付き商品券も、町から500万円ほど補助していただいて発行しています。

これまで、空き店舗対策などで県のお世話になってきましたが、その時のことをお話ししたいと思います。

商売は、何かやりたいと思った時にすぐを実施したいのですが、補助金を使うと事業開始が1年遅れることになり、その熱気、やる気が無くなってしまいます。よく商店街は、補助金頼みだと言われますが、この意見は、まったく商工業者の現状が行政に届いていないためだと思います。今の疲弊した商店街では、補助金がなければ商店はやっていけません。採算がとれなければやめなさいといわれれば、誰も手を出さないのが現実です。建前論として商店街の自立を先行させるならば、誰もやる人はいなくなり、商店街は成り立ちません。何とか不足業種を補いながらそこに止まってやっていくということは採算がとれなくて当たり前なのです。

猪苗代町の基本計画では、大型店とは競争しないということをもTMO構想の中でうたっています。大型店は、大型店なりの商売をどうぞしてくださいと思っています。大型店は75%のシェアを占めています。商店街は残りの25%を、何とか維持していきたいと考えています。

猪苗代は、外部からのお客さんがいなければ成り立ちません。「まちづくり」に関する精神論的な話がたくさんありましたが、これは、行政が受け持つべきでありまして、商店街は、利益が出て初めて成り立つわけですから、「まちづくり」の理念と商業の活性化の議論が一緒にならないようにする必要があると思います。どうも、行政でやるべきハード、ソフトと民間がやるべきソフトの部分が一緒になっているような気がします。

商店街のみなさんが生活できることによって、コミュニティがでてくれば良いのではないかと思います。

会津坂下町商工会

私たちの「まちづくり」の考え方は、住民全体での「まちづくり」をどうしていったら良いのか考えるということです。住民に参加していただき、1年の間に延べ二百数十回の会議を開き振興計画を作りました。

良くない点は、商工会の中にも中心商店街を軸にした商店街があるのですが、全体の意識が一つにならないことです。他の町に比べて、シャッターが閉まっている店は少ないと思うのですが、なかなか積極的になれないということがあります。交通が便利のために、会津南幹線が完成すると、大型店が2店出店するのではないかとされています。いろいろなところで、土地あさがりが始まっているようです。

そうした中、「まちづくり三法」では、大型店の出店規制がなかなかできません。今まであったような、商工会・商店街の意見が出せない状況になっています。大型店が申請をだせば、立地が自由に可能であるといった状況は、私たちの「まちづくり」にとっても大きな影響を与えていると思います。

柳津町商工会

柳津町は、人口4,000人足らずの町です。ご存じのように虚空蔵様と地熱発電所があり、他の町に比べて観光には恵まれているのではないかと思います。しかし、高速道路ができてからは素通りの町になってしまい、中心市街地の空洞化は他と同じです。

そんな中、10月には30数年ぶりにSLを走らせることになりまして、いろいろな取り組みをしています。とにかく、がんばってやっていこうとしています。

河東町商工会

商業を活性化しようとしても、必ず土地の問題があり、これまで共同店舗構想やショッピングセンター構想が度々崩れています。会津の方では、これから大型店による開発が進むのではないかと予想されています。平成15年に線引きの見直しがあると、大型店が出店するのではないかとということで、地域の振興と商業の空洞化のジレンマに悩んでおります。住民の方々にとっては、郊外への大型ショッピングセンターの進出は、望んでいることのようにですが、地元の商業の育成という面では役立たないと思います。

河東町では、広田の駅前にあった大型集約施設、役場とか看護センター等が近年どんどん郊外に移転してしまいました。今回の「まちづくり懇談会」のテーマとは、逆な方向に進んでいるような気がします。

会津若松市神明通り商店街(振)

「まちづくり」といいますと、住民が住みよい街という意味での「まちづくり」なのか、それとも中心市街地の商店街の活性化という点で考えているのか、どちらなのかと思います。神明通り商店街では、だいぶ前からアーケードの建て直しということで、中小企業課にお世話になっていますが、やっておりますが非常に難しいなと感じていることがあります。

例えば、申請書を作るのが難しく、非常にお金がかかるということがあります。今回、「まちづくり会津」に協力してもらい実施する新しい方法で取り組んできたのですが、実際に実施するのは、神明通り商店街であるのに「まちづくり会津」がお金を借りたり、負債を負担したりしなければなりません。行政サイドは、一通りの見方しかしません、商店街が実施するのですから、もっと神明通り商店街が加わった形で物事がすすめば良いと思います。

また、申請をする際に、いろいろな資料を添付しなければなりません。私たちからすれば同じような様式があっても2回も書かなければならないのです。それまで、県の方に理解を求めるのは無理だと思っています。申請をするためにはそれを文書にしなければならず、それを人に頼みますとそれだけ金がかかるということになります。もっと県に簡単に申請できるようにすれば、何十万というお金を使わなくても良いと思います。

会津若松市本町商店街(振)

本町商店街は、会津若松の中心市街地にある昔ながらの商店街です。最近、目立って人通りが少なくなってきました。助成金だけでは、なかなかイベント等を開催することも難しくなってきました。体力のあるうちは良いですが、その体力もだんだん落ちてきて、今、まさに商店街が無くなりそうな気配がある状態です。

最近、城下町としての歴史を振り返り、そういったPRによって、空き店舗を利用

したイメージアップというものに取り組んでいます。今年は、ソフト面の整備ということで、商店街のホームページを開設したところです。

今後、地方交付金は、どれだけ来るのか、国にどれだけ金があるのか、県に金はあるのか、どの程度まで下々に金が回るのか、商店街にも補助金がどれくらい回ってくるのか、ということが心配です。

会津若松市七日町商店街(振)

行政からの支援を受け、昨年、手作り看板を作りましたが、トラックに持って行ってしまわれました。そこで、さらに高いところ設置したところ目立たなくなってしまうフラッグをつけました。現在は、ひまわりフラッグになっています。日の丸の旗をつけるのが一番目立ち、お年寄りの方がとても喜んでくれます。また、季節にちなんだフラッグも用意しています。看板も、自転車屋さんには自転車の、眼鏡屋さんにはメガネの看板となっています、今度、機会があったら是非ご覧下さい。

このような取り組みのきっかけは、市役所の移転問題に際し、みんなが集まって本気で考えたことです。最近では、市役所移転問題がなくなり、集まりが悪くなってきていますが、そのような取り組みをしています。

塩川町塩川のれん商業共同組合

商店街は小さな店の集まりです。昔の商工会も商店の集まりから始まりました。イベントも町から補助金をいただいて、歌謡ショーや祭りをやったものです。それが時代が変わり、法律等により商工会の商業部会ができて活動していますが、昔から土農工商といわれるように、おだてられて馬鹿にされるという人の集まりのようです。いくら組合にこだわりをもってお客さんに笑顔で接しようとしても、売り上げが悪いとだんだん笑顔がでなくなっていくます。

商店街は、昔から自然にできたのではなく、人工的な市に商人が集まってできたものであり、商店街のない中心市街地はあり得ないと思いますから、商店街は中心市街地の活性化において重要な役割を担っていると思います。公共施設をつくる場合には、住民や商店街の意見を十分に聞くべきだと思います。

大型店については、塩川町に「ロックタウン」というショッピングセンターができて、1年3か月くらいになります。商工会関係の活動を十数年やってきた中で、なぜあのかとき反対運動を起こさなかったのかと、自分自身失敗したと反省しています。やはり、中央資本の大型店は、「まちづくり」にはいらなと思っています。大型店が1店できることによって小さな店が20店も30店も潰れてしまい、それでは「まちづくり」はできないと思っています。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（相双1部）

女性、30代（原町市）

中心市街地の活性化について、必要ないという方もおられると思いますが、私自身は、漠然と必要であると考えています。

その理由を明確に答えられないのですが、もし中心市街地がなくなったら、どうなるのか…。このまま衰退していった場合、どうなるのかを最近考えています。もし、なかったらどうなのか、という悪い状況を行政も市民もあまり考えていないようですし、考えたくないのかもかもしれません。

中心市街地は、そこに住む人の生き方が出るエリアだと思います。それは、文化的な成熟が問われるという問題で、私たち市民が考えていくキッカケにする必要があると思います。

もし、中心市街地が必要ないという方は、消費者的な視点からおっしゃっているものだと思います。大型店に行けば、殆どの商品が購入できますし、インターネットで欲しいものはすべて手に入るので、埃をかぶった商品を買う必要はありません。消費者的な視点に立てば中心市街地はいらないということになるのかもかもしれません。

しかし、それだけでは無く、住んでいる人の生き方の観点から、中心市街地の活性化を考えていけば良いと考えています。

女性、30代（相馬市）

「まちづくり」がなぜ必要か。商店街が無い場合に困る消費者は、小さな子供をもつお母さんや高齢者だと思います。

「ひとに優しいまちづくり」と最近いわれてますが、実際には人に優しい街にはなっていないと思います。

私は、最近まで、自動車免許を持っていなかったため、自転車や歩きが多かったのですが、細い道の側溝のフタが無かったりと、歩行者や自転車に乗っている人に対する配慮が無く、本当に「人にやさしいまちづくり」になっていないと感じます。

商店街にお客を呼ぶためには、まず、商店街とお店を知ってもらうことが必要であると思います。

女性、60代（鹿島町）

高齢者にとって優しい街であることは、非常に重要なことだと思います。

私たちが住む鹿島町は、原町市と相馬市に挟まれており、活気のない街であることから、女性が、何か勉強する必要があると思い、現在、生ゴミ処理に取り組んでおります。

昨年より40世帯で活動を始めましたが、まずは、生ゴミを肥料として再利用する取り組みをしています。現在では100世帯に広がっています。

このような取り組みを通して、「まちづくり」を考えながら、住民がここに住んで良かったというまちにしていく必要があると思っています。

男性、60代（原町市）

30年後、郊外に住む人々は、このままで満足するのだろうかと考えております。現在は、郊外大型店に車で買物に行き、便利であると考えているのですが、70歳になった時に、実際にその場所が便利か、また、住みやすいか疑問であります。

私は、高齢になった時に、値段が安いとか、物が良いというのではなく、近場で買える、歩いて行って買えるということが大切だと思います。

今回の議論も、中心市街地が空洞化しているから活性化をどうしようかというのではなく、行政・市民・商店街の人たちが一体となって考えていく必要があると思います。

商店街は、昔のご用聞きのように、お客様にどうすれば役に立てるのかを考えるべきだと思いますし、行政は、お年寄りが安心して住める、また若い人たちと共生できるような住環境の整備を図るべきだと思います。単に商店街をどうするかというだけでは、同じことの繰り返しとなるでしょう。

また、自分たちのまちを自分たちで守るという意識が必要だと思います。行政は、そういった意識づくりをしていく必要があるのではないのでしょうか。そうでなければ単なるハードの整備だけに止まってしまうと思います。

女性、40代（大熊町）

大熊町の「まちづくり委員会」に誘われ6年になります。当初、参加者は、理想に

燃え、いろいろなことを考えてきましたが、実行段階になると困難なことがあったりで、最近では、そのころの熱い思いをどこかに忘れたのではないかのよう、会自体が閉塞感みであると思うことがあります。

「まちづくり」を考える際、中心市街地の問題だけを考えるのは難しいと思います。もっと大きく考える必要があると思います。

私も、今は、車で郊外大型店に買物に行ってしまうますが、高齢になった時に、やはり中心市街地が必要だなと感じました。

男性、30代（原町市）

私自身、中心市街地で商店を営んでいますので、これまでの皆さんの意見を聞き、中心市街地に対する期待という点で、非常に勇気付けられました。

これまで会社員をしております、地元に戻ってきた時に、あまりの街の廃れ様に愕然としました。そこで、若者で構成する委員会を組織し、夏祭り等のイベントに取り組んできました。

「人に優しいまちづくり」もそうですが、住んでいて良かったなと思える街や商店でありたいと思います。

中心市街地の活性化は、行政の取り組みはもちろんですが、やはりそこに住む住民がいかに取り組むかが重要であると思います。私を含め、若者の危機感が低いように思うことがあり、意識改革が必要だと考えます。そのためにも中心市街地の重要性を改めて考える必要があると思います。

また、私も子供がいますが、小学校の学区の問題があります。近頃、郊外の学校は児童が増加しているのに対して、中心市街地にある2つの小学校では減少しています。このような状況で中心市街地に2つの学校が必要なのかと感じており、統合して住宅や高齢者が利用できる施設を作ってみてはどうかと考えております。そうすれば、商店街でもターゲットを絞った経営ができると思います。

男性、40代（檜葉町）

私は、中心市街地の活性化とは、商業の活性化かということ、そうではないと思います。また、中心部に大型店があり、人が集まってくると活性化しているかということ、そうではないと思います。

中心市街地は、車が無くても居心地が良い街であるというのが、今後、求められる「まち」の姿ではないかと思えます。そんな「まち」は、誰にとっても居心地の良い街であるはずで。

便利さだけを追求すれば、郊外に大型店と公共施設をドッキングすれば、車を自由に止められ、何でもそこで揃いますので、少なくとも私の世代は便利ですが、それだけを求めてしまっているのだろうかと思えます。

居住人口を増やすために中心市街地に住宅を作るという話がありますが、人口そのものが増加していないのに、遠くの人を連れてきて、中心市街地に住ませるという論理が通用するはずがありません。居心地が良いから人が住むのですから、安心して子供を育てることができる、お年寄りが安心してくらせる「まち」であれば、自然と人が集まるはずで。

中心市街地は、土地が入り組んでおり、地価が高いという面がありますが、そこに医療機関があり、商店があり、広い校庭を持った学校があり、ボランティアがあり、それを行政がコーディネートする場所であるならば、何十年も住みたくなくとも思いません。

女性、50代（大熊町）

「まちづくり」をするためには、「人づくり」が必要だと思います。どの街も私達の年代が中心となっておりますが、若い人達に元気がないと言っているだけではだめですので、年上の人達の意見を聞いて、がんばる商店街として元気な「人づくり」が重要だと思います。

相双地区にも郡山のように、まちづくりのプロのような人が欲しいと思います。

男性、30代（双葉町）

大型店があれば便利かと聞かれれば、便利だと思います。私も双葉町の商店街に出店していますが、双葉町の中心街も崩壊状態であると思います。

なぜならば、商店街の跡を次ぐ人が非常に減っていて、お祭り、商工会活動、消防活動も、みんな限られた人達ばかりです。後継者がいないために、店を辞めたお年寄りが、その場所に住み、新しい店も増えずに、土地を売る人もいないので、これから

店が増加することは無いと思います。

先程、「人づくり」という話がありましたが、若者が少なくなってきたということが大きな問題であって、これからは双葉町をどうするかではなく、双葉郡をどうするかといった大きな視点で考える必要があると思います。特に大熊、双葉、富岡のように原子力を抱えている地域は、原子力が止まればいずれ廃炉の町になってしまいます。それもさほど遠いことだとは思いませんので、双葉郡地域としてどういう「まちづくり」をするのかということを考えなければならないと思います。

女性、50代（小高町）

小高町の真ん中に住んでいますが、サラリーマン家庭なので、中心市街地がどうか、郊外大型店がどうかといったことをあまり考えたことがありませんでした。

小高町では、商工会青年部の人達が頑張っています。私達のような者からも意見を聞いている色々なイベントを実施しているようです。

また、小高町に「かけの森」という「ふくしま百景」にも選ばれた山がありますが、私も森を守る会に入っておりまして、営林署に伐採中止要望書を出したり、登山を企画したりと、そういった資源を利用して活動しております。

高齢者にとっては、中心市街地の店でお話をしながら、買物をするのは、とても嬉しいことのようにです。タクシー代は非常に高いのですが、中心市街地で買物をする、100円に1つのスタンプをもらって、それを集めるとタクシーが安く利用できる取り組みをしています。

私は、人形劇アプリコットという団体でやっているのですが、「まちづくり」にも子供の情操教育が必要だと思えます。

男性、60代（原町市）

日頃より中心市街地が必要であると思っていますが、それは中心商店街という意味ではありません。中心市街地は、商店街があって、行政の出先機関、病院があり、憩いの場であったりと、いろんな機能で構成しています。

これから高齢化社会を迎えるにあたり、子供や高齢者が、歩いて楽しめる中心市街地「まち」にしなければならないのと思っています。

中心市街地の一番の問題は、商業者の自覚であると思います。いろいろな会合をもっても、商業者の出席が非常に悪い状況です。

次に、駅前開発や通りの改良をしたいという時に、一部の方の反対がある。確かに個人の意見を大切にすることは大事ですが、みんなで取り組もうとしている時に、1人や2人の反対によって、計画が挫折してしまうことがあり、これは大変なことだと思っています。

次に、空き店舗の問題ですが、非常に地代・家賃が高いと思います。地代・家賃の補助がある期間は良いですが、それが無くなると続けることができません。固定資産税や相続税を安くするといった税制面で検討していただいて、中心市街地でがんばる人に支援が必要であると思います。

もう一つ、私は、NPOで花作りをしています。自然公園を中心に、市街地にも常に花のある街にしたいと思っています。

この相双地域は人の住みやすい、住みたいところであると思いますので、文化などを中心に住み良い街にしていきたいと思っています。

男性、30代（富岡町）

中心市街地において、高齢者用住宅の建設や区画整理をすべきだとの話がありましたが、富岡町の市街地においても人口が増加しない状況であり、郊外に人口が移り、大型店舗も郊外に展開して、若い人からすれば郊外の大型店が便利であることは間違いないと思います。

郊外と中心市街地との棲み分けをしながら、住民と行政との方々との話し合いが必要であると思います。

やはり、住宅問題は、行政の取り組みとして中心市街地に住みやすい環境をつくる必要があると思います。

現在、相双地区では浜街道の整備が計画されています。これは広野町から小高町まで海沿いに一本の道路で結ぼうという計画ですが、これまでの行政主導の道路計画でなく地元住民と共に計画を作っています。

例えば、「Jビレッジ」に50万人、楢葉の天神岬に50万人、併せて年間100万人以上の人々が浜通りに来るわけで、各市町村が持つ資源を活かして、「まちづくり」に活かしていくことが必要だと思えます。

女性、60代（鹿島町）

先ほど原町市の方の話の中で、東ヶ丘公園を中心にした花のあるまちづくりをしようという話がありましたが、この地域の、恵まれた自然を中心にまちづくりに生かしていこうというのはとても良い考えだと思います。

鹿島町も同じように、海に川に山に恵まれています。それをどう生かしていくの、行政の方々と私たちが一緒になって考えて行かなければならないと考えています。

まちづくりは、やはりここに住んで良かったということがとても大事だと思います。

そのためにも、子供にも、高齢者にも、障害者にも、買い物をするにも、みんなに優しいまちづくりが足下から、行政も私達一人一人も考えるということが欠けているのでは無いかと思っています。

現に、新しい道路ができてみると、できたばかりの道路に、障害になる段差がついている。せっかく街の中で買い物をし易くしようとして整備した道路のはずなのに、そんな道路になっている。

誰が、こんな道路を計画したのか、誰に言えばこういったことが無くなるのか、行政の人にもっとよく考えて欲しいと思います。

街の活性化は、これから人口が増える見通しがあるわけでは無いので、先ほど誰かの話にありましたが、お年寄りが買い物をし易いお店、そこにいってお茶を飲んで、あるいはお話をしながら買い物ができるお店、どこにもない個性的で特徴のある店、暖かみのあるお店があればみんなが買い物に来るようになるのではないのでしょうか。

男性、30代（双葉町）

私の町がどうか、私の地区がどうかといった地域エゴを無くし、もっと地域全体のことを考える必要があると思います。

中心市街地も、どうしても此処でなければならないというものでないと思います。場合によっては、中心市街地が移っていても良いいいのではないかと思っています。

また、先程から、お年寄りという話がたくさんでていますが、それも大切なことですが、それを支えていく労働人口となり、また子供を産み育てる若い世代の人達が住みたいと思える「まちづくり」をする必要があると思います。

傍聴者（男性）

現在の街は、大きなスーパーがあり、公共施設がある等、それだけで「まち」ということとなっていますが、私が子供からの考えていた街とは、いろいろなものが混在し、ごちゃごちゃした、混沌とした、雑居だと思います。

街とは、人生の縮図のような、世の中の縮図のような、そんなところのような気がするんです。子供のころから、ワクワクする、いつも行ってみたいという憧れがありました。

便利さだけを追求するのではなく、そんな街が必要な気がします。

先程の話の中で、子供の情操教育の話がありましたが、子供だけでは無くて、大人のお情操教育も必要だと思います。

原町市は、昼間は閑散としていますが、夜になると賑やかになる場所が残っているので、若い人との交流と、生涯学習を兼ねて、勉強できるような気がします。

福島県まちづくり懇談会 県民との意見交換会（相双２部）

相馬商工会議所

相馬市の現状を見ますと、商業者が本来果たすべき機能を果たしているのかと疑問を感じております。朝８時半～９時頃、市内の商店街を歩いてみますと、店を開けていないところが大半を占めているのです。朝、通勤前に何か用を足そうとしても開店していなければ、コンビニ等に流れてしまうのは当然のことであると思います。

そういったことを防ぐために、商業者の方々が、職住一体型の店舗を作っていくことが必要であると思います。大半の方が、街の中に住んでおらず、郊外から通っているという形態では、どうしても「商い」という本来の小売業の機能が果たされないのではないのでしょうか。商業者の意識改革が必要なのではないかと痛切に感じています。

原町商工会議所

私も商業者ですが、商業者のやる気という点で、同じように感じております。その理由の一つとして、商業者の高齢化というものがあると思います。店に後継者がいても、経営権をなかなか譲らない、いわゆる財布を渡さないということがあつたのです。

どうやって後継者の気持ちを振るい立たせるかといいますと、後継者の方々に夢や希望を持ってもらうことが必要だと思つたいます。

そのために、みんなで力を合わせてがんばっていこうという傾向はありますが、どうしても１度外に出ていた人達は横のつながりが薄いといった問題があるようです。そのネットワークをどう作っていくのか、先輩方が暖かい目で見守り、支援をしていくスタイルが是非必要ではないかと感じています。

原町市では、昨年、「夢商人塾」を作り、後継者の月１回の勉強会を開いています。後継者は、経営の勉強をする必要がありますから、勉強をしながら、仲間を作り、みんなで何かをやるとういう動きがあります。

原町市商店会

現代社会において大型店が持つ役割は大きく、便利さという点で、消費者の中に溶け込み、それを消費者も求めております。

問題となるのは、その立地場所でありまして、郊外への大型店出店は、中心市街地の疲弊を招いているように思つたいます。大型店側からすると、道路事情、周辺人口の増減傾向、行政の基盤整備や商業振興策の状況等をふまえ、郊外の白地地区に出店し、街中から集客するといったことになるのでしょうか。いかに中心市街地に回遊性を持たせ、楽しみ、出会い、といったことを目標に努力しているところではあります。

「まちづくり」は都市計画であり、自分たちの街は自分たちで決めるといった意識が低く、お上頼りといったことになっているような気がしています。

大店立地法では、環境などの面をクリアすれば何処へでも出店できるようですが、町の中には、そういった大型店を用いて商業集積地帯を作りたいという所もあると思つたいます。また逆に、20年、30年先の人口が増加しないであろう状況からすれば、コンパクトシティといった概念もあるのではないかと思つたいます。

そのためには、将来展望というべき指針を国や県、一番良いのは市町村が考えれば良いと思つたいます。商業がいくら自由だといつたいても「まちづくり」のウエートは、とても大きく、大型店進出により、その方向性が変わってきたという状況が、この20年、30年の間、続いてきたわけではあります。

商業や住宅の郊外への流出が、このまま拡大していつて良いのか、非常に気になっています。もし、このまま郊外への大型店が進出することが良いのだということを市民が選択するのであれば、中心市街地「まち」を半分、捨てる覚悟が必要だと思つたいます。その辺りをあやふやにしたまま中心市街地をどうするのか等と言うのは、無理だと思つたいます。

浪江町新町商店街

これまで、10年ほど活性化に取り組んでまいりましたが、いろいろと挫折してきました。様々な有利な資金を調達し、何かをやるうとしてきましたが、手続きの複雑性、利用までに3年もかかるとうつたようなことで、もっと簡素化して、支援できる方法がないのかと率直に思つたいます。

商店街には、小さな専門店が集まっている訳ですが、個店が、大金を出して何かに取り組むことは、なかなか難しいことです。また、中心市街地は、地価も高いですし、権利関係も複雑なので、ある程度の規模でやるうとしてもできない場合が多く、頓挫していることが多いようです。

大店立地法では、環境さえ整えば立地するを止められない法律になっています。私たちは反対もできませんので、人口1、2万の町であっても作っても良いと思います。が、いざ経営が傾いた際には、行政は支援しないで欲しいと思います。出店するのも自由なのですから、潰れるときは潰れて良いと思います。

原町商工会議所

郊外の大型店対中心市街地の商店街という見方をすると、どう見ても中心市街地の商店街に勝ち目は無いと思います。

では、中心市街地の商店街が、どのように対応して行くかという、商店街を一つの大型店と捉える見方が必要ではないかと思えます。

また、私たちも「まちづくり」は、必要だと考えていますが、私たちは商店主ですので「まちづくり」のために商売をしているのではなく、自らの生活のために商売をしています。私たちは、経営がうまくいくように努力していきますので、その商売が継続していけるよう、行政は市街地整備をしていただきたいと思えます。

昨年7月、TMOの認定を受けたところですが、まずは、ソフト事業を中心に、各商店街の方々に「やる気」を出していただくこうという取り組みを中心にやっており、その積み重ねが重要だと考えております。

相馬商工会議所

郊外にバイパスをよく建設しますが、立地法さえクリアできれば、そのバイパス沿いに新しい大型店が出店します。なぜ、郊外にバイパスを作るのでしょうか。

極端なことを言えば、せっかく作ったバイパスに大型店が出店し、渋滞を招いている状況が起きています。市街地の渋滞を解消するためのバイパスが、結果的に大型店の集客のための道路になってしまっている。できれば、バイパスは、右折だけでもできないように規制することはできないかと思っています。

また、用地問題があるとは思いますが、県営、市営でも構わないので、中心市街地内に住宅を作っただけないかと思えます。いくら魅力的な店を作っても人がいなければ商売は難しいと思えます。

なお、私の息子も後継者として働いているのですが、後継者が何かをする場合、資金が調達できないことがあります。ですから県で、後継者を支援するための制度資金などを設けていただきたいと思えます。

大熊町商工会

大熊町には、街中に多くの住宅団地がありますが、その住人が近くの商店街で買物しているかという点必ずしもそうではないようです。

つまり、街中に住宅があれば、商店街で買物するかという、そうでは無いように思うのです。消費者は、大型店にただ便利だからという理由だけで行っている訳ではないと思えます。そこに時間を楽しめる空間があるからこそ、若い人も、お年寄りも買物に行っているのだと思えます。

ただ、近くで手軽に買物をしたい人もおりますので、コミュニケーションを図りながら、行政に頼るだけではなく、努力する必要があるのではないかと感じています。

大熊町は、他の市町村に比べて、公共施設に恵まれていると思えますが、商店街に元気があるかという点そうではない気がします。民・業・官が一緒になって取り組んでいくことが重要だと思っております。

原町市商店街

原町市に仲町という団地があります。20年、30年前は、若い世帯の多いところでしたが、現在では、子供達が自立し、老夫婦や1人住まいの方が増え、かなり変化してきている状況です。

それと同じように、住宅も大型店も公共施設も郊外に移転し、また、20年、30年すれば、また同じようなことが繰り返されるでしょう。

その大きな理由として、車社会が挙げられると思えますが、これからは、それぞれの街なり、行政においても、思い切り方向転換を図っていかなければならないと思えます。また、そうしないとこの環境を維持しながら生活をしていくということができなくなってしまうのではないかと感じています。

これまでのような拡大路線により郊外に住宅、公共施設ができていくとなれば、大変な時代になると思えますので、このあたりで、新たな「まちづくり」を考えて行かなければならないと思えます。

浪江町商店会

浪江町では、郵便局や役場が街中で建て替えられました。他の市町村は、なるべく国道6号線の側に公共施設を作りたいと考えているところが多いようですが、町長は、街中が寂れることを理由に、公共施設を街中に建てると言っております。

市街地活性化を図るために、以前、店舗を集積し「パティオ」を作ること考えました。しかし、市街地は、土地の権利関係が複雑であり、一定の土地を確保するためには、既存の住宅や商店の移転が必要となります。そういった移転費用を現行の支援制度で賄うものは無く、何かしようにもその辺りがいつもネックになっております。そこを行政で何とかしていただけないかお願いいたします。

原町市商店会

現在、福島、郡山、会津若松における市街地の居住人口は、やや下げ止まりの傾向にあるということですが、やはり、市街地の居住人口を増やすということは、民間だけでできる問題ではないと思いますので、行政の施策を講じて欲しいと思います。

原町市では、福島市や郡山市のようにマンションを建てても、需要があるとは言えません。少し郊外に行けば、一戸建ての家が持てるということで、かなり難しいと思いますが、衣食住が市街地にあるような街というものを考えていかなければならないと思います。

男性、30代（いわき市）

私は、現在34歳で、地元で企業経営をしていると同時に、青年会議所で「まちづくり」に参加させていただいております。

卒業後、銀行員になりまして、海外のいろいろなところに住みました。5年程前にいわき市に帰りまして、現在のいわき市、特に中心市街地の疲弊に耐え難い思いをしております。

前提として、これまでの中心市街地の空洞化とこれから起こることは大きく違うのではないかと思います。1960年代からの高度成長の右肩上がりの経済成長の中で、空洞化が進んだということは、マイカー社会の進行であったと思います。ということは、これから起こるであろうことは、特にいわき市に言えることだと思うのですが、単に小売業ということではなく、地域経済の全体的な疲弊だと思います。特に製造業は、生産拠点がますます海外にシフトしていきます。日本の海外生産比率は8%だと聞きましたが、ドイツの16%、アメリカの25%に比較しますと、まだまだ海外生産比率が低いと聞きました。逆に言うと、これからますます海外に生産比率が高くなっていくということです。

特にいわき市のように、高度成長時代の重厚長大型、東京に代表される中央資本の出先が多いところであれば、生産拠点の海外シフトの影響は真っ先に来ると思います。これから、中心市街地の空洞化というのは、さらに深刻になっていくということです。

先日、竹中大臣の話聞いた際、今、我々がいるところは、がんばれば何とかなるという次元をとっくに乗り越えているといった話がありました。ということは、中心市街地、あるいは商業、小売業、商店街ということであろうと、かなりドラスティックにモデルチェンジしなければならないのではないかと思います。

ではどうしたら良いのかと言いますと、日頃、考えていることが2つあります。一つは、集積ということです。二つ目は、他の街といかに違うかということです。

一つ目の集積には2つあります。一つは「コンテンツ」です。集客ソフトが何かということです。もう一つが「ターゲット」です。だれをターゲットにして街を考えるのかということだと思います。

もう一つは、いかに他の街と違いを出すのか、つまり、戦略論だと思います。他に勝つためにはどうしたらいいか、他といかに違うのかということが大きなポイントだと思います。ですから、私は、箱物を作り、リトル東京のような街をつくるのには反対です。

特に今日、お話ししたいのは、集積の部分でして、郡山市といわき市は、ほぼ同じ時期に市町村合併をしたわけですが、郡山市といわき市が、なぜ、これほど差がついてしまったのかということ、集積が起こったか、否かだと思います。これが大きなポイントだと思います。今年、商工会議所で、米国視察があり、オレゴン州のポートランドというに行きました。ポートランドは、公共事業の成功事例として挙げられる都市ですが、私が一番感銘を受けましたのは、「バウンダリー」ということでした。「バウンダリー」とは境界ということで、ある一定地域に開発を絞るという政策のことです。ある一定地域内だけ開発を集中して、その他の地域では開発を極力絞るということでした。

もう一つは、ターゲットというものがあります。全国どこでも若い人を集めようとしているので、全国に同じような街ができています。

私はターゲットを変えるべきだと思います。ターゲットを変えるということはどういうことかということ、若者をターゲットにするのではなくて、むしろ他のセグメントをターゲットにすべきだと考えます。私が考えているものは、高齢者を中心とした「まちづくり」をしてみてもどうかということです。私は、ベテランズシティ構想と名付けてまして、できれば自分のライフワークにしたいと考えています。

私が言いたいことは、「絞り込み」と「制限」ということで、むしろ我々は強制的にテーマなり、アイデンティティなり、我々がいわき市とは何たる街か、平とは何たる街かということを決めていかないと難しいと思います。

女性、50代（いわき市）

私は、「人が安心して暮らせる街」、つまり、高齢者や弱者に視点を置かない「まちづくり」は考えられないと思います。街の構造を高齢者、障害者、子供たちが安心して、通行できる都市構造にすることが必要だと思います。

私は、福島県に「やさしいまちづくり条例」ができた際、審議会の委員をやりました。

自動ドアの設置、公共施設の設備の整備といったことが出ましたけど、車椅子でいかに安心してそこに行けるかということを考えてこそ、高齢者や弱者がそこに行けるのではないかと思います。

いわき市の中心市街地が、なぜにこんなに空洞化が進んでしまったのかといいますと、いわき市の方々は、「地域は自分のもの」、「自分のための地域」、「地域のための自分」という部分が欠けているのではないかと思います。14市町が合併して、面積が広いから仕方がないといったように逃げてしまいがちですが、面積が広いからこそ、いろいろな資源に恵まれているからこそ素晴らしいと思うのです。

いわきの人達は、今、自分たちに何ができるのか、自分たちは何をしなければならぬかを考え、21世紀を担う子供達に何を残さなければならぬのかを考えたとき、これは環境問題だと思えます。

21世紀に豊かな自然を残すために、今、起こっている環境問題を解決し、自分のこととして考え、次世代に残さなければならぬものは何なのかを考えていくことで、「まちづくり」というのは、市民、住民にターゲットをおいたものにしなければならないと思えます。

女性、40代（いわき市）

私たちは、いつも行政が何をしてくれるのだらうと考えるのではなくて、自分たちの住む街を自分たちで良くしていこうという意識をこれからは持っていかなければならないと思えます。

2025年には、現在よりも一層深刻な高齢化社会を迎えますので、あらゆる世代の人達が、誰もが住みやすい街であるために、魅力ある「まちづくり」を考えていかなければならないと思えます。

私は、いわき市の男女共同参画プラン推進懇話会の委員をさせていただいております。その会議でも、私たち女性の意見、それと女性が活躍できるような、能力や個性が十分に発揮できるような場所が必要だと言っております。これからの「まちづくり」に女性の力、女性の意見を十分に反映させていくことが大切だと思えます。

以前、アメリカのボルダーという景観にとっても配慮した町に行った際、20メートル以上のビルを建ててはいけないという厳しい条例がありました。学園都市としてとても整備された町でした。いわき市も美しい街であるとともに、誰もが楽しく、活躍でき、生き生きできる「まちづくり」をする必要があるのではないかと思います。

女性、40代（いわき市）

私は、いわき商工会議所の環境形成まちづくり特別委員会の委員として、一期目は河川問題、環境問題、事務問題、二期目は、公園や病院、教育問題に取り組んでいます。

吸引力を高める、来やすくするといったことが課題になっていると思えますが、この問題で感じることは、店舗が画一的で楽しくなく、シャッターの降りた店舗もあり、街に来て暖かみを感じないことだと思えます。

商店街の人達は、花を植えたプランターを置いたりするなど、努力されていると思えますが、やはり、旧態依然としたディスプレイなどではなく、もっと研究する必要があると思えますし、イベントを年間を通して開催できるよう検討すべきだと思えます。

環境面では、屋外広告物を極力減らし、無味乾燥な空き地や駐車場やビルの屋上にまで緑を増やすなどして、夏の暑さをしのげるような方法を探るべきではないかとも思えます。

また、高齢者をターゲットにというお話がありましたが、街の中に老人ホームなどを建設し、高齢者がおしゃれをして、街に出かけることができるようにするのも1つの方法だと思えます。郊外に老人ホームをつくるのではなく、スウェーデンのように街中に老人ホームがあるようにしたら良いのではないのでしょうか。

なお、公共交通については、大きなバスでなく、少人数で乗れる小さなバスを本数を増やすことによって、利用者が増加するのではないかと思います。

女性、40代（いわき市）

街は、やはり人がいて街だと思えます。時間を潰すためだけにでも歩きたくなるのが街ではないかと思えます。

私もイベントが多ければ良いと思っています。何をやれば良いのかというと、海外の事例を研究されている方もおられるようですが、狭い日本では土地の問題などがあり、海外のようにはいかないことが多いので、それを逆手にとり、狭いながらも何か

できる、いわき市だからこそできるといったものを考える必要があると思います。例えば、2週間ごとに、担当地区を決めて、今回は四倉地区、次回は勿来地区といったように、街を紹介していくようなことも良いのではないかと思います。

確かに、街中に老人ホームを建設するといったことも良いと思うのですが、私は、いろいろな年齢層の人達が集まってくる場所が街だと思いますので、若者が来ないのであれば、彼らにいわきの魅力を紹介していくことも、私たちの役目なのではないかと思えます。

青森に空き店舗の一角を学生に任せてしまっているところがあるそうです。そこは、大学生や高校生が集まり、そして情報発信基地となり、いろいろなことができるわけです。街には、いろいろな人が集まってくる場所が必要だと思えます。

男性、60代（いわき市）

今年、いわき市では、中心市街地の活性化計画を作りました。そして、商工会議所がTMOの認定を受けております。

しかし、私は、「まちづくり三法」というのは全くバラバラではないかと思っています。この「まちづくり三法」で、本当に「まちづくり」ができるのか非常に疑問です。

例えば、国道に面した郊外に大型店が出店するという申請があると、近くに第一種住居専用地域があっても、現在の建築基準法では確認申請があれば、市はそれを受けざるを得ません。また、大型店舗立地法においても、言えることは、騒音、交通渋滞といった環境問題のことだけで「まちづくり」の観点から大型店の立地の是非について意見を述べることはできませんし、調整もできません。

ドイツでは、大型店の郊外立地規制と中心市街地への商業の誘導といった施策を、車の両輪として進める仕組みをつくっています。

現在の法の中で、こちらには大型店を誘導する、こちらには出店を禁止するという仕組みを地方自治体がつくる必要があるのではないかと思います。

先程のポートランドの事例で、ゾーニングの話がありましたが、今の都市計画法の中では、我々が考える機能配置というものには応えられませんので、やはり地方自治体が独自に、そういった措置をとれるものを示して欲しいと思えます。

男性、30代（いわき市）

中心市街地と郊外大型店ということ言えば、中心市街地の道路が狭くなり、それを解消するためにつくったバイパス沿いに公共施設や大型店などの建物が建ち、中心市街地が寂れていくといった追っかけあいをしてきたような気がします。もともと、交通渋滞の緩和を目的につくった道路が、中心商店街の空洞化を招いているのです。

しかし、このまま中心商店街を寂れさせて良いのかといえますと、それではいけないと思えますので、何かしらの規制というものが必要なのではないかと思います。先程、条例の話がありましたが、そういった措置を含めて考えていく必要があると思えます。

いわき市は、14市町村が合併してできた大きな市です。いわき駅前の平地区を中心市街地として、決定したところでありますが、単に平地区だけが活性化すれば良いのではなく、規模は違うけれども同様の問題を抱える小名浜地区や勿来地区なども活性化させていく必要があると思えます。ですから、一市に一つしかTMOの認定が受けられないというのは、おかしいと思えますので、是非とも検討願います。

もう一つ、話しておきたいことは、商店街では、後継者がどんどん減少しています。何かに取り組みうとしますと、できれば私の代だけで、ゆっくり静かに終わらせてくれという商店が非常に多いような気がしています。

男性、70代（いわき市）

いわき市は、冬もそれほど寒くありませんし、夏もそんなに暑くないということで、過ごしやすいところだと思います。それでいて、中心市街地が寂れていくというのは、やはり商店街に魅力がないからではないかと思えます。

何カ月か前の高校生アンケートにおいて、「面白くないから街には行かない」という結果が出ております。この原因も、魅力的なお店が少ないからではないかと思えます。魅力的なお店というのは、小さくても専門性のあるお店ではないかと思えます。

私も、いろいろな場所で、「まちづくり」に参加していますが、そこで感じることは、商店街の皆さんは、やや積極性に欠ける、又は積極的であってもその方法を知らないのではないかと思います。

したがって、そういったやる気のある人達を指導・支援することができる人というのが必要だと思っています。

市の商工労政課で、商人育成事業をやっております。こういったことも結構だと思いますが、資金調達の方法や、効果的な補助事業の使い方などを支援していき、何処かに成功事例をつくるということが必要なのではないかと思います。

もう一つは、中心市街地の商店街の後継者を育てることだと思います。最近、高齢社会になり、できれば街中に住みたいという人が増えてきていると聞いていますが、市でやっている特定優良賃貸住宅のような制度をもっと積極的にやっていく必要があると思います。その場合、条件の緩和等が必要なのではないかなとも思います。

また、郊外の宅地開発が進んでいることが、中心市街地の活性化の足を引っ張っていると思います。最近、中心市街地の地価が下がってきていることから、今が中心市街地に回帰させるチャンスなのではないかと思いますので、開発会社などへ資金的な支援など行うことにより、市街地の開発を進めることも必要なのではないかと思います。

男性、70代（いわき市）

私は、NPOを勉強し、いろいろな取り組みをしておりますが、いわき市に第一に必要なことは、人を育てることだと思います。そのためにも、まちづくりのためのNPOが必要だと思います。そこで長期的な街づくりのビジョンをつくるために話し合うということが大切だと思います。

もう一つは、いわき市内に約300近くあるボランティアをネットワークで結び、様々な支援をすることも必要だと思います。

また、「まちづくり」は、その街の歴史を知ることから始める必要があり、その歴史を知り、自分やその先祖達が住んでいた地域に感謝し、その感謝の心を植え付けることが重要だと思います。

「まちづくり」については、それぞれが様々な考えを持っていると思いますが、昔から言うように、「まちづくり」には、若者、馬鹿者、余所者という3者が大事であり、かつ具体的に行動することがまずは大切だと思います。私は、自分自身で具体的に始めており、行政との良いパートナーシップによって、具体的に行動するということが必要だと思います。

最後に、行政はもっと市民の意見を聞く方法を具体的につくっていくことが必要だと思います。

男性、50代（いわき市）

私は、平地区のまちづくり委員をやっています。いわき市はとても広く、全部まとめて進めていくのは、非常に難しいことです。

平地区を中心に活動しておりますと思うことは、「まちづくり」は、全てを行政にやってもらうということではなく、市民が結集し、行政と一緒にやっていかなければならないのではないかと考えています。

また、道路をつくる時など、様々な方面と関係してくるにも関わらず、縦割りで動いている感じがします。行政は、それぞれ組織があると思いますが、もっと話し合っただけで進めるべきではないかと思っています。市民共々いろいろな意見を持ち寄り、話し合っただけでいくべきであると思っています。

私は、いわき市の生まれではないのですが、いわき市は結束の悪い街であると感じます。何についても2つに分かれて対立してやっているといった傾向があります。これを結束してやっていけば、それぞれに良い意見を持っているですから、いろいろなことが進んでいくと思います。是非、みんなが一緒になって取り組んで欲しいと思います。

男性、30代（いわき市）

青年会議所で「まちづくり」に取り組んでいますが、そこでまず議論するのは、中心市街地とはいった何なのだろう、本当に必要なのだろうか、行政は本当に中心市街地を必要としてきたのだろうかということだと思います。

官民一緒になり、これまでの歴史があり中心市街地を構成してきた公共施設などを郊外につくってしまいました。その結果、中心市街地が空洞化していき、これは拙いということで、軌道修正をしてきたのだと思います。行政には、条例などを制定し、ある程度強制的に、街中に集積するような施策をお願いしたいと思います。そうしなければ、この空洞化は終わらないと思います。

また、いわき市には郡山と違い拠点各地にあります。これをマイナスに考えるのではなく、地域の特徴を生かし、ゾーニングをすることにより差別化していくことが必要だと思います。首都機能移転にあるクラスター構想のように、いわき市は各地

にブドウの房のように拠点があるような街づくりを進めていけば良いのではないかと思います。

また、中心市街地には、商店街だけでなく、その他の集客施設を活かしていくことが重要だと思っています。

いわき市の中心市街地活性化の基本計画では、「大黒屋」の周辺を文化ゾーンとして位置づけ、整備していくという、すばらしい計画があります。そういうものを作っていけば、気候にも恵まれているいわき市の街は再生していくと思います。

中心市街地を活性化するために、もう一つ大切なのは居住人口の増加を図ることだと思います。そのためにも住みやすい環境をつくる必要があります。それには行政の力が必要になりますので支援していただきたいと思ひますし、住宅の整備や固定資産税等の税制の優遇など、私達も協力していきますので、よろしくお願ひします。

女性（いわき市）

駅前には、地権者の利権などがあり、なかなか整備が進んでいません。例えば、バスの停留所もバラバラで、とても利用しにくくなっています。地権者の協力が得られれば、もっと整備が進み人は集まってくるものと思ひます。

大黒屋の倒産により、私達は、集まってお茶を飲むという場所が無くなり、とても寂しく感じています。

また、中心市街地に老人ホームや病院などを建設するということは、とても良い話だと思います。

いわき市では、あちこちでバラバラに開発を行っていることが、非常に残念です。それに一定の規制をかけて、整備していくということが必要だと思ひます。

女性（いわき市）

私達は、小名浜と植田の方で、古着の販売をしながら海外支援をしています。そのお店の中には、知的・身体・精神障害者が働く小規模作業所を設け活動しています。その活動の中で思うことは、中心市街地では、街の住民の仲間として迎えられていないということです。

私たちが、植田の駅前に精神障害の方々と作業所を開設したときに、住民の方々から反対が起きるのではないかと心配したのですが、いざ始まってみればそういったことはなくて、毎日顔を付き合わせることでより障害者に対する理解が得られましたし、障害者にとっても良い働く場になりうるということを実感しました。

しかしながら、そういった場所が平の中心市街地にあるかという点皆無です。街にはそういった障害者を受け入れられる土壌を造ることが、私たちが高齢者になった時に、住みやすい街につながっていくと思ひます。

また、店の前で、無農薬の野菜を作っているグループの方々に、週一回「百姓の市」をやっけていただいております。街の中に人通りがなくなったというのは、どこの街も同じでして、植田も例外ではありません。しかし、そういった取り組みのおかげで、それを楽しみにして来る方々があります。こういったことを繰り返していくことが、お金をかけない街の再生につながっていくことになると思ひます。

街歩きというイベントに参加した際、街の歴史を感じさせるものが、全く顧みられずに朽ち果てていくという現実があり、非常に残念な思ひがしました。

街の住民達は、街を誇りに思うためにそういった歴史の遺物というものを大切にしていけることがいづれ子供たちが街を愛するようになるためのきっかけになるような気がします。

いわき市は、「エコシティ」といったことを掲げておりますが、中心市街地で、何かに取り組んでいるといったことはありません。是非、他の街との差別化という意味でも、環境に配慮した取り組みをしていくことが必要だと思ひます。

女性（いわき市）

いわき市の観光の中心となる湯本温泉に住んでおりますが、みなさんが観光地に行った際に、心に残るのは自然などの他に、そこに住む人々とのふれあいではないかと思ひます。

観光地に住む住民として、お客様がお見えになった際に、少しでも良い印象を持って帰っていただきたいと思ひまして、7年程前から童謡を通じた「心のまちづくり」といったことを始めております。そこに行けばいつでも童謡が聞け、元気が出てくるといった場所をつくることを目標としております。私達ちもがんばっておりますので、行政の方にも応援していただきたいと思います。

また、公民館と一緒に童謡を歌う学校として「すずめの学校」といったものを月に

2回開催しております。1回に約200人もの方が集まって来ます。そういった活動を通じて「まちづくり」に取り組んでいます。

傍聴者（いわき市）

36万人都市であるいわき市の玄関口として、まずは、外来者の利用しやすい駅前再開発をしっかりとやる必要があります。地価が下がり、空き地が増えている今がチャンスだと思います。

傍聴者（いわき市）

駅の裏側は、中心市街地を支えてきた地域ですが、一方通行などにより導線を変えてったことで、中心市街地に行きにくくなってしまっています。中心市街地の再開発を行う場合には、駅の裏側も考えながら進めるべきだと思います。

地価の下落の影響かもしれませんが、現在、中心市街地では、あちらこちらでマンションが建ち始めています。住環境が整い始めているのに、「まちづくり」の方が積極的に進んでいかない状況にあります。

傍聴者（いわき市）

空き地を、単に駐車場にするだけではなく、高校生や農家の方に貸して、高校生であれば歌を歌ったり、農家の方であれば、野菜の直売をやったりといった利用を考えてみてはいかがでしょうか。そういったことを進めていけば、人々が少しずつ集まってくると思います。

傍聴者（いわき市）

市民の意見を聞き、市民が参加する方法をもっと講じれば良いのではないかと思います。例えば、「まちづくり」に関する住民アンケートの実施等、そういった必要があるのではないのでしょうか。

また、駅前の再開発が遅れて不便を感じています。みんなが集まり、いろいろなことできる広場、場所があれば良いと思っています。

四倉商工会

中心市街地の活性化は、商店街と連携するものだと思いますが、商店街を原点に戻って考えた場合、そこに住み、支え合うというところに集積の形態をとってきたと思います。

しかし、何時の頃からか、オフィスと住まいが別々になり、住まいが郊外に拡大することになっています。経済が右肩上がりの時には、それでも良かったのかもしれませんが、そうでない状況となり、郊外に住宅地が集積してきて、そこに大型店が出店し、人の流れが変わってきました。行政は、もっと早く気づけば良かったのですが、行政も郊外にといった施策をずっと取ってきたというのが現実だと思います。

第一部の話の中に、将来の「まちづくり」のビジョンが必要だという話がありましたが、まさにそれが大切だと思います。郊外に散った集積を街中に戻すと行ったことが必要かもしれません。

しかし、そこにも問題があると思います。そういった大きな計画を実施するにあたり、数百億ものお金をかけて成果が得られるかということ必ずしもそうとは限らないと思うのです。大金をかけて街を整備しても、失敗してるケースがたくさんあります。

ですから、ビジョンとともに住民のマインドから、身の回りの小さなソフト面を「やってみよう」ということが必要だと思います。

四倉町は、いわき市内で一番疲弊していると思います。小さな町ですが、昔は7、8人の代議士を出したり、あのような小さな町に上場企業が2つもありました。それが今では、昼間、人が歩いていないような状況です。これはどんなことしても変わらないと思います、例えば、団地を造っても買物は平へ行くはずで、何ら変わらず商店街は疲弊するだけです。

街の人達が、少しでも自分の街を大切に思うか、誇りに思う気持ちを出すかということから始めないと変わっていかないと思います。小さなことでも一生懸命やれば、少しずつ理解者が増えていくと思います。街の整備等大きな事業を実施することも「まちづくり」にとって大事ではあると思いますが、もっと大切なのは、小さなことから実際に実行していくことが大事だと思います。

中心市街地を良くする処方箋はありませんので難しいことではあると思いますが、一步でも二歩でも前に進むよう実践するしかないと思います。

いわき商工会議所

中心市街地をどうするかについて、タイミング的にはもう遅い感があるように思います。もう既に民衆から中心市街地は、離れてしまったのではないのでしょうか。

20～30年前から中心市街地の活性化を何とかしようという取り組みがなされてきたと思いますが、皆が共同で「まちづくり」をしようという機運が高まらなかったと思います。様々な計画があっても、足の引っ張り合いで潰し合ってしまったというのが実態だと思います。

それでは、現状からどうしたら良いのかといいますと、東京に例えて、平、小名浜、湯本の機能といった、それぞれの機能を尊重しあうこと。そして、既存道路の拡張し、環状線的なものを整備して、パークアンドライドの場所を作り、ある程度車の乗り入れを制限する。バスなどの公共交通を利用し、交通渋滞を緩和するといった、いわき市全体を見据えた中で、民間の取り組みを行政が側面から支援するといったことが必要なのではないかと思います。

個々の機能をどう尊重するのか、そして、それらの機能をどう結び付けるのかということで、「まちづくり」のやり方を変えてみるべきではないのでしょうか。

三和町商工会

日頃より「まちづくり」をどのように進めていけば良いのかを考えています。三和町は、宿場町であったわけですが、その宿場町を復活し、昔の屋号などを掲げてみてはどうかと取り組んでおります。

昔とは、いろいろな面で変わっていますが、商業者の意識改革が一番重要であると思います。

四倉町商工会

いわき市は面積が広く、様々な面で集積が悪いと思うことから、ネットワーク機能を充実させていく必要があると思います。

いわき市には、歴史的にも、環境的にも磨かれていない観光資源がたくさんありま

す。そういったものを大切に、交流人口を増やしていくということも考えていかなければならないと思います。

いわき商工会議所

いわき市のTMOでは、まずできることからやっけていこうと考えております。例えば、チャレンジショップのようなもので、新たなチャレンジを支援するといったことです。

また、サロンをすることにより情報を集め発信する、お互いの悩みや困りごとなどを相談しあえるといった場所を提供していきたいと思っております。昔は、床屋とか喫茶店等にそういった機能があったように思います。

もう1つは、街中看板事業です。これはいわき市の一般に知られていない貴重な歴史文化をもっと知っていただき、地元の財産として大切に、また、地元を誇りに思う心を育てて行くということをやっけて行きたいと思っております。

高齢者にとっても利便性の高い中心市街地を作っけていきたいと思っております。

いわき市商店街

大型店の出店について、以前は、一定の規制ができる法律がありましたが、それが規制緩和の流れの中で、何処にでも立地できるという条件が揃ってしまったことに中心市街地の空洞化の原因があると思っております。

こういった懇談会を実施することは結構ですが、大黒屋の倒産以来、こういった会議を何度もやっけております。行政は縦の繋がりはありますが、横の繋がりが全くなく、それぞれが個別にやっけてるように思います。

また、TMO等が実施しようとすることに對し、補助事業は一回限りとか、3年限りとかいった制限がありますと、イベントを継続することができず、話題性や市民に親しまれることがありません。

行政は、細く短い支援ではなく、太く長い支援に絞っけて支援して欲しいと思っております。

また、補助金で行うイベント等は、補助金を貰えるからやっけてるのであり、補助金が無くなれば止めてしまうといったことではなく、2~3年続いている祭りやイベントに對して、後から支援していくとう方法が必要なのではないのでしょうか。

また、現在、平地区のマップを作ろうとしています。それは、中学生や高校生が自分たちの街にどういったお店があるのか、どういった歴史があるのかなど知らないことが多いため、自分達の街をもっと知ってもらいたいと思うからです。さらに、外からおいでいただいた方に、平の街をわかりやすくするために、そういったマップがあれば良いと思っております。

四倉町商工会

大型店の郊外立地について、このように野放図に乱立する状況を行政も市民も放っけておくことはできないと思っております。大型店がたくさんできたことにより、大型店が互いの競争により疲弊し始めています。

法律で規制が緩和されたといっても、条例等でブレーキをかけるとう方法を取ることが必要だと思っております。

郊外の地権者は、やめてくれとお願いしても大型店に土地を売り、自由に大型店が立地していく、いくら「まちづくり」といっても、そういったものが自由にできてしまえる状況では、何をしても無駄であります。

こういった考えは、県内にたくさんあると思っておりますので、行政、特に、県は条例などを整備し、「まちづくり規範」というものをしっかりと定めて欲しいと思っております。それができなければ、このような懇談会など全く無意味であるので、多くの市民がそういった規制を期待していますのでよろしくお願ひします。

いわき商工会議所

いわき市の中心市街地活性化基本計画ができましたが、長い間、いわき市の中心市街地地はどこなのかとう議論をしてきました。平が、いわき市の中心市街地だとうと、勿来や湯本方面などの方から野次が入りました。

そのようなことで、行政も長い間、平をいわき市の中心市街地とうことができませんでしたが、商工会議所の努力により、皆さんに認知していただけたと思っております。

これからは、TMOが中心となり、やれることから1つづつ、「まちづくり」という観点から推進していこうと考えております。

最後に、皆さん忙しい中集まって話をしているのですから、今回のような懇談会の意見は、単に聞いたとうことだけではなく、ちゃんとした形で意見を施策に反映し

ていただくことを心から期待しています。

小川町商工会

いわき市小川町に「草野心平記念館」というものがあります。とても素晴らしい施設で、休日やイベントがあるときは人が来るのですが、平日は寂しい状況です。

いわき市には、そういった素晴らしい歴史や文化、自然、気候を生かした「まちづくり」が必要であると思います。

傍聴者

私が考える「まちづくり」は、「人・街・暮らし」だと思います。平の市街地の駐車場には、昼間は多くの車が駐車してありますが、夜間は、ほとんど停まっていません。これは、夜間人口が少ないということだと思います。

やはり街には、人が住んでいることが必要だと思います。私が提案するのは、「3世代参加型住環境づくり」でありまして、中伊豆に友達村などがありますが、こういったものをいわき市でできないかと考えています。

いわき市のように広い土地があるところは、とても素晴らしいことだと思います。街中に住む人がいないというのが、問題だと思います。

最近、中心市街地に分譲マンションが出来ていますが、それをどういった人が購入しているかということ、一度郊外に分譲団地に家を建て住んでいた人が、中心市街地に戻ってきているという傾向があるようです。こういったことがもっと必要だと思います。

傍聴者

皆さんの話を聞いていて感じたことは、皆さんはいわき市をどういった街にしたいのか、どういった「まちづくり」をしたいのかというキチンとした理念がないのではないかということです。

例えば、観光を中心とした「まちづくり」をしたいのか、産業を中心とした「まちづくり」をしたいのか、その辺りのことについて、商店の人達がどう考えているかを明確にしないと、なぜ、中心市街地を活性化しなければならないのかということも、市民にはわからないと思います。

中心市街地が空洞化しても良いのではないのでしょうか。商業は競争ですから、競争に勝ったものが生き残るのは当たり前のことであって、郊外に便利なものができて、消費者がそこを選び、郊外に家を建てるということがあっても良いと思います。昔あった呉服屋が、靴屋、洋服屋になって良いのではないのでしょうか。これも時代の変化で、潰れる店は潰れて、新しい店ができてくる。こういったことが商業の流れということだと思います。

東京でさえ、時代の変化に伴い街が変わっていくことがあります。お互い競争しあうことにより、街が良くなっていくという考え方があり得ると思います。

「まちづくり」は、市民が暮らしやすい街をつくることであって、中心市街地のために、時代に逆行した方法を取ることは間違いではないかと思っています。

傍聴者

県の本懇談会の目的は、新たな枠組みによる県の支援をどうするのかということと理解しています。そうした場合、一つは郊外の大規模店の立地規制と中心市街地の商業集積というものを一緒にやっていただきたいと思います。現在の「まちづくり三法」ではできないと思いますので、大規模店の立地に関して調整が可能であるように、県として取り組んで欲しいと思います。

また、都市の再開発は、再開発法によるものですが、これは経済が右肩あがりの時代の産物であって、もうこの時代には通用しないと思います。再開発法は、区画整理法を立体化した発想の法律で、区画整理は、土地の集積を図り減歩をし、保留地処分によって費用を捻出する方法を採っていますが、再開発法では180~200万円という高い家賃をとり、工事費を捻出する方法を採っていますので、そこで商売が成り立つかどうか全く関係ないところで組み立てられていると思います。

この再開発は、いわき市の都市計画課がやっており、商工労働部は一切関係していません。このようなことをしている場合、調整ができるのは、もう市ではなく、県の中小企業課ではないかと思っていますので、よろしく願います。

<ファックス・メール等による意見・提言>

県中（郡山市） 男性 50歳代

【意見】

中心市街地の継続的な基礎的な動態調査の必要性 通行人数の調査では何もわからない。何で（交通手段）来たのか聞き取り調査をすることによって、街の賑わいの中身が初めて分析できるはず。

中心市街地の地権者たちが、本来の商業活動を断念して、駐車場経営に専念していることが停滞化の一因をなしていることをはっきりと認識すべきだ。これは、いわば寄生化である。この現状を行政は既成事実化し、有効な対応策を全く講じていない。（例えばビッグアイの「駐車場」は、地権者の利益のみに配慮して郡山駅前地区で最も高料金である。）地権者の利益と市街地の活性化（市民が利用しやすい低料金の「駐車場」の必要性）は相反する以上何らかの決断を市は迫られているはず。

さらに、中心市街地に客を呼び込むためには、自転車利用客の利便性をこそもっと重要視すべきだ。自転車の放置禁止に名を借りた実質的な駐輪禁止政策によっては、まちがっても自転車客は近づかない。現在の駐輪客は100メートル以上に離れたところであり、JRやバスの利用客には便利だとしても、買物客、遊戯客にもそれを利用しろというのは実質無理がある。駅前地区全域に駐輪できる施策によってのみ客が集まる。と同時に市は現行の路上自転車の即時撤去を反省し、きちんと予算を計上してシール貼りをすべき。

会津（喜多方市） 女性 60歳代

【意見】

車社会の今日では、郊外の大型店で買物する事は容易である。しかし、高齢者、主婦、子供にとってはかなり不便である。又、中心街の空洞化は、出かける魅力も失い、ますます活気のない街並になってしまう。今後望まれる事は、人々がちょっと街に出かけてみようかという気持ちを起こさせる事、空洞化された店舗に親子が遊べる様な場所をつくるとか。

品数の少ない店舗を共同スーパーの様な形態にするとか、とにかく市内に住んでいる人々がメインストリートに集中する魅力と活気ある街づくりのために工夫する事に協力と努力を惜しもうとしない心意気だと思います。

県南（矢吹町） 男性 40歳代

【意見】

まちづくりの本来の基本は、出来るだけ多くの方が良くなるためにあるのに、どうも自由主義の方が先行して、自分さえよければいいというその方向に片寄っているように思う。特に、大型店による中心市街地の空洞化は、めんどくさがり屋の消費者のそこを突いた

大型店の利己主義の両方が相乗的になっている結果だと思う。

もうこれからは、キッチリとしたシティーマネジメントの出来るものが総合的にマチの形をつかって、ガマンするものはし、長期的にバランスのとれた社会をつくらないと社会構造が根本からくずれてしまうことになってしまわないかと、大変心配である。

会津（会津若松市） 男性 50歳代

【意見】

全国的な問題の1つとして少子化が挙げられますが、地域の伝統や文化といったものが高速道路などインフラの整備によって風穴があき、その地域の文化等が維持できなくなっていると思う。それはひとえに、少子化や人口の流出によってそれらをささえる経済的なバックボーンが失われた為であると思う。今後、定住人口の増加が期待できない現在、地域連携による交流人口拡大策によつての経済効果での文化・伝統の維持が必要であり、それらを維持することこそが、又、交流人口の誘客に繋がり、活性化の糸口となるはず。

相双（原町市） 男性 60歳代

【意見】

都市計街路線引きなされているが、実現（着工）はいつになるのかまったくみえない。今後の「まちづくり」に対する行政の関わり方（やる気の有無）が大変重要と思う。速急に2～3店舗にしてセットバックし、店頭にお客様寄せをと考えているが良い方法があれば知りたい。現在当市役所の「まちづくり」については、駅再開発、既存のまち中心にあるデパート閉店計画発表等への対応に理解できないものあり。（駅前開発については、県関係者より大変なご協力をいただきありがとうございました。）

県南（棚倉町） 女性 70歳代

【意見】

激動の21世紀を迎えて、少子高齢化が一段と厳しくなり、諸問題がマスコミに流れ背筋の凍る思いです。子育てから児童の問題、障害者、高齢者、ねたきり老人介護保険の問題等多くの課題を抱えて生活しています。若者も子供も高齢者も安心して暮らしやすい地域づくりに平成5年から取り組んでいます。近隣の人達と支え合って、朝、夕の声かけ、見守り活動を展開しお互いに命を大事にして、相手の気持ちを尊重し、プライバシーの保護を守り共に生きる地域社会の実現に努力、小地域ネットワークを設立（H5）し、障害者連絡協議会、ボランティア連絡協議会設立現在は、ふれあいネットワーク 会と改会。活動を展開しよい成果をあげ、福祉講演会等を町内開催して良い成果をあげている。

大きな事務所等が統合され、遠距離となってしまったので高齢者はなげき住み良い町とはいえない

大型店の郊外進出の為、小さい店はのきなみシャッター通りで死活問題となっている

が、都市化が進み郊外の大型店に子連れでレジャーもかねて出掛けストレス解消している様子

と共生、夏休みでも子供達の声やボール投げている事が見ることができない親はしく、子供は冷房のきく部屋でテレビゲームに集中である。子供と一緒に汗を流す方法模索して町づくりにつなぐ。

県北（福島市） 女性 60歳代

【意見】

福島に移り住んで30数年になる。道路の整備などがすすみ一見住みやすくなったように見える。しかし、中心市街地の魅力はますます低下している。この街に住んでいる一人として、人間らしさを開花させることのできる街づくりを望む。それは、市の中心部にグローバルデザインによる「誰でも、いつでも、集える」文化ホールを中心とした街である。現在、福島市内には、老朽化した文化施設が旧市街地のはずれに位置している。集うには交通の便が悪く、設備も劣る。人間らしい楽しさを楽しむ場所、自己の可能性を見つけだすための芸術創造活動の拠点となるような場があることにより、より多くの人々が足を運び、交流が生まれる。そして、人が寄ることにより周辺の店舗への波及効果が出てくる。今こそ、まちなかに市民の声を生かした文化創造拠点施設の建設を望む。

県北（福島市） 男性 40歳代

【意見】

自転車の駐輪規制が来客減少の一因ではないでしょうか。

マイカーで来た人には有料駐車場のチケットを渡しているのに、バス利用者への対応がない。購入額に応じてタクシー券やバスの割引チケットを出してはどうか。そうすればタクシーやバスの乗客も増えるはず。

こういったアンケートは、いろんな所でいろんな年代の人に「中心市街地にいかない理由」を聞く必要があるのではないのでしょうか。

いわき（いわき市） 男性 50歳代

【意見】

私は、約1年半以上かけて、いわき中心市街地まちづくり委員として、会議、ワーキング、その他各地区での行事にも参加してまいりました。結果、下記の点について「いわき市」の場合は必要であると考えられました。

NPO支援のNPOを「いわきTMO」の中で早急に立ち上げること。

このNPOが行政との調整役割といわきボランティア団体の社会的レベルの向上のために、支援・指導機関となり、市民との間では、直接意見、情報収集の窓口になり、自ら利益事業の構築に努力することで支援本部の運営経費をまかなうことです。

行政で行う縦割りの文化、歴史、芸術、教育、その他の企画・イベント・講演などの市民代表のリーダー同士の「まちづくり対話会」を企画・運営を市民レベルでつねに開催し続けることです。そのスタッフ・メンバーには「若者、女性、高齢者、外者、そしてその町が好きで好きでしかたがない人」で構成することです。今までの、その町での有名人とか学識経験者とか商店会とか商工会議所、その他業界の役員などは必要ないと思います。

公益・公共施設のあり方については、その施設の管理・運営については市民NPOを設立し、まかせて、参加意識の向上を育成することです。

いわき市の活性化の大切な事は「ハード」に重点を置くと同時に運営面での「リフト」の研究と1つ1つの成功例の積み重ねが大切です。そのためにも、ITをプロバイダーにまかせず、「まちづくりNPO」自身が常に書き換えて市民へ送り続けることです。

今後のまちづくりは、今まで以上に「キメコマヤカ」なサービス精神です。

会津（伊南村） 男性 20歳代

【意見】

1995年10月26日、県立会津高等学校に於ける養老孟司先生の講演より。「社会が進歩するにしたがって、人の作ったものこそが実在であると考えられる傾向が強くなる。しかし、世界にはもう一つの実在があり、それを自然と呼んでいます。せっかく会津に住んでおられるなら、人間が作らなかったものに対する感覚を諸君に持ってもらえれば、私は非常にうれしい。」

県北（福島市） 女性 60歳代

【意見】

私は福島市が大好きです。自然に恵まれ、よく訪ねればたくさんの歴史の産物もあり、豊富な食物（果物、野菜など）も豊かにとれて、ほんとうによい「まち」です。でも、このごろだんだん様子がおかしくなり、好きと言えない所が増えてきました。街を歩けばからっぽのビルが多くなり、行き交う人の数も少なくなりました。個人の商店（八百屋さん、魚屋さんなど）が急速になくなって、それに代わるコンビニやファーストフードのお店がびっちり。食材を買って自宅で作り食卓を囲むという風景がそこから見えてきません。すべての文化の原点である食文化がおろそかになるということは、そのまちの文化度の低さになります。

さて、郊外にたくさんの店ができて増えてきた老人はどうやって買いに行けばいいのでしょうか。老人や身障者にとって暮らしやすい街とは、やっぱりたくさんの種類のお店が立ち並ぶ目抜き通りが中心地にある、そんな「まち」だと思うのですが？

いわき（いわき市） 男性 50歳代

【意見】

良い街づくりとは、弱者が住みやすく（高齢者、障害者、子供が安心して）若者が希望を抱ける都市構造。

これまでの街づくりの視点は経済成長優先に開発が進められ、必要に迫られ未来展望を欠いたまま都市開発がされ、そこには人の心を癒す場がないまま今日に至ってしまった。

しかし今、ふと我に帰った時、人は一番大切な視点を欠いた事に気づき、しかし時既に遅し、真の街づくりは、いかに生活者の視点で街構造が考えられるか、例えば「いわき」の場合、地域エゴと商業エゴの表れが、街の空洞化を生んだのではないか、生活者の利便性を考えたとき、いつしか弱者は場外におかれ、街は空洞化。人の心の読みと、未来への展望、本当に地域に住む人が何を求めているか、一時のしのぎではなく、子孫代々まで愛される街とは、思い切った生活者（弱者）の視点に立った利便性のある街改革が必要である。

県北（保原町） 女性 30歳代

【意見】

私は、保原町に住む主婦です。子供の頃から保原町に住み、この町が大好きです。ただ1つ子供のころから思っていることがあります。それは小学校の学区です。住所の地名によっては、大田小学校や上保原小学校の方が近い住所地があります。徒歩で10分位でいける学校があるにもかかわらず、徒歩で1時間かけて保原小学校に通わなくてはなりません。そのような状況で地区の住民は何度も教育委員会に相談されたとか。一部自由学区もあり、そこは過去に交通事故があったからということ。これでは、暮らしやすい「まち」とは言えないと思いませんか。私は、今の町内が好きです。近所の方とおつきあいもうまくいっていて、学区のために引っ越しはできないですね。今の住まいだと、子供が小学校に通うのに徒歩で1時間近くはかかります。昔からのしがらみにとらわれないで、学区の変更か自由学区に変更してほしいです。

いわき（いわき市） 男性 60歳代

【意見】

まちづくり3法というが、実態はバラバラではないのか。まちづくり、特に中心市街地活性化に向けての機能面配置について、3法を結びつける手法があるのか。大型店の郊外立地規制と中心市街地への商業機能誘導を地方自治体レベルで有効に作用させる仕組みはどうやればとれるのか。

会津（会津若松市） 女性 60歳代

【意見】

自然：会津若松市街地から周囲を見渡すと、その稜線の美しさにみとれます。これは、四季を通して感じていますし、先人がここで歴史をつくってくれたことをありがたく思います。

歴史：歴史があるというのはどこでも言われていることですが、歴史の節目に「会津」がある事実を大切にしたい。

上記二つはここにしかない“自然と歴史”であり、そこで生活している私たちが居心地のいい場所を創っていくことが大切です。労働に従事している女性も多いのですが、個人としての労働ではなく、特に中小企業においては夫の手伝いの立場では女性の真の力は発揮できないと感じます。会津が好きで好きでUターンしてきたのですから、“私が居心地がいい街”創りに声をあげていきたい。

県中（三春町） 男性 60歳代

【意見】

中心市街地は歩いて買い物ができる場所であっても駐車スペースがどうしても活性化の必要要件になる。インフラとして無料で使える駐車場が必要。

相双（富岡町） 男性 50歳代

【意見】

平成2年に「富岡町ゲンジボタル研究会」という名称で有志により主にゲンジボタルの養殖に主眼を置いて活動しましたが、環境とのかかわりが大きなウエイトを占めていることに気づき、環境浄化の必要性とあわせての活動に変化し、また、「ゲンジボタル」のみでなく、「ヘイケボタル」を含めた“ホタルの翔べる環境づくり”を訴えながらの活動をしています。特に、当町においてはホタルの養殖環境である農村部での農業集落排水の整備もなされており、こうした地域でのホタルの養殖事例等を発言できればと思っております。

いわき（いわき市） 男性 70歳代

【意見】

「まちづくり」の観点から中心市街地、郊外大型店、公益・公共施設等について県民・市民の立場から考えるに当っては、まず先にそれらを含めた当該地域での構想を具体的に討議し合って、総合的に基本認識を持ち合い、その上で、各テーマ等について夫々討議し合った計画等を総合的に協議し合っていくような協議計画が必要と考える。

例として現在いわき市で進めている中心街区の街づくりでは各委員会の委員が自由な発想で出した計画を基に多少の肉付けをして委員会案として出されているが、どう云う「中心街区」を目指すのかと云うような討議・協議は成されていないから、各委員会からの計

画が集まった時に造って行かれる「中心街区」の立場から見れば、バラバラとも云える計画をどう調整する事が出来るのか。県民・市民の立場から街づくりに参加していくに必要な基本的な勉強の必要を感じます。

いわき（いわき市） 女性 40歳代

【意見】

中心市街地の活性化に不可欠なことは、魅力ある営業と人が集い憩える街並みであると思う。

足が遠のく原因として、空き店舗が街の景観を悪化させていること。公共交通は本数が少なく、接続もよくないため時間的ロスが大きく利用しにくいこと。街の中の駐車場や空地が無味乾燥であり、夏場は温度を上昇させることにもつながっていることなどが考えられる。

これらを解決するための方策として、空き店舗の再利用、公共交通としては大型バスなどではなく、少人数で利用できる車輛を導入し、本数を増やしていただけるとありがたい。また、駐車場には屋根をつけ屋根の上を緑化するか、大きな木を植えるなど、緑を増やすことなどを提案したい。

会津（猪苗代町） 女性 40歳代

【意見】

最近、Uターン、Iターンという言葉がきかれるように、地方が見直されて来ています。しかし、自然環境がすばらしくても生活基盤を考えるとむずかしい点多すぎます。

あらゆる世代の住人にとって、利用しやすく、楽しめる公共施設（スポーツ、入浴など）や自然を利用した宿泊施設などの充実は、観光客にとっても魅力的なものになるのではないのでしょうか？

生活環境を整えることが、地域の活性化につながると思うのです。

県北（福島市） 女性 30歳代

【意見】

「まち」に人が集まらない理由のひとつに移動手段がないということも考えられるのではないかと思う。車を運転できる人ばかりではないのだから大きな駐車場を一つつくるよりもバス停や駐輪場をあちこちにつくってほしい。

乳児を持つ母親としては、ベビーカーが歩きにくい歩道（段差）、入りにくい店のドアやせまい通路（店内）、食料や日用品が1ヶ所で揃わないなどの理由で、つい郊外の大型店に行ってしまう。

個人商店で買い物をして、スーパーなどでは味わえないふれあいやサービスに感激したこともあるので、そういうお店は大切にしたい。

いわき（いわき市） 男性 70歳代

【意見】

中心市街地に対する私見

モータリゼーション・郊外への大型店の進出と大規模宅地開発等が中心市街地の空洞化を招いている。これらの流れは変えられないが、この事態を踏まえて何が必要か。

- 1 , 魅力ある店作り・・・単に価格競争だけにこだわらず、各商店が魅力的商品・個性的店舗・独自のサービス（接客）等を作り上げる必要がある。
- 2 , 商店経営者の教育システム作り・・・商店主は未だに「昔を今に」と願っているが昔は来ない。自ら時代のニーズに合った店作りの研究と意欲が必要である。自治体はそれらを手助けするための積極的教育システム作りが必要。他力による人集め施設のみに固執している古い経営者体質が強い。（考え方の改革が必要）
- 3 , 公益・公共施設は街に・・・広さと価格から郊外が確保し易いが、出来るだけ街に作り、人の往来を誘う。
- 4 , 街の住人を増やす・・・個人のマンション・アパート等の建設計画を支援する。
- 5 , 郊外の大規模宅地開発の制限・・・（難問であるが）数年前まで散歩の時、ホトトギスやカッコウの声で夏を実感していたが、今年は聞けなかった。自然破壊は進んでいる。高齢化は街への居住化に変化する。（便利さ、歩いて買い物、福祉医療施設の活用）・・・大型開発は不良債権の温床 国民生活を圧迫。

県北（福島市） 女性 60歳代

【意見】

先日、東京でポンペイ展をみて来ました。2000年前の街は、自然の恵みを受けながら、公共広場劇場、各家の水道設備、暖房施設、様々な壁画、細工物など文化の高さを見せつけられました。沢山の人の集まる公共広場、劇場中心になっていました。

街の要となるのは、市役所、銀行、駅ではなく、市民がより楽しみを分かち合う場所、創造する場所、鑑賞しあう場所、たたえあう場所だと思います。私は、現在福島演劇鑑賞会の会長を引き受けておりますが、演劇鑑賞会は、会員制をとりながら、年間7本（3ステージ）の演劇を主に福島公会堂をよりどころにしながら、41年という長い歴史をきざんで参りました。現在3000余名という会員、そして、沢山の市民の応援があったからこそです。毎回3000名の人たちが年回7回、定期的に街につどいます。公会堂も相当古くなりました。もっと素敵な芸術創造の場となるような公会堂になれば、もっと会員がふえ、街のにぎわいに大いに貢献できるのではないのでしょうか。

いわき（いわき市） 男性 30歳代

【意見】

わがまちの危機に焦りと不安を募らせています。しかしながら、地域には焦燥感が感じら

れない。そのGapにさらなる焦りを感じる毎日です。

今、我々に必要なのはVisionと戦略、そして迅速な行動です。

一刻も早く地域住民のコンセンサスを得たVisionと戦略を造り上げなければならぬと考えます。

会津（会津若松市） 男性 40歳代

【意見】

比較的道路を広くとり、何ヶ所かに緑あふれる公園を配置し、市民・町民がだれでもくつろげる街づくり。

駅前を中心とした商店街も統一感を持ち、空き店舗はなるべくつくらない様、行政側でも協力をする。

町の中に空カン、ゴミがなくなる様、数多くのゴミ箱を設置し、ゴミを捨てた人には罰金を課す。

とにかくきれいな街づくりをお願いしたい。

会津（喜多方市） 女性 70歳代

【意見】

喜多方市では、「きらめく個性と豊かな自然が共生する快適生活都市を第4次総で提唱していますが、具体化はむずかしいと思われま。その理由として、

プランの説明がリーダー格の市民に伝わってこないこと

執行する人達が、地域づくりの活動をしている団体に加入してないこと

私達喜多方婦人会連合会は平成5年度に文部省の女性の社会参加（当時は参画ではなく）推進事業の委託を受け、[人・花・水のハーモニー運動]を継続していますが、点から細い線になっただけで面にはならないのが残念です。

相双（原町市） 女性 40歳代

【意見】

最近、「まちづくり」という言葉に消化不良をおこしております。市民が「まち」に興味や危機感がないのは、「まちづくり」という漠然とした言葉が、心にひびかないのでは？と考えております。私は、「まちの再生」などという、もっと緊張感のある言葉を使って「まち」を考え関わって行きたいと思っております。

いわき（いわき市） 男性 70歳代

【意見】

いわき駅前にバスステーションをつくったり、中央通りの拡張を図るなど駅前の再開発を積極的に推進することや、平本町1丁目～3丁目の一方通行や蛇行道路の是正を図ると

もに、電線の地下ケーブル化に伴う制御ボックスの乱立が美観を損ねているのもっと集約化を図ることなどなど。

いわき（いわき市） 男性 50歳代

【意見】

2040年には、少子高齢現象により、7,000万人～8,000万人に人口が推移すると予測されている。1947年、6,000万人であった事を考えると50年で倍に増えた人口が、50年で半分に減ると言うデフレが規制を強行に行わない限り進こと必至である。このような時間の推移の中で、個人、企業、公共の所有する資産が、公示価格、路線価、担保評価のアンバランスが極限に進み、矛盾と相伴し、不安と混迷を招くと思われる。この期、100年～300年という時間のなか欧州で経験した高齢化と少子化を学び、「知恵」を働かせるべきではないのか。アメリカ型社会が日本に土着したようにみられるが、余りにも近未来を見渡して、構築しなかったインフラ整備、都市の在り方、特に収斂を目的とした町づくりを見習う必要があると思う。

県南（白河市） 女性 70歳代

【意見】

1. 都会育ちの私は、城下町白河が大好きです。封建的とは言いますが、自分から求めていけば住んでいる皆さんは優しくとても親切です。
2. 映画館が無くなってしまった街になった時は、とてもショックでした。また、文化的、芸術的な催し物がなく、須賀川や棚倉よりもレベルが低くなってしまいました。
3. 最近、十字屋さんが無くなり、天神町角のセブンイレブンが閉店してしまって不便を感じています。大型店が郊外にできて、車で行かれる方は良いですが、私のような年齢の者は、日常生活用品を買うのも好みの物を選ぶことができなく、間に合えばよしとするしかありません。不満を感じながら買い求めています。
4. 市役所からバスが出ているようですが、1回も見たことがありません。

相双（楢葉町） 男性 40歳代

【意見】

少子高齢社会は、車や道路の普及だけでは、補いきれない一面を持っています。公益、公共施設は、公共交通機関、特に福島においては、鉄道との関係、具体的には、駅前地区への立地を考慮して欲しい。大型店の郊外への進出は、車を持つ者にとっては良いが、高齢者の増加を考えると人・物・情報は、駅前ほど交流しやすい所はない、見直す時期だと思う。

県南（棚倉町） 男性 50歳代

【意見】

本会（町並み研究会）は、6年前に結成した団体です。今年度の事業計画のひとつに各県並びに県内の町づくりの会の代表者と町づくりサミットを開催する予定であります。今まで研究してきた結果を3Dグラフィックにして見ていただきたいと思います。

その関係からも懇談会に出席し、種々の活動・ご意見などを拝聴したいと思います。

県北（福島市） 女性 50歳代

【意見】

私は以前から中心市街地がさびれていくことに胸を痛めておりました。昨年2月、福島市にあるパセオ通りの岡崎陶器店の社長夫妻と出会い、空洞化現象に歯止めをかけるために自分達にできることをやってみようということで意気投合しました。

コンセプトとして「季節感・温もり・文化の香り」を掲げ、店頭には季節の花を飾り、温かみのある文章を掲示するとともに、売場の一部をミニギャラリーとして提供してもらいました。ギャラリーは、市民の皆様の発表の場として無料で開放しています。おかげさまで、いずれも全て好評で「パセオ通りがみんなこのようだったら、人もたくさん来るのに」という声が多く寄せられています。

今年の5月からは、毎週火曜日に木陰のベンチに緋毛せんを敷き、無料でお抹茶とお菓子を提供しています。（花やお茶・お菓子などの実費は岡崎陶器が負担し、植栽、お茶出しなどは5人のボランティアが協力しています。）

岡崎さんは、店に人が入らないのは、道路や行政のせいにはしていたが、店の努力次第で、人を呼べることがわかったと喜んでいました。

しかしながら、これは、ほんの一例で、商店街の努力だけで、問題を解決できるとは思いません。

中心市街地に劇場などの魅力的な文化施設があれば、老若男女が足を運び、その後で食事をしたり、買い物をしたりして街が賑わいを取り戻すのではないかと思います。

行政の力添えと思わず覗いてみたくなるような店づくりの努力を怠らない商店街があって、初めて市街地が活性化するのではないかと思います。

そのために、協力できることがあれば、微力ながらお手伝いしたいと思っています。

県北（福島市） 男性 50歳代

【意見】

高度経済成長期以後のまちづくりは、施設整備など「点的」整備、ハード優先の傾向にあった。

しかし、施設等の点と点とを結ぶ、移動の自由性を保証する理念やしきみづくりが欠落していた。

移動手段の大半を自動車に頼ってきたため、中心街の空洞化や郊外店の進出を助長してきた。ドア・ツー・ドアの車は、人間社会に飛躍的な恩恵をもたらしてきたが、便利な乗り物には、必ず反動がある。交通事故の増大をはじめ、地球温暖化などの環境破壊に代表される。

少子高齢化社会の今日、誰しものが自由に車を使わないで、自由に移動できるシステムづくりが希求されている。そのことによって、交流人口を活性化させ、ひいては、まちの活性化につながると考える。

相双（原町市） 男性 50歳代

【意見】

人にやさしい、まちづくりをしてみたい。

いわき（いわき市） 男性 50歳代

【意見】

- 1 中心市街の交通問題
自家用車とバスとの問題、駐車場を考える事
- 2 県道に於ける植栽（立木）の選定を考える事
土地の合わない植栽が多いのではないか

いわき（いわき市） 男性 60歳代

【意見】

街造り、中心市街地の活性化等の対策として、イベントや開発投資の話がよく出されますが、要は人が多く集まって（集まる必要が必然とあって）そこで結果的に消費活動が行われることが再開発、活性化の目的でしょう、しかし超高齢化時代を迎えようとしている現在（65歳以上が人口の1/4を占め、老人に2人の核家族が世帯の1/3を占める住宅団地等）は郊外と市街地の交通アクセスを今後いかにするかの視点ををはずしては考えられないと思います。75歳を過ぎ運転免許を返上、運転をしてくれる息子や娘も近隣にいない家庭が今後大幅に増加し、中心市街地の活性化とは無関係の世界を構成するからです。現在の車社会は老人、弱者切り捨て社会となるでしょう。ぜひ、公共交通問題を“町造り”の中心話題として下さい。

県南（白河市） 女性 20歳代

【意見】

私の所属している（働いている）団体は、「NPO法人カルチャーネットワーク」です。私達が目指しているのは、「心の豊かさが感じられる街」、これは施設が整備されているだけでなく、人と人との交流が出来る機会の多い街だと考えます。

団体、企業、個人の活動が活発になるため情報発信基地をつくり、ネットワーク化していくために立ち上げ、現在活動しています。

会津（会津若松市） 女性 40歳代

【意見】

「田舎」で何がいけないの？

目の前に田畑と国道49号線、バックに田畑と会津大、磐梯山、そこが私の住んでいるところです。生まれも育ちも会津若松市、生粋の会津人を自負しています。

最近会津若松市は、「大正ロマン」とか「野口英世青春通り」とかで、町の中心地を整備している努力がうかがわれますが、どれもこれも中途半端、大テーマを持ったプロジェクトが行われてないように感じます。それもすべて観光客用に整備しているようにしか見えません。観光客も大切な事ですが、住んでいる市民は何を望んでいるのでしょうか。その町に住みたくもない居心地の悪い町では、町のことは愛せません。

私は、会津若松市は、田がある、畑がある、緑がある、水がきれい、それでいいと思っています。余計な大型店や、ビルの類は必要ないと思っています。ハイセンスにならなくて良いと思っています。つまり、心のふるさととも言うべき「田舎」でいいと思っています。

いわき（いわき市） 女性

【意見】

1ヶ月に1日で結構ですからバスや電車を利用して通勤してください。

我が子の通学風景を見ることができず、学生達も大勢の大人に見られている意識から、非行は減ると思います。

帰りの電車やバス待ちの間にウィンドーショッピングや専門店（等）での買い物等が出来ます。（中心市街地の空洞化対策）

公共交通機関を利用することで排出ガスを減らすことができます。（環境汚染防止）
皆さん、行政に頼るばかりではなく自分からまず黄道してみませんか？ご自分の都合の良い日に実行してみてください。このほかにも沢山楽しいことや素敵な発見がありますよ！

県北（福島市） 男性 50歳代

【意見】

これからの「まち」を考える場合、「ハコ」もの「道路」と云ったハード面の対策だけでなく、歴史、伝統、文化や地域資源の掘り起こし等を重視した内発的発展をはかる対策が課題となる。

このためには、文化が持つ、自由で創造的な知的生産活動に注目し、まちづくりの創造的活動につなげる「創造都市」建設を提案したい。

したがって、市民が自由に芸術文化活動を推進できる拠点として「公益施設」を中心市街地に設けると共に、市民参加型として推進するため、NPOをまちづくりに位置づけ推進し、まちに賑わいと活力を取り戻すべきだと考える。

県北（本宮町） 男性 50歳代

【意見】

1. TMOを成功させるには、TMOの特定地域だけを考えるのではなく、その周囲（他の大字地区、近隣町村）をも、活性化しようとする意識がなければ、組織は出来ても人を動かす手段にはならないと思うのです。TMO地区以外の人々の反応を見れば良くわかります。
2. 地域おこしの住民の参加についてもう一度考えてみたい。年齢、性別、生活条件、趣味、意識の違う人々をいかに動かし参画してもらえるか！
3. 地域活性の歳代の要素は、地域内の農商工業の活性にあると考え、きれいごとだけではなく、その部分について考えてみたい。
4. ボランティア活動、困っている人にもっと手を・・・壁に落書きをしないような、している人を止められるような地域のムードが創れたら・・・。

会津（会津若松市） 女性 60歳代

【意見】

観光都市会津若松市として、観光客によいイメージをあたえるような町づくりに力をいれなければならないと考えています。

神奈川県からの観光客が、観光都市としては言い難いイメージを実感したとの新聞の投稿を読み、考えさせられました。次の三点が指摘されてまいりました。

会津駅前のバス乗り場の設備の悪さ（老人や障害者も考えて）

鶴ヶ城南口の簡易トイレの悪臭ときたなさ（利用できなかった）

お城の石垣の修理に2年以上もかかっているの、素早い対応が必要とのことでした。

1つ1つ改善して、美しいまちづくりにしたいと思います。

県北（福島市） 女性 50歳代

【意見】

わたしたちは、障害を持つ人達を支援するボランティア活動を行っています。その中で、トマライゼーションの考え方に基づいて、どんな人でも安心して住めるまちづくりを目指しています。

社会生活で社会的支援を必要とするのは、「障害者」だけではありません。「子ども」、「老人」、「妊婦」や「病人」も同様です。個人や家族内部で解決できる部分については、社会的支援を求めないわけですが、現代の家族の大半は、核家族化しており、家族内部で

家族のライフサイクルを完結させることができなくなっています。そして、この欠落する部分を地域社会が担っていかざるを得ない状態となっていていかざるを得ない状態となっているのです。このための福祉システムが求められているのです。

今、福祉を基本とした新たな地域社会の形成が求められ、その結果としての「まち」の再生が進められていかなければならないのではないのでしょうか。

いわき（いわき市） 女性 40歳代

【意見】

5年先、10年先、20年先のグランドデザインをしっかりと作ることが大切。

日々の生活感を伴う市民の意見（転入者、若年層を含む）と行政の意見の協働作業を通じて一方通行にならずに現実に即した計画実行（そのための手法も大切）とその後のあり方の検討もなおざりにしないこと。

今の高齢者と今の若者が「くらし易い」と感じる事ができるまちづくりが望ましい。

県中（三春町） 女性 60歳代

【意見】

高齢者支援も私が行く道ですので大切ですが、現在社会状況を考えた時、子育て支援が第一なのではないのでしょうか。子育てに疲れたお母さんの相談相手になってあげられる保健婦さんは、TELでの対話ではなく、直接逢って話をうかがえる行政であって欲しい。

子育てをしている人の声を聞き、それに反映出来る町づくり、夜の当番医院の対応、0歳児から扱ってくれる保育所の増設、お母さん方が気軽に集える施設を空洞化している町に考えて欲しい。

また、農村部でも学校から帰っても待つ人がいない家庭の子供の対応、婦人会JA婦人部でのボランティアの協力とし、利用してない施設の活用を考えて欲しい。

三春町は、公共施設が庁内建設されているが、駐車場が少ない。自動車社会を考慮し、心身ともに多性社会ゆえに駐車場の重大さを知って欲しい。（以下、FAX不鮮明につき省略）

相双（鹿島町） 女性 60歳代

【意見】

「住みよい町づくり」は、年代によっても大部違ってくると思われる。

私の場合は、70才に近い年齢であるので、高齢化に向かって老人にやさしい町づくり、子育てにやさしい町、安心して生活できる街をハード面、ソフト面から切望する。

しかし、行政に要望をしても首長の考えが違っていけば、実現は難しいので、私たちの身近なこと、できることから相互に理解協調できるグループで小さなことでも良いから取り組んでいく姿勢は必要である。

その場合、何をどのように推進すればよいのかである。気の合った者同士が、意気投合し、実践に踏み切るときに予算ゼロからはスタートできない。私たちは、「県地域サポート事業」の補助を受けることで事業（エコライフ鹿島地域づくり）に取り組んでいる。この事業も補助内容によって規制があり苦勞をしたが、もっともっとやる気のある団体には規制の緩和が欲しい。お祭り騒ぎの行事だけが町の活性化ではないと思うし、住んで良かったという町づくりは町民ひとりひとりの参加が大切だと思う。

県中（鏡石町） 男性 50歳代

【意見】

中心市街地空洞化対策・・・個々の商店が頑張っても微力。

- ・ ならば、車をシャットアウトして、通りを歩行者天国として広く市民に利用してもらう。
- ・ 空き店舗を無料で貸し、創業意欲のある人、あるいはNPO、ボランティアグループ、一般市民に活用してもらう。
- ・ 郊外大型店と対抗するのではなく、役割を分ける。（例：徹底して昔にこだわる。高齢世代の郷愁を誘う町並み雰囲気、近代化の流れに逆らう。カルチャースクール（熟年寺子屋 講師、熟生共に熟年）等）

会津（会津若松市） 女性 60歳代

【意見】

市民が集まりやすい中心街のまちづくりは、やっぱり市民が使いやすい**公共の施設**が必要です。昼夜を問わず利用できるよう希望します。

まちなかに、幼児、児童のための**遊園地**が欲しいです。老人も喜ぶようなベンチがあったりして、ともかく市民の憩いの場があるといいと思います。

空店舗の活用は、徐々に進んでいるようです。**リサイクルショップ**が中町に並び賑わっています。若いお母さん達が活用して繁盛しています。それで、是非老人向けの便利な衣服（構成したもの）とか日用雑貨など売る店があるといいと思います。又、気軽にリフォームを頼んだりできると便利で市民もゆききすと思います。

“若松のまちの駅**サテライト・馬場町**”は、まちなか観光拠点として6月30日オープンしましたが、PR不足らしい。思いきって、喫茶・軽食のできるレストラン風にしては？

県南（埴町） 男性 60歳代

【意見】

2年前までは、埴町中心街の中の一商店街として、盆・正月に売出しをイベントとして、10数年実施してきました。しかし、商店街の道路の道幅が、約6m、歩道1.2mと狭いた

めに、駐車も出来ず、客はますます大型店への流出、商工会、県中小企業団体中央会の指導を受け、将来を展望し、平成6年に「埴町中心商店街活性化事業推進委員会」を発足、各商店は、平成10年1月に推進委員会より説明を受けて、平成10年10月に組合設立発起人会を開催、18店より賛同を得て、平成11年8月6日に「はなわよんく協同組合」設立総会となる。経済の低迷が続き、各商店は、売上減少の連続で、協同組合で計画を立てても現在は、自分を守ることがやっとで、組合活動が停滞し、困っている現状で参考意見等を教えてください。

県北（月舘町） 男性 50歳代

【意見】

中心市街地の空洞化、大型店の郊外立地、少子高齢社会への対応、核家族化、東京一極集中による地方の人口減少、関東近県の急激な人口増加（西日本地域の人口減少）、公共施設の大規模集客施設、農産漁村地域の荒廃等まちづくりの絶対的解決策はない。

どうしたら、まちづくり活性化推進になるのか、参加者と一緒になって、自分の町の「まちづくり」として考えてみたい。

相双（大熊町） 女性 40歳代

【意見】

私は、町づくり推進委員会のメンバーです。この町で生まれ育って、再びここに戻ってきてから11年が過ぎました。友人が委員会のメンバーで、いろいろ話してくれて、この会があることを知ったのですが、真剣に町づくりを考えているその姿に感激したものです。そして、この様な会を作った町の姿勢にも改めて感心しました。その後、機会があってこの会のメンバーになったのですが、今、会は閉塞気味です。あまりにも漠然としていて、何をしたらよいか分からないというのが本音でしょうか。それでも町を愛するメンバーは、めげることなく、様々なアイデアを出し合って討議しています。具体的には、ある程度、整備された公園やスポーツ施設を使って何かできないか、夏祭りや地区の伝統行事を町民全体が楽しむものにできないか etc。

町づくりは、仲間づくりだと思います。経済的な豊かさもある程度は必要ですが、それよりも人と人とのふれあいを大切にすることが私の理想です。

県北（霊山町） 男性 30歳代

【意見】

まちづくりは今、行政主導で進められているのが現状です。せっかく良い施設を作っても利用される頻度が少ないものも多く見られます。今後、まちづくりを進めていく上で、市民や企業が行政とともに今までより一層、連携を強化していく社会のシステムが必要ではないかと考えています。

会津（喜多方市） 女性 70歳代

【意見】

当市の青年会議所では、前年度より広く市民に呼びかけ月1回「まちづくり・オープンスペース」でトーク等を開催しているが市民の参加が少ない。この会議は、今、主に市民ボランティア活動を主にすすめています。若い人と話していることは楽しいし、私も喜多方市ボランティア連絡協議会の会長として少し活動をしていることから、今後、目的達成に力を添えていきたい。

少子高齢化が急激に進行する中でボランティア活動の枠を広げるとともに、多岐にわたる課題と取り組みができるように全てに共生が必要と思われる。特に、若い人達に「まちづくり」に期待が必要、また、理解も大切と思っている。これからの人的資源は、増え続ける高齢者と言われております。地域活動にまちづくりにもっと参加できるように考えていきたい。

会津（喜多方市） 女性 50歳代

【意見】

- ・ 当市の玄関である駅、駅前広場の整備が必要。駅の中を美的にし、文化ゾーンを併設したい。駅前広場には、緑と水を主にした公園をつくり、市民や観光客も共に安らげる場にしたい。
- ・ 空洞化している中央通りには、水の流れる川を整備し、車は一方通行にし、高齢者でも歩いて安心してショッピングを楽しめるように専門店の充実を図り、銀行、郵便局等も同郷させる。
- ・ 郊外には、スポーツのできる場をつくり、大型店、大きな公園等も作る。
- ・ 当市の歴史や文化をメインにした地域づくり。
- ・ すべてのプランニングは、男女共同参画で進めていくこと。

いわき（いわき市） 女性 60歳代

【意見】

意見：いわき市に関して申しますと中心市街地開発を「提言」してから数十年過ぎているが、「形」として見えてこない。住民も町は、淋しくなったねと言いながらも我れ「間接」です。いずれもどこに「原因」があるのか「究明」し、「机上論」にならないようにしたい。（各所に意見、要望「箱」を置いては？）

要望：県全体に関することですが、自然保護の上でも「自転車専用道路」を整備し、作って欲しい。いわき市においては、1日も早く、駅前を中心とする人が一番集合する場所に「多目的施設」を建設して欲しい。住民もそれを望んでいる人がたくさん居ます。現代人は、そこで、時間を過ごし、良い物があれば買う「過ごす所」を求めている人が多いと思います。

いわき（いわき市） 男性 70歳代

【意見】

これからの商店街には、年齢的に分類した独立的専門店が必要と思います。現在の商店街は、昔ながらの商品陳列が多く現代人の意識に反していると思います。街には、それを造りあげた長い歴史と文化があると思います。一朝一夕には変わらないかもしれないが、これを改革することが街の再生に通じる。街には、個性的な商店街少ない。商店は、個性を自分自身が見いだして育てなければならない。学者や文化人の都市再生の講演も必要と思いますが、各店主の意識改革が問題だと思ふ感性だけでは、街は自然に消滅すると。

県中（郡山市） 女性 60歳代

【意見】

郡山市社会福祉協議会、ボランティア室の遊佐さんから再々のご連絡をいただきペンを取りました。私たちのCSしゃくなげはNHK学園高等科福祉コースを修了した人のボランティア、情報交換・交流を主な目的として出来たサークルです。

福島県各地の修了生を会員として平成2年に立ち上げたグループで地域それぞれの中で徐々に活動しています。北海道から沖縄まで全国組織になっています。

私が日頃各地の街を歩く機会があつて思うのは、日中、バスに乗っているのは老人が多く、街の商店は若者中心の商店にあふれている。老人を片隅に追いやっているか野菜や魚類の売り方等にも老人の不満が多々あると己も含め考えます。

会津（下郷町） 女性 40歳代

【意見】

南会津は97%が山林で占めています。水が清く冷たいのが自慢です。しかし、生活雑排水が川に流れ込んで臭いがしたり、魚が少なくなってきました。上流の町こそ下水道の整備又は集落ごとの浄化槽の整備が必要だと感じています。また、10年、20年先のことを考えて、この町はどんな町にしたいかを決めて行政はそれに沿った町づくりをすべきだと考えます。例えば、役場庁舎の付近は、どんな建物を集めるべきか、中学校の付近には町営の体育館とかコミュニティセンターなどを集めて、何か大きな大会を催せるようにして町の活性化をはかることが大切だと感じています。

しかし、新しい建物だけを創るのではなく、今ある施設を活用することも最も大切だと思います。

住民と行政が一体となった町づくりが今最も望ましいことだと感じます。

会津（下郷町） 男性 40歳代

【意見】

中央では道路財源が見直されていますが、当南会津に於いてはまだまだ道路整備が必要だと思えます。積雪が2メートルも超える豪雪地域もあり、冬期間は生活に支障を招くことが大であります。除雪体制はできていても、いざという時にはやはり生活道の整備が大切だと実感しています。また、土地柄、男尊女卑の傾向が強いですがこれからはそれぞれの立場から女性の意見等を多に活用し行政・地域住民が一緒になり、過疎化、高齢化社会をどのようにするか話し合い、より良い町づくりに努めることが大切だと思いたしません。

県中（三春町） 女性 40歳代

【意見】

我が町も日々変わりつつありますが、本当にこれで良いのか疑問に思う。

中心市街地活性化事業で道路を拡張、歩道も人にやさしいとやらで拡張、そのために何か大事なものが失われていくような気がします。

公共施設も次から次、表情変えて建てられていきます。すべての方が満足するとは限りませんが、選択することも必要ではないかと思えます。

原点は「町民の意見がどれだけ重要視」するかどうかです。

この頃、特に明るい話題もなく拡張された道路を騒音とともに走り去る車だけが増え首を傾げてしまいます。

県北（飯野町） 女性 50歳代

【意見】

若い人達がレジャーを兼ねて町外の買い物へ行くのは止められませんので、町を利用しているお客様を大事にしようと、お母さん達が集合したのが「かみさんサミット」です。

ソフト面は、まかせてと、出来ることから実行して3年になりますが、お客様と商店のかみさんが近くになったと最近は実感しております。

会津（喜多方市） 女性 40歳代

【意見】

相手（近所、訪問された方）の立場に立った客観的な町、かつ、主観（自分らしさ）を忘れない町。

県北（川俣町） 女性 70歳代

【意見】

1.昭和52年結成以来「明るく地域づくり」を目的として時代の地域課題を取り入れ、「女

性セミナー」と、「女性大会」のテーマをドッキングさせ学習と実践を通して女性の声、女性のアイデアを発信し地域課題に取り組みながら実績を上げてきました。

今年は第25回川俣町女性大会の節目の年となりますので、女性大会内容を川俣町中央公民館ホールに議場を設営、「模擬議会」開催します。12年3月に策定された「川俣町ゆうゆう男女共生プラン」を踏まえて11月開催に向けて生活主体者として町政への提言作成のために（議会のしくみ、地域課題）学習準備しております。

第1回平成元年10月・町議会議場に於いて

2. 川俣町「TMO」に出資、個人として高齢者の住みよい地域づくりのために参画します。

会津（北会津村） 男性 40歳代

【意見】

会津若松市は、特に空洞化の進んでいる街だと思います。

10数年前まで賑やかだった俗に言う神明通り近辺は、買い物客もへり郊外にできた新大型店に人は流れていっているようです。もう一度若松市の中心（神明通り）に活気を取り戻せる施策をお願いしたい。

会津（会津若松市） 男性 50歳代

【意見】

- 1 働く場所の確保と交通網の整備（経済の活性化）
- 2 自然を大切にしたい町づくり
- 3 地震や風水害、その他の自然災害を十分に考慮した町づくり
- 4 老後の生活を考慮した施設、設備等の充実
- 5 学校教育環境の整備と学園都市の建設

県北（福島市） 男性 40歳代

【意見】

私たち市民にとって、県と市とを区別することはあまり意味がないように思えます。これからの「まち」づくりは、県と市とが一緒になって進めていかなくてはなりません。

演劇や映画の好きな私は、劇場（会場）や映画館へよく足を運びます。そのとき痛感するのは、市公会堂や文化センターの老朽化です。特に市公会堂のイスはひどく、約3時間もの長い間座り続けるのは中途に休憩があっても「苦しみ」です。本来、文化に触れるのは、「喜び」のはず。それが、古くなったイスのおかげで肉体的な苦痛を受けながらの観劇となってしまいます。逆に映画館は、ワーナーマイカルシネマズにしても福島フォーラムにしても、ゆったりとした座り心地の良いイスで映画を鑑賞できるのです。企業努力と言ってしまうと、それまでですが、あまりの格差に愕然とするばかりです。平和通りの地下

駐車場を生かすためにも新しい文化センターや公会堂が必要です。なぜなら、目的があるから車で移動し駐車するわけです。郊外大型店に人が集まるのも駐車場もあるけど店が魅力的だからです。仙台の繁華街を見ても500～600mくらい平気で歩いてますね。

会津（喜多方市） 男性 50歳代

【意見】

経済のゼロ成長、人口増も期待できない、少子高齢の地域社会を鑑みると「まちづくり」は、そこに住む住民の暮らし良さ、生きがい、健康福祉などを充実すること、その方向を探った方が良いのではないかと。

住民のコミュニティ意識を高めて、地域社会参加やまちづくり（文化・教育をも含めて）へ参加することに人生の満足・価値を見いだしていくことが大切。

県中（郡山市） 女性 50歳代

【意見】

まちづくりを考えた時、やはりみんなが幸せになるまちを創造することではないでしょうか。

市民が「いいまち」と感じることができるまち、それは、一人ひとりの意識や心にあるような気がしてなりません。

どんなに建物の設備が整っても、道路が便利になっても、街並がきれいになっても、その中で生活する市民がしあわせと感じなければ、ハードな部分や表面的なことだけのまちづくりに終わってしまいます。

つまり、「まちづくり」は市民の「意識づくり」も必要だということです。

「このようにすれば」という具体的な案はないのですが、市民が自主的に考えていくことだと思いますので、私自身市民の一人ですので、積極的に関わっていきたくて考えています。現在、私が関わっている「男女共同参画社会」も新しい社会づくりですので、新しいまちづくりにつながるものと思います。

県中（郡山市） 女性 40歳代

【意見】

私は、郡山市の駅にほど近いところに住んでいます。中心市街地は本来、私にとって日常的なショッピングゾーンであっていい場所ですが、私はほとんど利用しません。「なぜ利用しないのか」の理由は、とても簡単、「利用したいと思わない」「利用しにくい」からです。特に最近、それでなくても遠く不便な場所にあった駐輪場が有料化したばかりでなく、ますます駐輪しにくい構造になり、自転車を足とする私をますます遠ざけました。他では、環境への配慮もあり自転車を優先的に扱う街が増えているというのに、逆行するとはどういうことなのでしょうね。

利用者の声が届かない街づくりは、たとえきれいに設けても、当初のものめずらしさでの利用に終わります。フランチャイズの人気店をはりつけても、ストリートそのものの魅力がなければ、いずれまた客足も遠退くでしょう。どうすれば「行きたい」「行きやすい」場所になるのか、個人商店のみの繁盛を目的とするのではなく、イメージを持ったストリート作りの展開を商店会としてすることが必要だと思います。

県中（郡山市） 男性 20歳代

【意見】

私がまず必要だと思うのは、「まちづくり」に関する網羅的なレビューです。都市計画レベルのものから奉仕活動のようなものまで、日本のみならず世界でどんな事例があって、それらはどのように分類でき、またどんな目的、条件、経過だったのか、体系的に捉えられる資料の必要性を感じます。いまのところ、人々は、まちに対してその欠点や改善すべき場所をそれぞれに挙げることはできますが、それらをどう解決すればよいか、その視野も選択肢も非常に狭いような気がします。中心市街地の交通をとっても、例えばLRTの有効性を主張するサイトなどはインターネット上にも溢れていますが、「LRTのうまくいっているところはどこそこ、自転車が親しまれている都市はどこそこ、徒歩のみにこだわって開発されたまちはどこそこ…」といった、俯瞰できる資料はほとんどないのが現状です。まちづくりの成功は、それに取り組む人々のみならず、そのまちに住む人やそのまちを訪れる人々の理解と協力にかかっています。料理でも、少しの料理しか載っていない料理本だったら、手持ちの素材を活かしきれません。いろんな料理の方法とそのうま味を知っていれば、自分の手元の素材についてもすばらしい活用法を発見する近道になるでしょう。人々がより広い視野で、より柔軟にまちを考えられる助けになる資料がぜひとも欲しいところです。

話はかわりますが、下記の文章は、郡山市が行った景観形成についてのアンケートに付加して、私が郡山市に送った意見です。この中で私は、「いっそのこと、建築の外観や街路などのデザイン様式を統一する、というのはどうか」という極端な意見を述べています。ただしこれは、建主の自由な権利を奪っても都市のイメージを固めるのを優先させる、という単純なことではありません。

都市はその中での人間活動を見れば、それぞれはバラバラに日々動いているものですが、一方で、やはり京都には京都らしさ、ニューヨークにはニューヨークらしさという、その都市についてまわるイメージがあります。人間に例えれば、人は日々いろいろなことを考え、様々な行動をしていますが、その考えや行動ひとつひとつとは別に、自分から見た自分のイメージや自分らしさ、または他人が見た自分のイメージやその人らしさ、というものがあり、それが考えや行動と相互に影響し合っているのは、誰しも認める場所だと思います。重要なのは、都市に対しても「この都市のイメージ」なり「この都市らしさ」というものを誰しもが持ち、またそれに親しみをもち、ということだと思います。もちろん、あまりイメージに固執するのも問題ですが、地方の、特に近代以降に発展した都市はイメージがなさすぎる

ということが、近年の「中心市街地の過疎化」の遠因にもなっている気がします。そこで、「その都市らしさ」を住民たちの手で「発見」ないし「発明」する、というところから、総合的なまちづくりをする都市があってもいいのではないか、そのとっかかりとして「デザイン・

1式」をみんなで考えてみるのはどうか、というスタンスでこの意見を出しました。

---（以下、郡山市の景観形成についてのアンケートへの意見）---

大学で環境デザインを学び、東京のランドスケープの設計事務所勤務を経て、郡山にUターンしてきた者です。

中心市街地の活性化・再開発への動きが活発化していますから、合わせて景観を考えることは大変重要なことであると思います。

景観形成についてこれから市民と行政が共にしていくべきことは、「水と緑がきらめく未来都市」という抽象的なテーマを、どう具体的なイメージに変えてその実現を図るか、ということでしょう。そこが充分になされないまま、条例の制定をはじめ各種事業が行われてしまうと、市民の関心が薄れ、結果「顔のない街、特徴のない都市」という印象がつきまとうてしまうことになりかねないと思います。

市民が景観、ひいては郡山の都市像により関心を持てるようにするためには、市民ひとりひとりに、もしかしたら自分の意見が郡山の未来の都市像を左右するかもしれない、という意識をもってもらうことが肝心だと思います。大勢が見えてしまう選挙は投票率が下がります。結果、政治への無関心・無責任を助長してしまう。都市についても同じことだと思います。具体的には、最終的な景観イメージの決定のところで住民投票が必要だと考えます。

まず、景観条例の制定という狭い枠ではなく、「都市像を創る」という一大プロジェクトにすべきだと思います。都市の景観イメージが具体的に浮かぶ都市というのは、京都やロンドンやフィレンツェなど歴史の古い都市ばかりです。これらの都市では建物のデザイン様式を統一させることで、街並みのイメージが固定されているわけです。シドニーはオペラハウスを取り除くと、パッと見ニューヨークと区別が付きません。近代建築に覆われた都市では、ランドマークに頼って都市のイメージをつくっているところが意外と多く、街並みのデザインが統一されているために個性的な都市というのはほとんどありません。例外はアメリカで最近流行っている「TND開発」と呼ばれる、テーマ性のある住宅地開発ですが、既存の都市に行っているものではありません。キャンベラやブラジリアなど完全に都市計画で造った都市も、デザイン様式の統一で街並みに個性をもたせる、という方法論はとっていません。

ラディカルな意見ではありますが、中心市街地の建物のファサードと主要な公共施設の外観のデザイン様式を数十年かけて統一していく、ということをする都市があってもいいと思います。これらが統一されれば民家や工場も影響を受けるでしょう。近代以後発展した都市で統一された個性的な景観を形成できれば、前例のない世界に誇れる都市、ということができると思います。いまのままでは幕張や埼玉新都心のような都市ばかりが増えていくでしょう。それも時代時代の建築の流行り廃りで「都市の顔」が数十年ごとにコロコロ変わるこ

になります。

デザイン統一の具体的な過程としては、まず、このようなアンケートをはじめ各調査で市民の意思を拾い、都市や建築の専門家に100年先を考えたデザイン様式を創出してもらいます。ただ、「未来都市」といっても、大阪万博時代の未来といまの未来が違うことは、うつくしま未来博が体現しています。この段階ではなるべく多様なデザインが出てくるほうがいいでしょう。また、できるだけヴィジュアル化して欲しいと思います。パース画はもちろん、CGで現在の郡山の地形や道路、遠方の景色に合わせ、いろんな場所の想像図を作成し、市民に見せるのが重要だと思います。そこで市民の意見を集め、また専門家にデザインを頼み、ということは何度も繰り返します。初期の頃は、デザイン様式を国際的學生コンペで募る、という手もあるでしょう。ビッグパレットや美術館で、都市デザインシンポジウムや都市景観・建築のデザイン様式に関する展覧会を開くなど、市民の啓蒙も長期に渡ってする必要があります。

候補が絞り込まれたら、それぞれのデザイン様式について具体的な建築基準(コード)を決めます。アーケードや標識、舗装、ストリートファニチャーのデザインも合わせて細かく決めます。そして、それらすべてを住民投票にかけるべきでしょう。条例の適用は時間をかけてゆっくりでも構わないと思います。そのぶん、永続して親しまれる普遍性を持ったデザインの選出をするわけですから。市民も、自分もいっしょになって考えた、という意識があれば、都市に愛着を持つはずで。いまの再開発事業は、大規模なほど肝心のデザインの部分を専門家に丸投げしてしまっています。郡山にはこの傾向をぜひ打破してもらいたいと希望してやみません。

さて、長くなりましたが、最後により現実的な意見です。

景観条例をつくって、エゲツない看板や広告を規制するのは当然するべきですが、駅前中心街の一角に、原宿の竹下通りや上野のアメ横のような、狭くても看板や広告の規制がゆるい「界限」をつくる余地を残して欲しいと思います。大きな通りは、きれいでデザイン的に洗練されていることにこしたことはありませんが、街には縁日に並ぶ出店のような雑然とした雰囲気のある場所が、活気の源として必要です。これはデパートなどひとつの建物の中ではなく、やはり通りに必要なのです。すべてがきれいで整っている街の負の面は、幕張ベイタウンにすでに表れています。あそこでも定期的にストリートマーケットを開き、なんとかしてにぎわいを創出しようとしています。郡山ぐらいの規模であれば、街の個性の一部として常に「界限」が欲しいところです。そこでの有機的な人と人の交流は、郊外の商業施設では決して創りだせません。ぜひとも中心街一律で景観条例を施行せず、特別区を設けて欲しいと願います。

県南(白河市) 女性 40歳代

【意見】

日本は物質の豊かさばかり追求していた20世紀に終止符が打たれ、真の豊かさを求める

気運が高まってきています。

さて、私たちが求める本当の豊かさとは何でしょう。それは、“人間が人間として人間らしく生き生きと生活している事”ではないでしょうか。男も女も、子供も大人も、元気な人も病気の人もそして、社会的に地位の高い人もそうでない人も、みんな一人の人間として尊重される社会。それが、21世紀の私たちが望むライフスタイルだと思います。

そういう社会づくりが、これからの「まちづくり」ではないでしょうか。

では、そういう「まちづくり」はどうすれば実現できるのか。それは一人でも多くの住民の声（意見）を聞き、実行していく事だと思います。これまでのような、役所がすべて机上で計画・立案し、ほとんど市民の声など反映されないまま、様々な計画が進められてしまうような行政。とりあえず市民参加の形だけをとるための検討委員会を開くが中味は、「異議なし」「賛成」。こういうものではなく、最初から、スタートから市民と一緒に考えていくシステムが重要だと思います。

それらを実現するには、行政と市民そして企業の連携、パートナーシップが最も重要なポイントになるかと思えます。しかしそこには、いくつかの大きな飛び越えなくては行けないハードルがあるようです。

まず一つは、行政側が今までの行政主導から脱却することです。どうも‘市民の声’イコール反対意見と捉え構えてしまう人も多いように思います。何のために役所があるのか？そこに生活する人が、少しでも幸せな生活を送れるように、法律上や事務上やっかいな業務をまとめてやっているだけです。そこに生活する人がちっとも幸せを感じられないような役所では困ります。

また、行政は、住民が自分の思っていること、考えていることを忌憚なく発表できる機会をできるだけ多く企画する事が大切ですが、住民側の方もまだそういう経験が少ないためなかなか発言できなかったり、地域での役割や職場での役職等を重んじ遠慮してしまう風潮が往々にしてあること。このような点を克服しながら多くの住民に「自分はどんな街にすみたいのか？」「これからどんな街になったらもっと楽しく幸せになれるだろうか？」「まちづくり」は一朝にしてできるものではありません。ひとつのプロジェクトに5年や10年はあつという間です。目先の利害だけでは「まちづくり」はできません。つねに5年後、10年後を念頭において考えることが大事です。「自分たちの子供や孫が幸せに生きるには・・・」と長期的な視点を持ってもらう必要があります。

いままでのような「・・・会の会長」であるとか「・・・団体の代表」とかそんな宛職の参加者なんていないのです。ごく普通の会社員とか主婦であるとかまた高校生なんかもとても良いと思う、そんな人たちが自分たちのまちの良いところ、悪いところなど自由に話し合うことが、初めの一步ではないかと思っています。

このような観点から、今回の企画の第1部：一般県民にはとても興味深いものがあります。人数を確保するための動員や宛職での参加ではただ‘やればいいんだ’だけの懇談会で終わってしまうような気がします。それでは、「まちづくり」なんて盛り上がりません。体裁

を整えるための参加者より本気で考える人数の参加者の方が、絶対に重要なはずで。

少子高齢化社会問題は、毎日のようにマスコミを賑わせ、今やこの5文字の熟語を知らない人はいないほどでしょう。高齢化は、悪いことではありません。誰もが健康で長生きをしたいという願望があるのです。しかし、医療や保健制度の先々を考えると問題点が多いという事ですね！そこにきてこれからのその医療や保健を支える子供達が減少していることが大問題なのです。

一般的に働く女性が増えた事に、大きな原因があるとされています。しかし、単に「働く女性が増えたこと」なんて片づけられません。これからは、ますます女性も社会で活躍する社会になるのです。またそれを目指して国も県も市町村も「男女共同参画」を大きく揚げ取り組んでいるのです。

家庭における男女の平等、また職場における男女の平等そして地域における男女の平等が不十分なところに問題があるのです。男女に大きな差があり女性に強いられる負担が大きい所が問題なのです。8月20日付けの日経新聞に企業における男女格差・差別に対する積極策はあるのか？のアンケート調査の結果が掲載されていましたが、3割の企業は「予定なし」これらの言葉すら知らない企業も1割を越えていた。企業の経営者に「女性差別の意識」が乏しいことも働く女性が子供を産む事に迷いを持ってしまうことは明らかである。そのほか、教育費や就労中の育児機関の不備も大きな問題ではあるが・・・

ちなみにスウェーデンでは、働く女性ほど子供が多いという調査結果があるのです。女性が元気で活発なまちほど、良い「まちづくり」ができると専門家は、女性を「まちづくり委員会等」へ参加を促しているくらいです。

職場は、女性に対し補助的な仕事ばかりでなく、やりがいを感じて働けるような能力に応じた仕事内容と育児への配慮、また行政は地域と共に子供産み育てる世代の人達が安心して働くことができる、子育てサポート体制を充実させること、そして家庭においてはバランスのとれた家事分担ができるようになれば、少なくとも少子化の歯止めにはなるのではないのでしょうか。

県中（大越町） 男性 60歳代

【意見】

私たちの地域（日山行政区）とありますが、町内で長寿者が一番多く、平成5年、町の地域づくりモデル地区として指定を受け、高齢になっても障害をもっていきいきと暮らせる地域をめざして活動しています。

福島県まちづくり懇談会の参考になるかわかりませんが参加させていただきます。

いわき（いわき市） 男性 30歳代

【意見】

小名浜におきましても中心市街地の空洞化は切実なる問題です。TMOの認定が1行政区

につき、1ヶ所という中、他に同様の方法での施策がかないかという点。(商店街は単に1店舗あたりの問題でなく、まちづくりの観点からトータル的に管理運営をしていく必要がある点)において、並びにバイパス道路の建設に伴いその沿道への店舗の進出について、規制の必要性について(現役の沿道商店街が死んでしまう為)で質問したいと考えます。

いわき(いわき市) 女性 40歳代

【意見】

- 1 住民一人一人が自分の住む町をよくしようという意識をもつこと
市・町が私たちに何をしてくれるか期待するのではなく、私達が市や町に何が出来るのという考え方が大切なのは。
- 2 子供から高齢者まで、自分の住む町を自慢できるような、誰でもが住みやすい町であるよう。(若者にも高齢者にも魅力のある町であるように)
- 3 男女を問わずそれぞれの個性や能力が十分に発揮できる町であるように
地区、町内会等で女性がその個性や能力を發揮できるような住民の意識の改革が必要である。(まだまだ、区長、行政嘱託員は男性のみである。地域との関わりに男女差ではなく、個人としての関わり方が必要である。ジェンダーに敏感な視点のまちづくりを！

いわき(いわき市) 女性 40歳代

【意見】

郊外に住み、大駐車場完備の大型店舗で買物の生活、町の中(中心市街地)を歩くことは滅多にありません。

用事がないので行かないというのが現状ですが、目的や用事がなくても出かけたくなる(歩きたくなる)町であればと思います。単発的なイベントで人を集めるのではなく、そこに行けば何か楽しめる、時間をつぶせる、憩える、そんな場所が町の中にあれば、自然と人は集まり町に活気が戻ると思います。

他にも、空店舗の一角の活用法を学生にまかせるというのもどうでしょうか?学生の情報発信の場があって町に若者が集まってくるというのも楽しいと思います。

県南(白河市) 女性 50歳代

【意見】

行政の一部の人、市民の一部の人等によって町が動かされている。(本当の市民の声が正しく生かされていない)

市会議員 市のチェック機能であるべきなのに、異常と思うくらい、市会議員と市職員との間に緊張感がない。

白河市民の一部では沈黙は美德とされ、陰で口を聞くのが本音のようです。

本音で語り、市民の声が大きく生かされる様なリーダーを私達は選ぶ必要があると思う。

会津（会津若松市） 男性 60歳代

【意見】

会津若松市では、数年前に市が中心となって、会津若松駅西地区に市役所などの官公庁街を新設する「計画」を発表し、間もなく財政緊迫を理由に凍結した。

市長期総合計画にない駅西地区開発計画は、中心市街地が過疎化市道路通行量が激減し、老朽化した神明通り商店街アーケードの改築計画が後継者不足と重なり頓挫するなかで突然発表された。

市政だよりでは、県や中央官庁の同意や積極的支援があることが強調された。

前後して、県の神明通り立体大駐車場建設計画が中止となった。

開発計画の策定と評価に時間がかかり、その迷走による住民被害は大きい。

行政が開発・建設計画を立て、郊外に大型道路を配置し団地を設け、小中学校を建設し、中心部の地価が下がっても固定資産税を上げていけば若いマイカー世代の住居が郊外に移り、生活に合わせ商業地区が移転するのは当然である。

門田地区には、富士通工場が増設されて小規模の住宅団地が幾つか生まれた。

更に富士通の新工場が高久地区に建設されたが、IT不況によって市経済への影響は楽観を許さない。

門田地区では、来年から三校目の市立小金井小学校の建設工事が始まる。

中心市街地の活性化事業と並行させる財政余力があるかどうか疑問がある。

鶴城、謹教、行仁、城北などの中心部小学校は在籍数がほぼ半減した。

児童数、通学距離から見ると学区の弾力的運用で対応できる範囲である。市内の児童数は、平成になってから約2200名、小学校三校分程度が減っていて、今後も減少は続くが20年前の学校建設計画は継続中である。

すでに大都市では、福祉、教育、医療などの水準の高い中心市街地区へ人口の還流が始まり路線価の上昇が始まっている。

会津若松駅から門田町までの国道118号線の拡幅工事はこの数年急ピッチで進行し、バイパスの多くが開通して、道路交通は非常に改善されつつある。

市以外の会津地域の高齢化率は、2030年頃の全国平均並みに高い。

市の今の人口構成だけで判断するのは誤りである。

バス自転車や徒歩で生活できるネットワークがある街を再生する条件が、戊辰戦争で壊滅しその後人口十万台に成長し、半径3キロ以内に学校、病院、幼稚園、保育所、官公庁等の約8割が集中するこの市には整っている。

拡散した住宅と商業施設の一部をどう回帰させるかが最大の課題である。

会津（会津坂下町） 男性 30歳代

【意見】

私は、現在住んでいる町、地域が好きです。中心市街地より離れて買物に行く場合、病院に行く場合など自動車を使用しなければならず、不便になりますが、郊外大型店などが立地して便利になりました。

中心市街地の空洞化が問題になっていますが、目的を持ったそれぞれの「まちづくり」が必要ではないでしょうか？（例えば、観光を中心とした通りづくりやホームセンターだけが建ち並ぶ通りづくりなど・・・）

県中（本宮町） 男性 60歳代

【意見】

広域行政圏のような概念の基にバランスのとれたまちづくりを追求したい。

1. 私たちの住む町が持つべき要素を具体的にピックアップし、幼児・子供・若者・若夫婦・中年・老人・健常者・障害者・交通弱者等の立場から現状分析して、これからの町づくりを考えてみたい。
2. 官・民・NPOの分担について
3. 住民が不便を我慢すべき許容範囲について

例えば、

労働 働ける場所・通勤時間・働きたい仕事、買物、病院、救急体制、特別養護老人ホーム、老人介護サービス・ショートステイ、障害者サービス・ショートステイ・・・

県中（三春町） 女性 40歳代

【意見】

三春町のまちづくりについて意見を述べさせていただきます。

まず、ハード面ですが、若年層の方々は、車で郊外の大型店に買物に行くのが増えています。実際、私も駐車場が広く、何でも取りそろえてある大型スーパーに行くことが多いのです。このような現状を考えると高齢者の方に焦点をおき、車がなくても散歩しながら買物が楽しめるような町づくりを考えるべきなのかもしれません。そのために、まずバリアフリーの町にし、高齢者の方もゆっくり買物ができるような静かな店、そして、休憩をとるための公園などもあった方が良いでしょう。ソフト面では、子供達の教育に力を入れ、勉学面も重要ですが、道徳面に特に力を入れ、町で出会ったら誰にでも挨拶ができるようなそんな町にしたいと思います。

県中（三春町） 女性 50歳代

【意見】

まちづくりと一言でいいますが、大変広くつかみどころがないなと考えています。このこ

とを考えるとときにあらゆる角度からのテーマを考えてまちづくりをしぼりこんで、いくのもひとつかと思えます。

例えば、高齢化社会をテーマに、少子化をテーマに、中心地活性化をテーマに、農業振興をテーマに、自然環境の保全をテーマに考えるとき、それらの公約数をまちづくりの核とするか、又は、それぞれのテーマの1つ1つを重要施策にして町の特徴を出したまちづくりにするか等々、とにかく、一町民が「自分のまちはこんなこんなまちづくりをしているのだ。」とわかるようなまちづくりをしてもらいたいと思えます。 わかりやすいまちづくり

インターネット等の発展によって、情報が早いことがひとり歩きをしていることで、現実とのギャップが大きくなっているためのひずみが出ているのではと思われます。従って、ふれあいを大切にしたいまちづくりが必要かと思えます。

相双（相馬市） 女性 30歳代

【意見】

「まちづくり」をする人が足で歩かなければ、少子高齢社会に対応するやさしいまちづくりは出来ないと思えます。確かに車を利用する世代にはどんどん便利な街になっています。

しかし、自動車が歩道に乗りあげる時、2～3cmの段差が危険である事や側溝のフタが無い箇所がいかにかいかに多いか、これによって車をさけきれなかったり、夜間に足を踏み外したり、また、伸び放題の雑草や木が視界をさえぎる危険など自分たちの足で歩かなければ分からないことが多くあると思えます。

会津（会津若松市） 女性 50歳代

【意見】

街の中から、魚屋、青果屋が消え、小さなスーパーも少なくなり、郊外の大型スーパーに移っていった街の中に済んでいる者にとってそれを追いかけて行く訳にも行かない。車社会とはいえ、100%の人がそうではない。何もかも大型になり、心の中は反比例して小さくなっていく。街の中の空洞化が多くなった今、さあ「まちづくり」だとさわぎ始めて久しいが、行政側はいろいろ理由をつけて本当に住民のための「まち」を考えてくれるのだろうか。梓の中でしか考えていないように見受けられることも多くあります。かっこよい街ではなく住民のための街であるような「まちづくり」を望みます。あまり既成概念にとらわれず柔軟性のある方向に進めていただきたい。住民の夢を聴き、「前例がない」等と言わずに、多くの住民の小さな意見に耳をかしていただきたい。

いわき（いわき市） 女性 50歳代

【意見】

- ・ いわき駅前の整備が進まない。長距離バス、バス停の発着所がバラバラである。タクシー乗り場なども含め一カ所に集約し立体化したら駅前はずっきりして歩きやすくなる

のではないか。

- ・ 市街地の空洞化が進み、駐車場となって散在している。この様な所を集め、共同ビルをつくり、その中に商店、住居、イベント（コミュニティ）広場、駐車場など確保し、文化施設、学習、情報施設を置き、地域住民がいつでも利用できる場所があったら楽しいと思う。
- ・ 住宅などの開発があっちこっちと進められているが、緑を残す所（開発しない）と市街地の様に開発する所はきちんと決め、中途半端なやり方はしないこと。

県北（福島市） 女性 50歳代

【意見】

家族で2年間、アメリカオレゴン州ポートランド市に住みましたが、とてもきれいで落ち着いた都市でした。8月21日付けの読売新聞に掲載された五十嵐氏の意見に賛成です。（資料添付）

（社）日本助産婦会福島県支部子育て女性支援センター福島として、電話での無料相談をしています。（3年目になります。）

出産の前後の相談が多いのですが、乳幼児虐待や性についての悩み、近親相姦についても相談があります。（公的機関には相談したくないという人が電話してくる。）

最近、家庭的な所でお産をしたいが助産院は無いかという相談もあります。残念ながら福島市には有床の助産院が無くなりました。少子化、住みよいまちを考えるとバースセンター（助産婦が常駐）が欲しいと思います。

県中（三春町） 男性

【意見】

「農と共生の世紀づくり」をテーマとして今JAグループが取り組んでいる。当三春町の活性化を考えると飲食業の発展こそ三春町の発展また地域の発展につながるのではないかと思います。

地産地消 地元生産の農産物を地元で消費できる農と農産物の加工と消費、消費する場所を他に求めない加工品の販売方法の確立、地場産品の特色ある販売。例えば、馬鈴薯（三春いも）のコロッケの加工または澱粉の抽出、抽出した澱粉を利用した加工品の販売を三春町の飲食業を中心として販売していく。

また、麦の生産量を多くし三春そうめんの復活または三春町独特のうどん、ピーマンを利用したピーマンスープの開発などをテーマとして農業、商業、飲食業、各業種協力の上、三春町をアピールし、「生産の三春町、アイデアの三春町、消費の三春町、観光の三春町」として町の活性化を図っていくこと。外形は変わらなくとも中身で勝負でのまちづくりにしていけば良いのではないかと思います。飲食業も地場産品を利用した「まいもん店」として売り出せば活性化できるように思いますので意見として伝えていただきたいと思いま

す。

県北（福島市） 男性 20歳代

【意見】

私たちの世代には、こだわりというものがなくなっているような気がします。その背景には、大量消費・大量生産という社会も考えられると思います。そのため、自分が住む「まち」というものにもこだわり、愛着というものがもてなくなっていると思います。まちづくりへの第一歩は、自分が住んでいる「まち」に対して、こだわりをもつことだと思います。特に、私たちの世代にはこの点が求められていると思います。

会津（猪苗代） 男性 50歳代

【意見】

現在、革命中とも戦争中とも言われています。

少なくとも、20世紀から21世紀へダイナミックに社会が変わろうとしているのは事実です。

会津はますます他地域の人からうらやましがられている。しかし、地元の人々には閉塞感がただよっている。子供達の心の荒廃が心配。

地方分権は、ますます地域間競争の激化。しかし、会津は目先のことばかりに目をとられている。

自分たちの住んでいる地域の再認識と「ビジョン」と「実行」

といつもいわれながら何もかわらない コーディネーター、シンクタンク、必要性

県中（須賀川市） 男性 60歳代

6町内会（約1万3千軒）で協議会を結成、

町内にある伝統行事のサポート掘り起こし

共通意識の高揚行事として、「軒先行灯」と「のれん」の設置

「うつくしま未来博」の誘客・PRキャンペーン

「うつくしま未来博」回遊事業の展開（ギャラリー設置など）

ホームページにて行事案内

チャチャチャ21は元気の素

来年もおもしろい

県北（保原町） 男性 60歳代

【意見】

まちづくりの要素は、そのまちの行政と商業者（商工会）、そして消費者の方々と一体にならないと成功しない。

各人、各称、そして立場が違ふと見る目が違ふし、変わった意見も出る。それがないと何回懇談会を開いても生え進まない。

可能性のある部分をピックアップして図式を示し、細部の検討をする。

立地条件、資金の調達、経営者の心構え、そして思いやりがあると大体まとまるのかと思う。最後に決断か？

県南（白河市） 男性 40歳代

【意見】

中心市街地を生き残らせるには、とにかく人に住んでもらわれなければと考えます。そのためには人にやさしい、環境にやさしい街づくりをコンセプトとして、地権者の銀行への担保価値をさげずに、地代、家賃を安くさせる施策が必要と考えます。

いずにしても、中心地に人を住みませず法的優遇措置以外には、外に手だてはない。

県中（郡山市） 女性 70歳代

- ・ 各市、町の長がまちづくりに対しどう考え、それを行政がどう具体化しているか、また、中心市街地に住んでいる人たちはどう考えているか、三者の考えと行動が一致することが大切。
- ・ 郊外大型店を敵視している商店も見られるが、なぜ、郊外大型店が消費者に受け入れられているかを謙虚に検討し、市中心市街地の各商店が大型店（デパート）の一角であるという考え方、また、郊外大型店と共存する術をとり、補助金、行政に頼り過ぎないことも大切だと思う。

市中心市街地が空洞化しても一般市民には現在のところ何ら不便もないし、ゆとりを求め中心市街地の人たちも住民は郊外に求めているのが現状であり、何か矛盾を感じる。

県南（鮫川村） 男性 40歳代

【意見】

取り急ぎ「バカ又はアホ」と言われる人が数人いれば、まちづくりは成功する。反面、地域的な経済や地域性に恵まれて、ぬるま湯に浸って危機感がない「まち」へはなかなかバカやアホが生まれにくいのも事実。

子供や孫に残せる誇りあるふるさとを残すのがまちづくりを実践している。アホやバカの指名、目的を達成するには官民が一体となった両輪が不可欠。何度も何度も失敗しても繰り返し繰り返し薄紙を貼っていくのがまちづくり。

会津（田島町） 男性 30歳代

【意見】

「まちづくり」はハード、ソフト両面で様々な人達が参加しておりますが、陽も当たらずのところでコツコツ元気で頑張っている方々をどう支援していくかが課題。私は自らおかれている組織的立場で多くの仲間と共に行動することが第一と考えております。また常に行政と共にを願っております。それは結果が良く出ることです。

役務分担によって結果が良く出ることにより、「やりがい」が共に感受できるからです。共に良い汗をかくことが大事と思っております。

県北（保原町） 男性 60歳代

【意見】

活気ある街のまちづくりを是非、達成したいものです。

第一は、官の強力な指導力が必要だと考えます。第二は、民のやる気とアイデアと経済力だと思えます。

また、多くの街と人々の協力、地域づくりに対する情熱だと考えます。

もちろん、経済が冷え込んでいるので。官からの財政援助も必要かなと思えます。情報の公開と限らない民の協力で活気ある「まちづくり」ができるのではと考えております。

県北（本宮町） 男性 60歳代

【意見】

新世紀にふさわしい、まちづくりのため、県民の意見を反映させることは、発想の転換として、素晴らしいことと思えます。

県民（地域住民）参加によって具体的な改善指標を示し、推進することが必要です。それには、地域の産業経済・教育文化・レジャーなどについて、もう一度見直し、同時に環境衛生・保健福祉などの充実も不可欠であります。中心市街地の活性化の一つの例として、空洞化商業地の街路や道路をコミュニティーモール化し、買物などを楽しみ、集い、憩う歩行者優先の空間をつくることも一つの考えと思えます。私は、障害者でありますので、障害者の立場からノーマライゼーション「共に生きる社会」の理念のもとお互いに助け合い、思いやりのある、心ふれあう、人に優しい「バリアフリー」で「ユニバーサルデザイン」の暮らしやすい、まちづくりを考えて見たいと思えます。

相双（大熊町） 女性 40歳代

【意見】

私の大熊町をみると、施設面では十分かと思えます。ただ、そこに人を集めてイベントなどが出来ていないことです。

- ・ 子供から老人まで皆で楽しめる遊戯施設
- ・ 緑あふれる憩いの場

商店街には元気が必要。町づくりにも元気な人づくりが必要。最近、私達もがんばる商店会を立ち上げたところです。元気でがんばる所には、人は集まり、にぎわいのある町になるのではないかと考えております。

相双（大熊町） 女性 40歳代

【意見】

「町づくり」ここ数年よく耳にする言葉です。

出口の見えない所を歩き回っている。これといった明確な方向を示す事も困難なことと思います。しかし、そんな状況でも自分の町に合った「町づくり」を模索していかなければなりません。私は大きく2つに分けられると思います。

1. ソフト面です。「人づくり」一人一人が楽しんで参加できるものを見つける。その仲間の輪を広げる。その人達が各地域の核になり、そこで輪を広げていく。
2. ハード面です。行政側の規制緩和と環境整備
内面が一緒に協力し合って進め行く事が大切ではないでしょうか。

いわき（いわき市） 女性 50歳代

【意見】

女性の感性をまちづくりに生かそうということで各地でいろいろな会が発足しています。うまく行っているその会には必ずサポーターとして男性がいます。男女共同参画社会は言葉だけではなく実際に行動をしてこそ実現されます。

一人が一步を踏み出すためには何が大事かちょっとだけ先に進んで行った人の声かけです。自分らしくできることから始めること。楽しみながらが大切です。

会津（会津若松市） 女性 60歳代

【意見】

「まち」に何を期待しているかどうかで考えが異なると思います。売り手を買手といった商業“街”をイメージすると現在の生活形態からは違ってくると思います。

県北（桑折町）男性 30歳代

【意見】

私の考えるまちづくりとは、歴史・伝統・文化を継承しつつ新たな伝統文化を構築することだと考えます。

新たな文化が骨幹となり、それを取り巻くように枝葉が伸び、一つの大木が出来るような、中途半端ではなく“こだわり”を持ったまちづくりが必要なのでは。

県南（白河市） 女性 40歳代

【意見】

白河に住むようになって20年強となりましたが、正直いってこの街をまだ好きになれずにいます。夏涼しくは良しとし、冬は那須おろしで頬がいたくなるほどの天候・気候にもよりますが、やはり「まち」のあり方にも問題があると思います。豊北の玄関口とはいってもこれといった産業、特徴があるわけではなくむしろ他の近隣都市に追われがちで、ものおこしものくらい進んでいるのか。そうしている私も消極的にではなく「もっとこのまちの現状を知らないといけない。」と思っています。

県南（白河市） 女性 50歳代

【意見】

白河市には近年たくさんの大型店が進出し、車社会とともに客足は大型店へと流れています。私の住んでいる旧市内の本通りはシャッターのおりている店が次から次へと増え、往年の面影は少しずつ消えていっています。

しかし、大型店の買いやすさ、便利さの裏側に、人と人との触れ合いの希薄さ、殺伐とした商品化社会の無味乾燥も感じて帰ってくるのも事実です。中心市街地を少子高齢化社会に対応すべく、子供達が夢を抱けるような場、お年寄達が安心して買い物ができる、あるいは集えるような場としての機能はつくれないのでしょうか。また岐阜の高山や埼玉の川越のように「からくり人形」「朝市」「祭り」といった特色を打ち出し、この街に行くと何か楽しいことに出会える、人のぬくもりを感じるという町づくりを考えていきたいものです。